

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第138集

比企郡嵐山町

お お の だ に し
大 野 田 西 遺 跡

嵐山工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

—Ⅱ—

1994

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



第18号住居跡出土 ミニチュア土器



第18号住居跡遺物出土状況



土製勾玉



筒形土偶

序

のどかな自然環境に恵まれ、国蝶オオムラサキの里として知られる嵐山町は、武蔵武士畠山重忠を育んだ地としても有名です。一帯には武蔵武士の活躍に関連する史跡をはじめ、縄文時代から中・近世に至るまでの多くの遺跡が残り、独特の歴史的景観を醸し出しています。県教育委員会ではこのような歴史的環境に鑑みて県立歴史資料館を設置し、本県の歴史研究の拠点的作用を担ってきました。

このたび、この自然と歴史の町にも、工業化の促進と調和のとれた開発を目途として、工業団地の造成が計画されました。

事業地内には計8か所の遺跡が確認されたため、関係機関の協議が重ねられた結果、埋蔵文化財の取り扱いについては当事業団が発掘調査を実施し、その記録を残すこととなりました。

大野田西遺跡はそれらの遺跡の一つであります。調査の結果、弥生時代後期の集落跡であることが判明し、土器・石器類を中心とした多くの遺物が出土しました。なかでも祀りに使われたミニチュア土器、土製の勾玉などが豊富で注目されます。

本書が埋蔵文化財の保護、文化財保護思想の普及・啓蒙、学術研究の基礎資料として、さらに教育機関等の参考資料として広く御活用いただければ幸いです。

報告書刊行にあたり、発掘調査における調整に御尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から本書の刊行に至るまで多大なる御協力をいただきました埼玉県企業局土地開発第二課、同北部土地開発事務所、嵐山町教育委員会並びに地元関係各位に深く御礼申し上げます。

平成6年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井 桂

例 言

- 1 本書は、埼玉県比企郡嵐山町大字勝田字大野田592番地他に所在する大野田西遺跡の発掘調査報告書である。

文化庁指示通知は平成5年1月8日付委保第5の1376号である。遺跡略号はONDNである。

- 2 発掘調査は嵐山工業団地造成事業に伴うものであり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県企業局の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

- 3 嵐山工業団地造成事業の既刊発掘調査報告書は下記のとおりである。

『蟹沢・芳沼入・芳沼入下・新田坊・尺尻・尺尻北・大野田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第119集 1992

- 4 発掘調査は磯崎一、福田聖、佐藤康二が担当し、平成4年8月1日から平成5年3月31日まで実施した。整理作業は佐藤が担当し、平成5年4月1日から平成6年3月31日まで実施した。発掘調査・整理作業の組織は2ページに示した。

- 5 本書の執筆は、第I章1を文化財保護課、第III章3-(1)の土偶を浜野美代子、他は佐藤が行った。

- 6 図版作成、写真撮影は下記のものが行った。

図版作成 佐藤（ただし、土偶の実測は浜野が行った。）

発掘調査撮影 磯崎、福田、佐藤

遺物撮影 佐藤

- 7 本書の編集は、資料部資料整理第1課の佐藤が行った。

- 8 本書に掲載した資料は、平成6年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

- 9 遺跡の基準点測量、航空写真撮影は株式会社東京航業研究所、土器の胎土分析は第四紀地質研究所にそれぞれ委託した。グラビア遺物写真は折原基久氏に委託した。

- 10 本書の作成に際し、下記の方々から御教示・御協力を賜った。（敬称略）

麻生 優、新井 端、植木 弘、岡本東三、木村俊彦

凡 例

1 X・Yによる座標指示は国家標準直角座標第IV系に基づく座標値を表し、方位は全て座標北を示す。

2 本書に掲載した挿図内では遺構の名称を次のように表記した。

S J…住居跡 S K…土壇 S E…井戸 P…ピット

3 本文中記した谷および丘陵の名称は、その谷の谷頭にある溜池名をもとに、丘陵の名称は隣接する溜池名をもとにした仮称である（第119集参照）。

4 本書に掲載した遺構図版の縮尺は、住居跡、土壇とも1/60を原則としたが大型住居跡は1/80である。例外的なものはスケールで指示した。

5 遺構図中に示したドットは遺物の出土位置及び接合関係を示し、●は土器を、○はミニチュア土器、土製品を、▲は石器を表している。ナンバーは遺物実測図のそれと一致する。

6 遺構図中のスクリーントーン等の凡例は以下のとおりである。



7 海拔標高の表示は、遺構の土層断面の水平表示線に表記した。

8 遺物の縮尺は以下の通りであり、例外的なものはスケールで表示してある。

縄文・弥生土器の拓影図 1/3 弥生土器の実測図 1/3・1/4
石器の実測図 2/3・1/3

9 土器実測図のスクリーントーンは赤彩痕、石器実測図のものは赤褐色の付着物を示す。

10 遺物観察表の凡例は以下のとおりである。

- 大きさの数値の単位はcmを示す。なお()内の数値は残存高を示す。
- 焼成は良好なものをA、不良なものをC、両者の中間をBとした。
- 色調は、『新版標準土色帖』（農林省水産技術会議事務局監修1967）に照らし合わせ、最も近い色相を記した。
- 胎土は含有物の粒度と特徴によって分類し、各々の組み合わせによって示す。
 - a) 粒度は、細 1.0mm以下、粗 1.0～2.0mm、礫 2.0mm以上の3段階とした。
 - b) 含有物は(w)白色粒子、(b)黑色粒子、(g)灰色粒子、(r)赤色粒子、(u)雲母、(針)白色針状物質、(s)砂粒を示す。透明度の高いものは'を付した。
- 残存率は実測図に示した部位に対する比率で5%刻みで表した。ただし破片の場合は、図で示した残存部位に対するもので必ずしも全体に占める残存率を表示していない。

目 次

口 絵	
序	
例 言	
凡 例	
I 調査の概要	1
1 発掘調査に至るまでの経過	1
2 発掘調査と整理事業の組織	2
3 発掘調査・整理作業の経過	3
II 遺跡の立地と環境	4
1 遺跡の立地	4
2 歴史的環境と周辺の遺跡	5
3 周辺の吉ヶ谷集落について	7
4 事業地内の遺跡	10
III 遺構と出土遺物	12
1 概要	12
2 弥生時代の遺構と遺物	15
(1) 概要	15
(2) 第1住居跡群の遺構と遺物	16
(3) 第2住居跡群の遺構と遺物	90
(4) 第3住居跡群周辺の遺構と遺物	97
(5) 南遺物包含層	103
(6) グリッド出土・表採遺物	105
3 その他の遺構と遺物	107
(1) 縄文時代の遺物	107
(2) 弥生時代中期の遺物	114
(3) 奈良時代の遺構と遺物	114
(4) その他の遺構	116
IV 発掘調査の成果と課題	120
土器	120
石器	130
住居跡	133
付編 大野田西遺跡出土土器胎土分析	138
1 X線回析試験及び電子顕微鏡観察	138
2 成果と課題	146

挿 図 目 次

第1図	埼玉県の地形 (原図 堀口1986) … 4	第35図	第13号住居跡出土遺物 …… 48
第2図	周辺遺跡分布図 …… 6	第36図	第14号住居跡 …… 50
第3図	吉ヶ谷集落分布図 …… 8	第37図	第14号住居跡出土遺物 …… 50
第4図	事業地内の遺跡 …… 11	第38図	第15号住居跡 …… 52
第5図	地形断面模式図 (原図 川口1992) 12	第39図	第15号住居跡遺物出土状況 …… 53
第6図	調査区全測図 …… 13	第40図	第15号住居跡出土遺物 (1) …… 54
第7図	第1住居跡群全測図 …… 17	第41図	第15号住居跡出土遺物 (2) …… 55
第8図	第1号住居跡 …… 18	第42図	第16号住居跡 …… 57
第9図	第1号住居跡炭化材出土状況 …… 19	第43図	第16号住居跡出土遺物 …… 57
第10図	第1号住居跡出土遺物 …… 19	第44図	第18号住居跡 …… 58
第11図	第2号住居跡 …… 20	第45図	第18号住居跡出土遺物 …… 59
第12図	第2号住居跡出土遺物 …… 21	第46図	第19号住居跡 …… 62
第13図	第3号住居跡 …… 22	第47図	改築による主柱穴の移動 …… 63
第14図	第3号住居跡遺物出土状況 …… 23	第48図	第19号住居跡遺物出土状況 …… 63
第15図	第3号住居跡出土遺物 (1) …… 24	第49図	第19号住居跡出土遺物 (1) …… 64
第16図	第3号住居跡出土遺物 (2) …… 25	第50図	第19号住居跡出土遺物 (2) …… 65
第17図	第4号住居跡 …… 27	第51図	第20、26号住居跡 …… 67
第18図	第4号住居跡出土遺物 …… 27	第52図	第20、26号住居跡遺物出土状況 …… 68
第19図	第5号住居跡 …… 29	第53図	第26号住居跡出土遺物 …… 68
第20図	第5号住居跡出土遺物 …… 30	第54図	第20号住居跡出土遺物 (1) …… 71
第21図	第7号住居跡 …… 32	第55図	第20号住居跡出土遺物 (2) …… 72
第22図	第7号住居跡出土遺物 …… 33	第56図	第20号住居跡出土遺物 (3) …… 73
第23図	第8号住居跡 …… 35	第57図	第20号住居跡出土遺物 (4) …… 74
第24図	第8号住居跡出土遺物 …… 35	第58図	第22号住居跡 …… 77
第25図	第9号住居跡 …… 37	第59図	第22号住居跡遺物出土状況 …… 78
第26図	第9号住居跡遺物出土状況 …… 38	第60図	第22号住居跡出土遺物 (1) …… 79
第27図	第9号住居跡出土遺物 (1) …… 39	第61図	第22号住居跡出土遺物 (2) …… 80
第28図	第9号住居跡出土遺物 (2) …… 40	第62図	第22号住居跡出土遺物 (3) …… 81
第29図	第9号住居跡出土遺物 (3) …… 41	第63図	第21、24号住居跡 …… 83
第30図	第12号住居跡 …… 43	第64図	第21、24号住居跡出土遺物 (1) …… 84
第31図	第12号住居跡出土遺物 …… 43	第65図	第21、24号住居跡出土遺物 (2) …… 85
第32図	第13、17号住居跡 …… 45	第66図	第25号住居跡 …… 87
第33図	第13、17号住居跡遺物出土状況 …… 46	第67図	第25号住居跡出土遺物 …… 88
第34図	第17号住居跡出土遺物 …… 47	第68図	第1、2号土壌 …… 89

第69図	第2住居跡群全測図	90	第94図	筒型土偶類例	113
第70図	第10号住居跡	91	第95図	筒型土偶の断面形態のバリエーション	113
第71図	第10号住居跡遺物出土状況	92	第96図	弥生時代中期の遺物	114
第72図	第10号住居跡出土遺物	93	第97図	第23号住居跡・ 第23号住居跡出土遺物	115
第73図	第11号住居跡	94	第98図	第1号井戸跡	116
第74図	第11号住居跡出土遺物	95	第99図	時期不詳の土壌・焼土ビット	119
第75図	第2住居跡群土壌・焼土ビット	96	第100図	変形土器類例	121
第76図	第3住居跡群・北遺物包含層	97	第101図	壺口縁部類例 (柿沼1989より転載)	122
第77図	第6号住居跡	98	第102図	大野田西遺跡出土高杯口縁部類例	124
第78図	第6号住居跡出土遺物	98	第103図	蟹沢・芳沼入遺跡出土遺物	127
第79図	第15号土壌	99	第104図	祭祀関連遺物	129
第80図	北遺物包含層出土遺物	100	第105図	石器類型	130
第81図	南遺物包含層	101	第106図	石器出土地点	131
第82図	南遺物包含層出土遺物 (1)	102	第107図	住居跡主軸方向	134
第83図	南遺物包含層出土遺物 (2)	103	第108図	住居跡の規模	134
第84図	グリッド出土・表採遺物	105	第109図	ダイアグラム位置分類図	139
第85図	第1号井戸跡出土遺物	106	第110図	実験対象土器	140
第86図	第8号土壌出土遺物	106	第111図	三角・変形ダイアグラム	141
第87図	第6号土壌出土遺物	106	第112図	Q t - P I 相関図	143
第88図	縄文時代遺物分布図	107	第113図	実験結果による土器分類	145
第89図	縄文時代遺物 (1)	109			
第90図	縄文時代遺物 (2)	110			
第91図	大野田西遺跡出土土偶	111			
第92図	土偶の製作方法模式図	111			
第93図	県内出土の筒型土偶	112			

表 目 次

第1表	胎土性状表	140
-----	-------	-----

図 版 目 次

図版1	大野田西遺跡航空写真	調査前の大野田西遺跡
図版2	遺跡遠景 (南東から) 遺跡全景 (北から)	図版4 第1号住居跡炭化材出土状況 第2号住居跡
図版3	遺跡遠景 (長沼谷から)	図版5 第3号住居跡

- 第1・2・3号住居跡
- 図版6 第4号住居跡
第5号住居跡
- 図版7 第5号住居跡内土壌遺物出土状況
第7号住居跡
- 図版8 第8号住居跡
第9号住居跡
- 図版9 第12号住居跡
第14号住居跡
- 図版10 第13・17号住居跡
第15号住居跡
- 図版11 第18号住居跡遺物出土状況 (1)
第18号住居跡遺物出土状況 (2)
- 図版12 第19号住居跡
第20・22号住居跡遺物出土状況
- 図版13 第22号住居跡遺物出土状況
第20・22・26号住居跡
- 図版14 第21・24号住居跡
第1住居跡群
- 図版15 第10号住居跡
第11号住居跡
- 図版16 第3・5・9号住居跡出土遺物
- 図版17 第9・15号住居跡出土遺物
- 図版18 第15・17・18号住居跡出土遺物
- 図版19 第18号住居跡出土遺物
- 図版20 第18・20・22号住居跡出土遺物
- 図版21 第22号住居跡出土遺物
- 図版22 第21・22・11・25・6号
住居跡出土遺物
- 図版23 第7・8・9・13・14号
住居跡出土遺物
- 図版24 土製勾玉
- 図版25 土製勾玉・土玉・石製模造品
- 図版26 ミニチュア土器
- 図版27 第20号住居跡出土壺・高杯口縁部
無頸壺形土器
- 図版28 第2・3号住居跡出土石器
- 図版29 第4・7号住居跡出土石器
- 図版30 第9・15号住居跡出土石器
- 図版31 第20・25号住居跡出土石器
- 図版32 第10号住居跡・包含層出土石器
- 図版33 グリッド出土石器・棒形磨石
- 図版34 第I、II群土器・第III、IV群土器
- 図版35 筒型土偶・縄文時代石器
・弥生時代中期の土器
- 図版36 胎土分析資料電子顕微鏡写真
資料No1・2・8・9・11・12

I 調査の概要

1. 発掘調査に至るまでの経過

埼玉県では、県土の均衡ある発展を目的に、地域産業の振興と雇用機会の拡大に役立てるため、先端企業等の立地を受け皿として工業団地の整備を進めている。嵐山工業団地はこの施策により嵐山町大字勝田、吉田地区に造成された。工事に先立ち、計画地内に所在する次の7遺跡について平成2年度に財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施した。

蟹沢遺跡 (36-142)・芳沼入遺跡 (36-143)・芳沼入下遺跡 (36-144)・新田坊遺跡 (36-144)

尺尻遺跡 (36-142)・尺尻北遺跡 (36-142)・大野田遺跡 (36-142)

その後、大野田遺跡の隣接地において工業団地に付設する公園整備が計画され、平成4年2月24日付け企土二第278号で企業局土地開発第二課長から文化財保護課長あて、計画地内の埋蔵文化財の所在及び取扱いについて照会があった。公園整備計画地には周知の埋蔵文化財包蔵地(大野田西遺跡)が所在するので、平成4年3月17日に遺構範囲確認調査を実施し、その結果に基づき次のとおり回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名 称	種別	時 代	所 在 地
大野田西遺跡 (36-176)	集落跡	弥生・平安	嵐山町大字勝田

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は、現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき文化庁長官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。

なお、発掘調査の実施については当課と別途協議すること。ただし、公園整備の詳細が未確定とのことですので、整備内容と埋蔵文化財の保護及び取扱い等について、別途調整が必要と思われますので申し添えます。

その後、文化財保護課、土地開発第二課で保存策について協議したが、工業団地内に適地がないこと等から計画変更は不可能と判断されたため記録保存の措置を講ずることとなった。

平成4年5月28日、公園整備計画策定を受けて文化財保護課、土地開発第二課、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団とで保存地区の確認、発掘調査期間等について現地で協議し、平成4年8月から平成5年3月までの予定で調査を実施することを決定した。

文化財保護法第57条の3第1項及び同57条第1項の規定による手続きを済ませた後、平成4年8月1日から発掘調査が開始された。埋蔵文化財発掘調査届に対する文化庁長官の通知は、平成5年1月8日付け委保第5の1376号である。

(文化財保護課)

2. 発掘調査と整理事業の組織

(1) 発掘調査（平成4年度）

主体者 勸埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井修二

副理事長 早川智明

常務理事 倉持悦夫

兼管理部長 栗原文蔵

理事兼調査部長 栗原文蔵

庶務経理

庶務課長 萩原和夫

主査 賛田清

主事 菊池久

経理課長 関野栄一

主任 江田和美

主事 長滝美智子

主事 福田昭美

主事 腰塚雄二

発掘

理事兼調査部長 栗原文蔵

調査副部長 梅沢太久夫

調査第1課長 宮崎朝雄

主任調査員 磯崎一

調査員 福田聖

調査員 佐藤康二

(2) 整理事業（平成5年度）

主体者 勸埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井桂

副理事長 富田真也

専務理事 横川好富

常務理事 柴崎光生

兼管理部長 柴崎光生

理事兼調査部長 中島利治

庶務経理

庶務課長 萩原和夫

主査 賛田清

主事 菊池久

経理課長 関野栄一

主任 江田和美

主事 長滝美智子

主事 福田昭美

主事 腰塚雄二

整理

資料部長 小川良祐

資料部副部長 谷井彪

兼資料整理第1課長 谷井彪

調査員 佐藤康二

3. 発掘調査・整理作業の経過

発掘調査の経過

嵐山工業団地における遺跡群の発掘調査の方法とその経過については、当事業団報告書第119集の嵐山工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告に記述されているのでここでは省略する。

調査区には、国土方眼座標第IV系に基づいて10m毎の大グリッドと、2m毎の小グリッドを設定したが、グリッド番号は各遺跡個別に付した。以下調査の経過を述べる。

- 8月 重機により調査区丘陵裾部から表土掘削を開始するが、急斜面のため作業が困難で、10月初旬まで継続される。
- 9月 遺構確認を開始する。
- 10月 中旬まで遺構確認を行い、丘陵中段の緩斜面より遺構番号を順次付け、第1～3号住居跡を掘り始める。急斜面部の遺構確認を継続して進める。委託した遺跡の基準点測量が行われる。
- 11月 第4～8号住居跡を掘り始める。丘陵下段の第6号住居跡を掘り始める。
- 12月 重複する第9、15号住居跡を掘り終わる。丘陵上段の第10、11号住居跡を掘り始める。
- 1月 第13～26号住居跡を掘り始める。南遺物包含層を掘り始める。
- 2月 遺跡清掃の後、19日にヘリコプターによる航空撮影、測量を行う。北遺物包含層を掘り始める。
- 3月 南北遺物包含層の調査を中旬までに終了し、図面作成も終了させ発掘調査を終了する。

整理作業

報告書刊行作業は平成5年4月1日から平成6年3月31日まで実施した。

- 4月～6月 遺物の接合を行い、並行して図面整理および二次原図の作成を行う。
- 7月～8月 遺物の復元を行い、土器実測図作成も開始する。遺構のトレースを行う。
- 9月 土器片の拓本取り、断面取りを行う。
- 10月～11月 石器実測図を作成し、遺構から原稿執筆を開始する。土器の胎土分析を依頼する。
- 12月 図版組み、および割り付けを行い、原稿執筆を引き続き行う。遺物写真を撮影する。委託した巻頭カラー写真の撮影が行われる。
- 1月 原稿執筆を終了させ、報告書の印刷に入り、3月末に印刷を完了して報告書を刊行した。

II 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の立地

大野田西遺跡は埼玉県比企郡嵐山町大字勝田に所在する。位置的には東武東上線武蔵嵐山駅から北約4kmの距離にあり、嵐山町の北東部にある。地形区分では比企丘陵北西部にあたる。比企丘陵は外秩父山地から半島状に突き出した丘陵であり、北部は江南台地、南部は東松山台地、東部は吉見丘陵に接している。これらの丘陵と比企丘陵は、北東の和田吉野川、南西の市野川によって区分され、中央部には滑川が流れる。また市野川にはさらに粕川、蟹田川が、滑川には中掘川、月申川、角川といった小河川が合流する。これらの河川により樹枝状に著しく発達した開析谷によって、複雑に入り組んだ地形が形成され、中小の舌状台地状の丘陵部を無数に形成している。また多くの開析谷の内部は、比企丘陵特有の溜池を利用した水田経営が行われている。

本遺跡の立地する嵐山町北東部は、滑川と市野川水系の粕川にはさまれた標高100mほどの尾根と開析谷が密集する地域で、溜池との調和も相まって景観的にも優れている。周辺で最も高い山は本遺跡東方にそびえる標高131.8mの滑川町二ノ宮山である。

さらに詳しく地形を見ると、本遺跡の立地する鬩分沼丘陵は滑川の開析により形成された長沼谷（ながぬまやつ）に接する。長沼谷は滑川上流右岸域では最大級の谷であり、現河川よりおよそ1.4kmほど南に谷頭である長沼が所在していた。また長沼の南に低丘陵を挟んで粕川の開析谷が所在し、滑川水系と市野川水系の開析谷がもっとも近接するものこの地域である。なお長沼谷は現在では谷戸田として利用されている。



第1図 埼玉県の地形 (原図 堀口1986)

2. 歴史的環境と周辺の遺跡

嵐山町を中心として、周辺の遺跡（第2図）を概観したい。なお本遺跡の中心となる弥生時代後期、吉ヶ谷期の遺跡については3で、嵐山工業団地事業地内遺跡については4で詳述する。

近年、江南台地において旧石器時代の遺跡は序々に増加している。江南町塩西遺跡からはナイフ・彩石器文化期の遺物、同白草遺跡からは荒屋型彫刻刀形石器と共伴して、湧別技法で製作された細石器が、5か所のブロックから出土している。ただし嵐山町内においては現在のところ該期の良好な遺跡は確認されていない。

町内における早期～前期の縄文時代の遺跡は、金平遺跡、花見堂遺跡など市野川右岸の丘陵裾部に多い傾向があるが、近年、諸磯b・C式期の遺跡が尺尻遺跡等、丘陵内部で多数検出されつつある。さらに遺跡数が急増するのは比企丘陵全域の傾向と同じく、中期勝坂式期から加曾利E式期前半である。中でも行司免遺跡は比企地方最大規模の集落跡と言える。それに対して中期末葉以降の良好な集落跡は、現在のところ発見されていない。なお花見堂、屋田遺跡からは縄文時代晩期終末の浮線網縄文系土器と燃糸文系土器の良好な資料が出土している。

本遺跡周辺の弥生時代の遺跡分布は、ここ数年の調査成果により増加が著しい。そのほとんどが吉ヶ谷期の集落である。また、本遺跡において遺構に伴わないものの弥生時代中期の土器が出土したことから、未発見の中期の遺跡の存在が予想される。

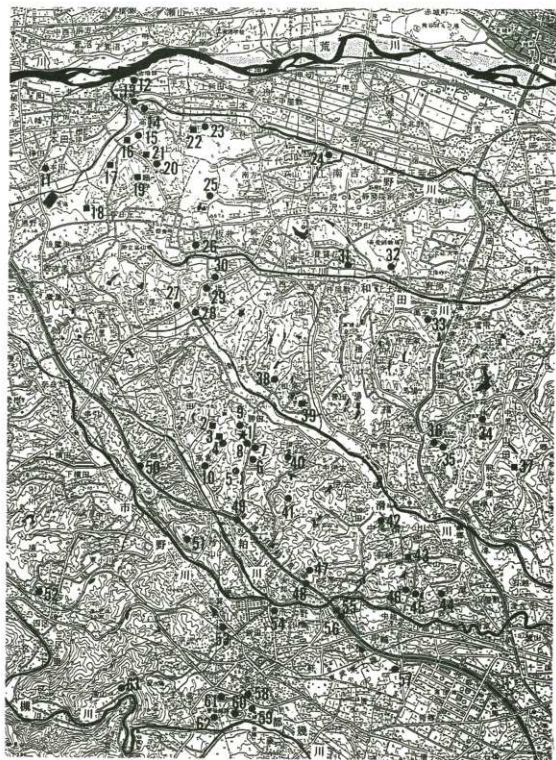
町内の古墳時代前期の集落跡は、菅谷台地に立地する行司免遺跡、花見堂遺跡が著名である。なお前者からは該期の方形周溝墓10基が検出されている。近隣の滑川町においては打越遺跡から50軒の住居跡が検出されており、東松山市五領遺跡以来の大規模集落の調査例として注目される。また滑川町大谷遺跡や同屋田遺跡、同船川遺跡など弥生時代後期の吉ヶ谷集落と同一丘陵上に占地するものが多い点が、注目されよう。

和泉期の集落跡としては行司免遺跡の45軒の住居跡が目を引くのみで周辺地域も該期の遺跡分布は希薄である。また鬼高期の集落跡も現在の所、東落合遺跡の18軒が知られる程度であるが、次に述べる古墳の築造年代からも今後更に増加する可能性がある。

嵐山町における古墳の分布は、都幾川左岸（菅谷台地南部）と北部丘陵地帯（古里・吉田地区）、さらには市野川右岸（菅谷台地北部・西部）に大別できようである。ただし一部の古墳を除き、その多くは6世紀後半以降の所産と考えられている。本遺跡の立地する滑川流域には左岸最奥部の江南町塩古墳群から嵐山町古里古墳群を経て、滑川町福田まで群集墳等が点在する。それに対して右岸には、本遺跡と隣接する天神山古墳群や上流の尾根横穴墓群などが点在するが、分布はやや希薄と言える。

生産遺跡としては都幾川右岸の將軍沢窯跡群、7世紀初頭に位置付けられている滑川町羽尾窯跡、同平谷窯跡などが著名である。前者は7軒の住居跡からなる金平遺跡、後者は武蔵国最古の創建とされる滑川町寺谷廃寺に関連する窯跡と推定されている。

奈良・平安時代の集落跡としては7世紀から9世紀にかけての住居跡が50軒検出された東落合遺跡が挙げられる。また滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群や後述する嵐山工業団地事業地内遺跡など、



第2図 周辺遺跡分布図

1 大野田西遺跡	2 蟹沢遺跡	3 芳沼入遺跡	4 芳沼入下遺跡	5 新田坊遺跡
6 尺尻遺跡	7 尺尻北遺跡	8 大野田遺跡	9 天神山古墳群	10 花見台遺跡
11 上本田遺跡	12 鹿島古墳群	13 山ノ腰遺跡	14 舟山遺跡	15 竹之花遺跡
16 白草遺跡	17 阿弥遺跡	18 焼谷遺跡	19 四反歩南遺跡	20 跡光寺跡
21 万願寺遺跡	22 姥ヶ沢遺跡	23 富士山遺跡	24 上前原遺跡	25 寺内廣寺
26 岩比田遺跡	27 西原遺跡	28 塩前遺跡	29 塩古墳群	30 塩西遺跡
31 本田東台遺跡	32 野原古墳群	33 天神山横穴群	34 後谷遺跡	35 栗谷東遺跡
36 栗谷遺跡	37 新井遺跡	38 三門館跡	39 船川遺跡	40 旧伊古神社
41 滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群	42 内郷遺跡	43 大谷遺跡	44 羽尾竈跡	45 中郷遺跡
46 寺谷庵寺	47 平谷遺跡	48 寺ノ台遺跡	49 花見堂遺跡	50 寺山遺跡
51 越畑城跡	52 杉山遺跡	53 金平遺跡	54 稲荷塚古墳群	55 山根遺跡
56 月輪古墳群	57 大塚遺跡	58 山王遺跡		
59 菅谷館跡	60 向原遺跡			

近年の調査により、丘陵部の開発を伺わせる集落跡が明らかになりつつある。また基壇建物等の良好な遺構、宗教関係遺物、墨書土器等の遺物が多数出土した江南寺町内廃寺も本遺跡の北約4kmに所在している。金銅仏の出土が伝えられる川本町跡光寺跡比定地なども知られる。なお本遺跡近隣には比企郡内唯一、延喜式神名帳に記されている伊古乃連御五比売神社が所在する。

中世の遺跡は菅谷館跡を筆頭に、杉山城、越畑城、三門屋館などの館跡、古戦場等が町内に多数分布している。

(引用・参考文献は巻末参照)

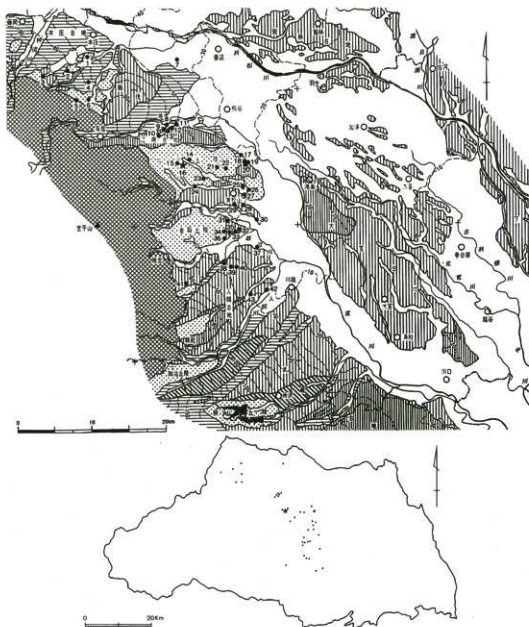
3. 周辺の吉ヶ谷集落について

大野田西遺跡の中心となる、弥生時代後期の吉ヶ谷集落について、主に比企・吉見丘陵を中心にまとめてみたい。

まず本遺跡の立地する滑川流域周辺の集落について、下流域から概観していく。滑川、市野川の合流点に近い吉見丘陵上には吉見町八耕地遺跡が所在する。遺構の詳細は不明なものの、県内ではじめて片口形土器が出土したことで知られる。同じく合流点右岸、東松山台地東端には東松山市観音寺遺跡が所在する。方形周溝墓に鉄剣、銅鋼が副葬されていた。共伴した土器は吉ヶ谷式の中でも古相(註2)とされる。また吉見丘陵東南辺の東松山市八幡遺跡においても該期の集落が確認されている。

比企丘陵中央部、滑川左岸の丘陵上に立地する滑川町新井遺跡においては、住居跡13軒、方形周溝墓6基が検出されている。吉ヶ谷式期の終末(木村1986)とされており、該期の墓制と住居跡の良好なセットと言える。また標識遺跡である東松山市吉ヶ谷遺跡は、滑川の支谷に面した舌状台地上に立地する。工事により発見された1軒の住居跡からは、吉ヶ谷Ⅱb期(註1)とされる土器群が出土した。

本遺跡の立地する滑川上流域左岸には、滑川町船川遺跡が所在する。本遺跡の対岸およそ1kmの丘陵上にあたる。現水田面との比高差約18mの標高69m付近から3軒の吉ヶ谷式期の住居跡が検出



1 大久保山道跡	2 生野山道跡	3 塩谷下大塚道跡	4 志度川道跡	5 羽黒山道跡
6 神明ヶ谷道跡	7 明戸東道跡	8 白草道跡	9 円阿弥道跡	10 焼谷道跡
11 姥ヶ沢道跡	12 万願寺道跡	13 四反歩道跡	14 船川道跡	15 蟹沢道跡
16 大野田西道跡	17 玉太調道跡	18 円山道跡	19 船木道跡	20 板谷東道跡
21 新井道跡	22 吉ヶ谷道跡	23 大谷道跡	24 屋田道跡	25 八幡道跡
26 八井地道跡	27 観音寺道跡	28 五領道跡	29 竜田道跡	30 下道添道跡
31 諏訪山道跡	32 大西道跡	33 杉ノ木道跡	34 根平道跡	35 板山道跡
36 駒坂道跡	37 附島道跡	38 花影道跡	39 一天駒道跡	40 鶴ヶ岡道跡
41 新しき村	42 霞ヶ間道跡	43 上組道跡		

第3図 吉ヶ谷集落分布図

されている。その内1軒は長軸9.9mと大型である。出土遺物はⅠ期(註2)とされる。また滑川右岸の丘陵上にはⅢ期(川口1992)の住居跡7軒からなる嵐山町蟹沢遺跡が立地する。

比企丘陵東側、荒川に面する台地縁辺にも吉ヶ谷集落が分布する。大里村船木遺跡では住居跡2軒が検出されている。その中の1軒は推定長軸10mの大型住居跡である。出土遺物から吉ヶ谷Ⅱb期(註1)とされる。またその北西1.5kmに位置する東松山市玉太岡遺跡においては住居跡9軒以上が密集し、方形周溝墓と思われる溝跡も検出されている。幅約4mの限られた調査区であることから、当然周辺に大規模な集落が予想される。吉ヶ谷Ⅰ～Ⅱ期とされる(高崎1990)。また近年の調査で大里村桜谷東遺跡で3軒、大境遺跡でも11軒が発見されている。

滑川流域ではないが、本遺跡のおよそ2km南東、市野川右岸の台地縁辺部に立地する滑川町屋田遺跡からはⅢ期(今井1984)の2軒の住居跡が確認されている。その内1軒は、ベット状遺構を有する。

以上、本遺跡周辺の吉ヶ谷集落を概観してきたが、地図上において遺跡が密集する傾向が読み取ることができる。つまり市野川、滑川合流域の八耕地・観音寺・八幡遺跡、比企丘陵東端の玉太岡・船木・円山・桜谷東遺跡、滑川上流域の船川・大野田西・蟹沢遺跡である。これらの集落群を吉ヶ谷Ⅰ～Ⅲ期として捉えたと、いずれも継続性を有しているかに見える。

次に他の地域に目を転じると、本庄・棚引台地に立地する吉ヶ谷集落についてはすべてⅡb期以降(恋河内1992)、近年集落数が急増した江南台地に立地する6遺跡はⅡ期(磯崎1992)とされるなど、地域における遺跡動態の違いが明瞭である。また現段階では深谷市明戸東遺跡のみ知られる妻沼低地には、吉ヶ谷式土器の祖型(中島1984)と言われる土器が出土した行田市池上遺跡が所在するなど様相は複雑である。

遺跡のグルーピングには出土遺物、遺構の検討など慎重な操作が必要であるし、今後の発掘調査によって、吉ヶ谷集落の分布傾向が大幅に変更することもありえる。しかし従来論じられてきたような丘陵内部への進出は、岩殿丘陵周辺などでは首肯されるものの、調査例が増加した現在、再検討が必要と思われる。

嵐山町史刊行の段階では、弥生時代の遺跡が町内に確認されていなかったが、船川遺跡を含めると本遺跡、蟹沢遺跡の近接する3遺跡で計36軒の住居跡が確認された。これは駒掘遺跡を始めとする岩殿丘陵、高坂台地に立地する6遺跡計42軒、白草遺跡を始めとする江南台地の6遺跡計45軒、霞ヶ関遺跡の45軒などに次ぐ住居跡数となり、該期の遺跡動態の解明に重要な地域となったと言える。今後、発掘調査の増加に伴って、出土遺物および遺構の分析、さらには立地を異にして併存すると言われる描文土器の分布地域を始め、他地域の動態との比較が検討課題として挙げられる。

(註1) 柿沼幹夫1981「吉ヶ谷式土器について」『土曜考古』第5号 土曜考古学研究会

(註2) 石坂俊朗1993「吉ヶ谷集落について」『研究紀要』第10号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

4. 事業地内の遺跡

次に本遺跡の調査に先立って、調査・報告された事業地内の7遺跡(第4図)について立地および概要を簡単にまとめておく。

蟹沢遺跡

粕川が開析した芳沼谷、蟹沢谷と滑川の開析した新沼谷、上沼谷に取り囲まれる丘陵尾根上に位置する。住居跡23軒、土壌1基、溝跡1条が確認されている。時期的な内訳は弥生時代後期の住居跡11軒、土壌1基、奈良時代の住居跡12軒、溝跡1条である。弥生、奈良時代については集落が全面的に調査されたと思われる。弥生時代の遺構、遺物はいずれも吉ヶ谷期のものであるが、東海系のもと思われる壺形土器が含まれている点が興味深い。

芳沼入遺跡

粕川が開析した谷の中でも最大級の一つ、芳沼谷の谷頭付近の西側の丘陵上に位置する。住居跡6軒、土壌4基、石室状遺構1基が検出された。住居跡はいずれも奈良時代のもので、土壌は縄文時代前期終末のもの1基、弥生時代吉ヶ谷期のもの2基、奈良時代のもの1基である。縄文時代の遺物は、前期諸磯b式期を中心に十三菩提式、阿玉台式の良好な資料が出土している。

芳沼入下遺跡

芳沼入遺跡をのせる丘陵の末端部の南東向き斜面部に位置する。土壌1基が確認されただけである。土壌内からは遺物が出土していないため、時期を特定することはできないが、周辺に奈良時代のもと思われる土師器片、須恵器片が散布していたことから該期の遺構と考えられる。

新田坊遺跡

滑川に開口する長沼谷最奥部西側の馬の背状の尾根に位置する。住居跡11軒、溝跡2条、土壌15基、集石土壌1基を検出した。住居跡、溝跡は全て平安時代のものである。土壌は縄文時代前期諸磯c式期のものが2基、平安時代のもものが13基である。遺構外の遺物は縄文時代早期条痕文系、前期諸磯b式、c式のものがみられる。

尺尻遺跡

長沼谷の東側の丘陵上に位置し、長沼谷の支谷である南の蓮沼谷、北の尺尻谷によって周囲の丘陵と隔てられている。住居跡4軒、土壌3基、集石土壌2基が確認されている。住居跡は縄文時代前期諸磯b式期のものが1軒であり、残りの住居跡3軒と3基の土壌は平安時代のものである。集石土壌は縄文時代前期のものである。遺構外からは諸磯b式期の土器の他に、縄文時代中期の土器、旧石器時代のナイフ形石器等が検出されている。

尺尻北遺跡

長沼谷の東側の丘陵に位置し、尺尻遺跡とは谷をはさんだ対岸となる。住居跡2軒、土壌2基が確認されている。住居跡は縄文時代前期諸磯c式期のもの1軒、平安時代のもの1軒である。2基の土壌は縄文時代前期のものである。諸磯c式期の住居跡は県内においては極めて類例が少ないものである。

III 遺構と出土遺物

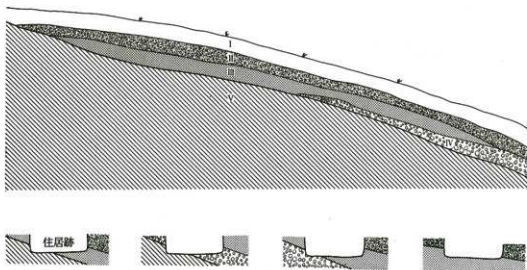
1. 概要

今回の調査では弥生時代後期の遺構および遺物包含層、奈良時代の遺構、時期不詳の遺構が検出された。時期別の内訳は、弥生時代後期の住居跡25軒、土壇6基、焼土ピット3基、奈良時代の住居跡1軒、時期不詳井戸跡1基、時期不詳土壇10基、ピット3基である。出土遺物は、縄文時代早期～後期、弥生時代中期、後期、奈良時代、近世のものが出土した。遺構の分布は、現水田面との比高差およそ10m、標高65.0～68.8mの胴分沼北丘陵中段の北向き緩斜面に密集していた。また標高78～80m前後の胴分沼南丘陵東斜面からも遺構が検出された。

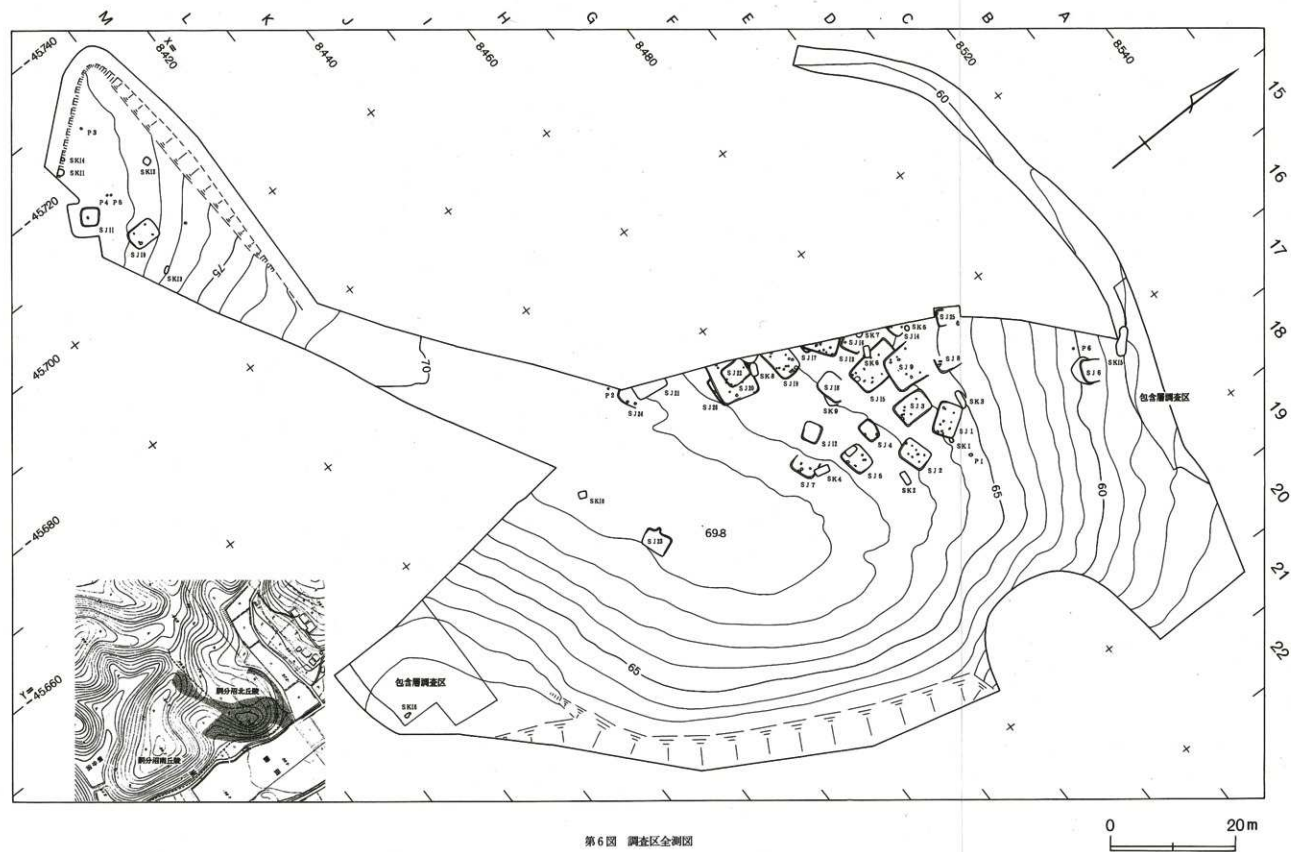
調査区の基本層序は、第5図に示したようにI層は表土、II層は褐色土、III層はローム、IV層は凝灰岩礫を含む灰褐色土、V層は凝灰岩の岩盤層である。平坦部と斜面部では地山の様相が異なる。また斜面部においても傾斜方向や高低差により地山の堆積状況が異なる。したがって同一住居跡内でさえも床面の地山が変化する例が多かった。なお住居跡の柱穴のなかにはV層の岩盤を掘り込んでいるものもある。

今回の調査で検出された遺構、遺物の中心的存在は弥生時代後期である。該期の遺構は竪穴住居跡25軒、土壇6基、焼土ピット3基が検出された。住居跡は斜面地であるため流出が著しく、斜面下方にあたる壁面はすでに流出しており検出できたものは少なかった。桑畑として利用されていたための擾乱も著しかった。また住居跡の密集地域が調査区際だったこともあり良好なかたちで完掘できたものは少なかった。

弥生時代の住居跡覆土上層より縄文時代後期に比定される筒形土偶がほぼ完形で出土したことは注目される。全国でもおよそ30例ほどが認められるにすぎない。



第5図 地形断面模式図(原図 川口1992)



第6图 调查区全测图

2. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 概要

弥生時代後期の住居跡は、舌状に張り出した胴分沼北丘陵ほぼ中央の北向きの緩斜面に、計22軒が集中する。さらに標高80m付近からは2軒、現水田面（標高約56m）からの比高差約4mの丘陵裾部からも1軒検出された。丘陵上調査区外にも同様の緩斜面が広がり、集落はさらに西側に広がると思われる。また丘陵南北裾部からは、該期の遺物包含層が検出された。わずかに縄文時代の遺物もあるが、そのほとんどが集落と同時期の遺物である。ただし丘陵東裾部にあたる大野田遺跡からは該期の遺構、遺物は検出されていない。

住居跡の構造等で特に注目されるのは、構築された地床炉の数である。完掘できた住居跡の大半は複数の炉を有し、中でも大型住居跡である第15、20号住居跡はいずれも5基を有していた。また貯蔵施設については、周堤帯を伴う貯蔵穴や長方形の住居内土壇などが確認された。

出土遺物のほとんどは吉ヶ谷式期の範疇で捉えられるが、第9、18、22号住居跡などからはハケメ調整を明瞭に残し、口縁端部に刻みのない台付甕などの新出の土器群が出土しており、集落は弥生時代後期～古墳時代初頭まで継続していたと思われる。また事業地内遺跡の蟹沢遺跡からも吉ヶ谷式土器と共伴して同様の台付甕が出土している。

播磨文土器も数点が出土した。いずれも小片であり、器形や詳細は不明である。なお吉ヶ谷式土器とともに胎土分析を実施した。

特記すべき遺物としては第18号住居跡コーナー部より一括出土した12個体のミニチュア土器が挙げられる。該期の祭祀形態を検討する良好な資料といえる。土製勾玉も計10点出土した。吉ヶ谷式期の特徴的な遺物ではあるが、一集落の出土量としては注目される。また第13号住居跡の覆土上層からは凝灰岩製の鏡の模造品が出土している。県内においては初現例の1つとなると思われる。

磨製・打製石斧、砥石、磨石などの石器類が住居跡から多数出土したことも特筆される。今後、慎重な検討が必要であるが、弥生時代後期という時代観からすると、注目される石器組成を示していると言える。

住居跡の重複も顕著であり時期差も当然考慮する必要があるが、出土遺物からは集落の継続性が伺える。本報告では便宜上、住居跡間の距離および比高差による位置関係により、住居跡を3群に分割する。

第1住居跡群は、標高65.0～68.8mの北向き緩斜面に立地する第1、2、3、4、5、7、8、9、12、13、17、14、15、16、18、19、20、22、26、21、24、25号住居跡、第1、2号土壇とする。

第2住居跡群は、標高77.9～80.0mの東向き急斜面に立地する第10、11号住居跡、第11、12、14号土壇、第3、4、5号焼土ピットとする。

第3住居跡群は、標高58.0～60.0mの丘陵裾部に立地する第6号住居跡、第15号土壇とする。

(2) 第1住居跡群の遺構と遺物

第1住居跡群(第7図)は、洞分沼北丘陵中段の北向きの緩斜面に位置する。南北約60m、東西約40mの範囲に22軒の住居跡が密集する。本群中での住居跡床面の最大比高差は、最低が第25号住居跡の標高65.0m、最高が第24号住居跡の標高68.8mで、約4mの開きがある。本群と第2住居跡群とは最短距離で80m、床面比高差では10m以上の開きがある。また第3群とした第6号住居跡とは、当群北端の25号住から直線距離で約20m、床面比高差で約5mの開きがある。

多くの住居跡は、流出および耕作の影響で遺存状況が悪い。また調査区外に広がるものも多いため、完掘できなかったものも9軒ある。住居跡間の重複もかなりあり、重複しないながらも上屋を想定すると、同時期に存在し得ない関係も多い。また住居跡の配列を概観すると、外縁部に相当する第25、8、1、2、5、7号住居跡が、一見密集する住居跡を取り囲むように存在する。ただし住居跡群の東側は丘陵尾根線に近く、岩盤が露出している(図版1参照)という地形的要因も考慮する必要がある。なお住居跡の流出の状況から、旧地形の傾斜も現在とそれほど変わりがなかったと考えられる。

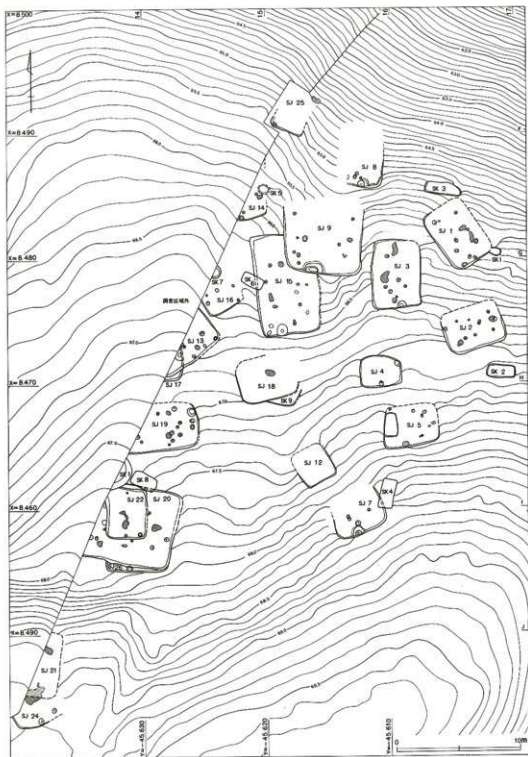
住居跡規模において、他と一線を画すのは、第15、20、9号住居跡である。15号住は長軸長8.03m、20号住は推定で8m、15号住と重複する9号住は2辺とも6m以上である。該期の土壌は、第1、2号土壌が存在する。1号土壌は1号住居跡と接する。2号土壌は2号住から1.5mと近いことから、それぞれの住居跡に伴う可能性があるのだろうか。

第1、15、22号住居跡からは炭化材と焼土が多量に検出されたが、出土遺物はそれほど多くない。他の住居跡においても床面直上のものは少ない。斜面地であることを考慮すると、流れ込みも想定する必要がある。ただし人為的な埋め戻しと思われる第20、22号住居跡覆土中からは多量の土器小片が出土した。

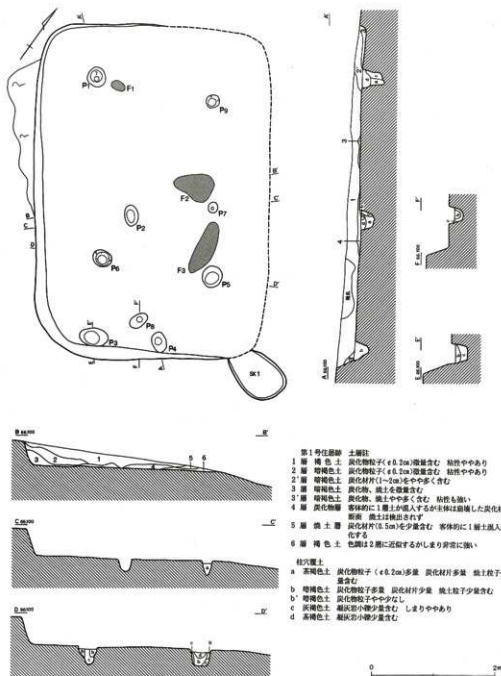
第1号住居跡(第8、9図)

第1号住居跡は、F-16グリッドに位置する。第1住居跡群の北東外縁部に当たり、地形的には緩斜面の縁辺と言える。北壁が流失していたが住居跡の規模は、5.36m×3.8m程と思われる。形態は隅円長方形で、主軸方位はほぼN-35°-Wである。確認面の段階から住居プラン北側に炭化物及び焼土が確認された。覆土上層は、斜面上方からの流入であった。最下層には炭化物を多量に含む層が薄く堆積していた。また西壁の崩落が著しかった。

床面は凝灰岩の地山直上(灰褐色土中に凝灰岩が混じる)で、ほぼ水平であった。壁際がやや軟質であった以外は堅緻であった。P8付近の硬化は著しかった。炉は3基であったが、いずれも住居跡主軸からは大きく離れて不規則な配列である。いずれも深さ5cmほど焼土が堆積しており、特にF3の硬化は著しかった。ピットは計9基あった。断ち割りを実施したところ、深さはP1=36cm、P2=22cm、P3=26cm、P4=26cm、P5=25cm、P6=27cm、P7=23cm、P8=24cm、P9=7cmである。P9以外はいずれも岩盤層を掘り込んでいた。その配列からP1、6、5、9の4基が主柱穴と思われるが、P9の浅さが他と対応しない。P2、P7は配列、規模が不規則である。副柱であろうか。

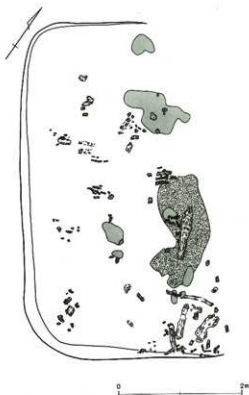


第7图 第1住居跡群全測図

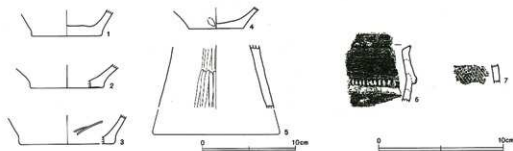


第8図 第1号住居跡

炭化材は主に住居跡南側、特に南東コーナー付近に多量の焼土を伴って分布しており、その一部は壁面にくいこむように検出された。住居跡南側はわずかに焼土が散在していた程度であり炭化材も少なかった。なおF2、3は炭化物と焼土の集中域の直下に当たること、付近の炭化材の倒壊方向からみて、なんらかの因果関係があると思われる。ただし出土遺物の少なさ、炭化材、焼土の



第9図 第1号住居跡炭化材出土状況



第10図 第1号住居跡出土遺物

分布の偏り、さらには炉周辺以外の床面に被熱痕が認められなかったことから生活段階での不慮の火災は想定しづらい。

第1号住居跡出土遺物 (第10図)

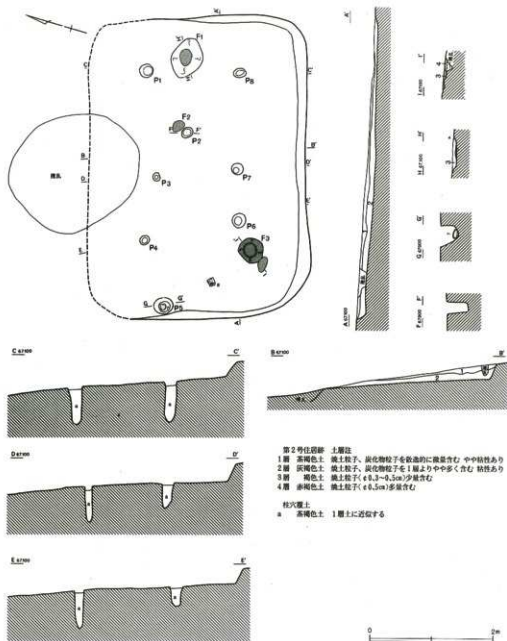
遺物は覆土上層中出土のものが多く、炭化材直下にはなかった。斜面下方の立地から流入の可能性が高い。6は覆土上層より出土した高杯形土器の口縁部である。突帯を有し刻みを施す。口唇部は平坦で刻みを施す。

第2号住居跡 (第11図)

第2号住居跡は、G-16グリッドに位置し、確認面標高は66.4~66.7mである。第1住居跡群東端にあたる。1号住とは最端で3m、1号土壇とは1.5mの位置関係にある。確認段階では、住居跡プラン北側が攪乱を受けており、全体にも木痕状の攪乱が観察された。北壁側は攪乱と流出により推定だが、4.8m×3.5m程度の規模と思われる。形態は隅円長方形で主軸方位はほぼN-76°-Eである。

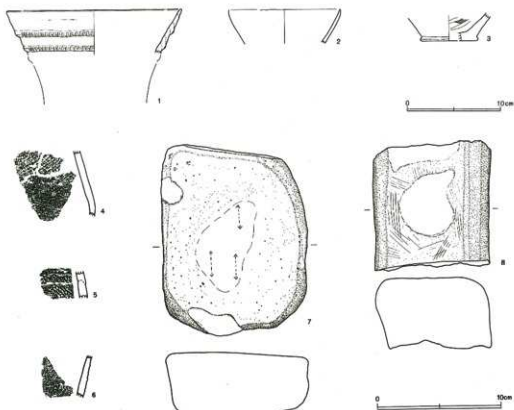
第1号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	一底部	—	(2.8)	7.2	g'(細)	B	鈍橙	25	内外面摩耗
2	一底部	—	(2.5)	7.6	w'g'(粗)	B	鈍橙	25	内外面摩耗
3	一底部	—	(3.1)	10.0	w(細)	A	明黄褐	10	内外面摩耗
4	一底部	—	(2.2)	5.8	g'(細)	C	鈍橙	10	内外面摩耗
5	高杯	—	(6.4)	—	g'(細)	C	明黄褐	20	外面ヘラミガキ
6	高杯	—	—	—	s'w(細)	—	浅黄	—	口唇、突帯に刻み
7	甕	—	—	—	g'(細)	—	鈍橙	—	単筋RL 内面ハケメ?



第11図 第2号住居跡

床面はほぼ水平で地山灰褐色土であった。堅緻部の広がりは中央部東よりのF2周辺であった。炉は3基であった。F2から良好な焼土及び被熱部が検出されたが、F3は焼土の堆積も薄く軟質であった。またF1は断面皿状の掘り込みの底面に軟質の焼土が薄く堆積していた。ピットは計8基あった。深さはP1=60cm、P2=35cm、P3=58cm、P4=63cm、P5=30cm、P6=32cm、P7=40cm、P8=64cmである。P1、3、4、6、7、8の6基が規則的な配列を示していたが、



第12図 第2号住居跡出土遺物

P 3、P 7 間がわずかに狭い。1号住と同様に4基の主柱穴と2基の副柱穴であろうか。西壁直下に掘り込まれたP 5の底面に接して石器が出土した。P 2はF 2と隣接するが、覆土に焼土や灰は認められなかった。

第2号住居跡出土遺物（第12図）

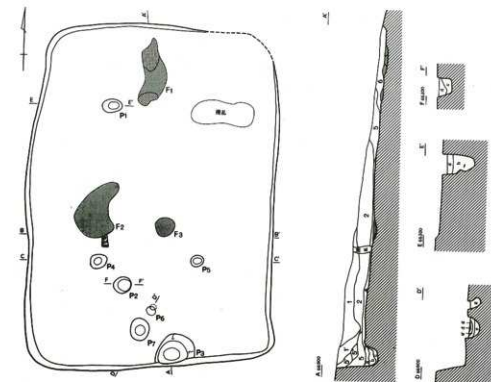
1は覆土中から出土した壺形土器の口縁部である。2段の突帯以下は欠損する。8は下層から出土した砂岩製の砥石である。下半部は欠損している。7はP 5より出土した石器である。中央に不明瞭だが擦痕を残す。また全面に被熱痕が認められる。

第2号住居跡出土土器観察表

番号	器 種	口 径	器高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存	出土位置・その他
1	壺	18.8	(4.8)	—	g(細)	B	橙	15	内外面摩耗 突帯に刻み 覆土
2	鉢	12.8	(3.7)	—	g'(細)	C	鈍橙	10	内外面摩耗 覆土
3	一底部	—	(2.5)	5.8	w(細)	B	鈍黄橙	10	外面摩耗 覆土
4	甕				g'(細)		赤橙		単節LR 覆土
5	甕				w(細)		鈍橙		単節RL 覆土
6	櫛掻突?				g'(細)		鈍橙		櫛掻波状文(単位不明) 覆土

第2号住居跡出土石器観察表

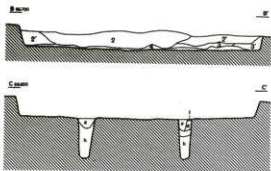
番 号	出土地点	器 種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石 質	備考
7	P 5 中	台石?	15.3	11.7	5.1	1,685.3	砂岩	被熱痕
8	覆土下層	砥 石	10.4	9.5	5.7	885.7	砂岩	下半部欠損



第3号住居跡 土層柱

- 1 層 暗褐色土 極度乱れ多くその為上層褐色土である灰褐色土ブロックが少量混入する
- 1' 層 暗褐色土 土質が1層よりさらに均一で灰褐色土ブロックを含まない
- 2 層 灰褐色土 1層のブロック、焼土粒子、炭化物粒子(ε 0.5cm)少量
- 2' 層 灰褐色土 2層よりやや無色強し 含有物は2層と同じ
- 3 層 暗褐色土 ソフトロームが主体を占める 1層より色調明るい
- 3' 層 暗褐色土 明度は3>3'>1 土質及び含有物は3層と同様
- 4 層 灰褐色土 焼土粒子少量含む 2層に色調近似的にさらにやわらかい
- 5 層 黒褐色土 ロームブロック(ε 4~5cm)をやや多く含む やわらかい
- 5' 層 灰褐色土 ロームブロックを含まない やわらかい
- 5'' 層 灰褐色土 5'層に黒褐色土粒子をやや多く含む
- 6 層 黒褐色土 焼土粒子をやや多く含む 色調5層に近似

- a 暗褐色土 ロームブロック(ε 3cm)を少量含む 粘性あり やわらかい
- f 暗褐色土 しまり非常に強し 床面に近い硬さ 粘性強し
- g 暗褐色土 ローム粒子多量に含む やわらかい
- h 暗褐色土 色調わずかに暗し
- i 暗褐色土 ローム粒子を少量含む やわらかい



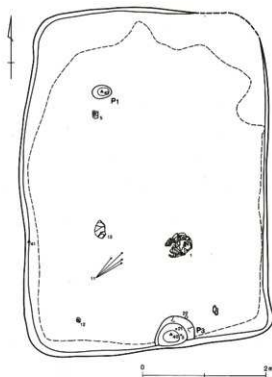
柱穴遺土

- a 灰褐色土 崩壊したロームブロックを少量含む やわらかい
- b 暗褐色土 微細炭化物粒子を少量含む やわらかい
- c 暗褐色土 2層より色調やや暗しやわらかい
- d 暗褐色土 黒褐色土上の崩壊ブロックを多く含む やわらかい

第13図 第3号住居跡

第3号住居跡 (第13、14図)

第3号住居跡は、F-15、16、G-15、16グリッドにまたがって所在する。確認面標高は65.8~67.0 mである。隣接する遺構は、北東コーナーが1号住から0.8m、西壁が9号住から0.8mと、重複しないながらも極めて近接している。住居跡北側は攪乱を受けていたが、遺存状況は比較的良好であ



第14図 第3号住居跡遺物出土状況

トは計7基検出した。深さはP1=52cm、P2=23cm、P3=21cm、P4=64cm、P5=65cm、P6=20cm、P7=20cmである。柱痕はなかったが、その配列から主柱穴はP1、4、5と思われる。なお対応すべき北東の1基は芋穴状の攪乱により検出できなかったが、4本主柱であろう。P3は貯蔵穴である。周堤帯状の高まりを有する。深さ66cmで、覆土中から遺物がやや多く出土した。P7は深さ20cmほどの断面が碗状の掘り込みで、覆土上層に多量のロームブロックを含んでおり、埋め戻しの可能性がある。P6は外側へ傾斜する径12cmほどのやや不整な細い掘り込みであり、入口関連施設の可能性がある。

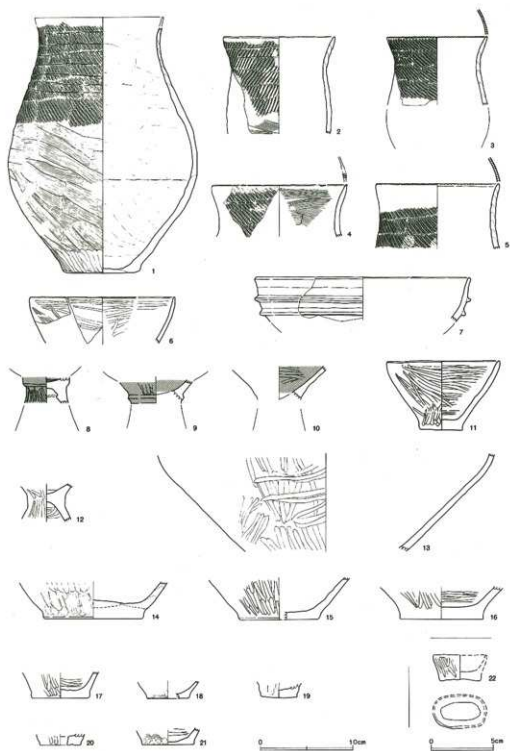
第3号住居跡出土遺物（第15、16図）

遺物は比較的多く出土した。1は床面直上から横転して潰れた状況で出土した変形土器である。口縁部を欠損するがほぼ完形である。胴部の張りが強く頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。7段の輪積痕が顕著で、単節RL縄文を施文する。胴部はハケメ整形で底部周縁のみヘラミガキを施す。内面はやや不鮮明だがヘラナデと思われる。2は胴部の張りが弱く、ほぼ直立する。輪積痕は2段まで比較の明瞭である。胴部はハケメ整形である。3は貯蔵穴覆土中より出土した。胴部以下を欠損するが、2に較べ胴部は張ると思われる。4は口唇部に部分的に刻みを有する。5は器面

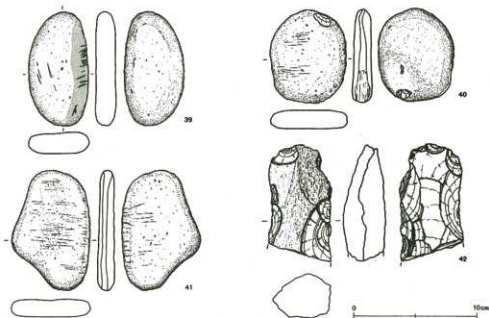
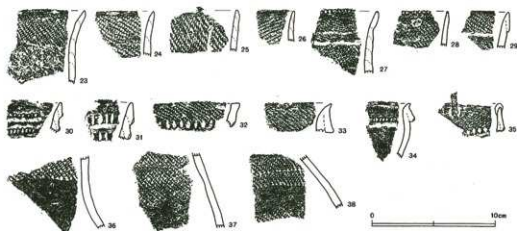
った。5.53m×4.0mの規模で、形態は隅円長方形である。主軸方位はほぼN-0°-Eである。覆土上層は攪乱土が多かったが、基本的には斜面上方からの自然堆積であった。なお覆土中には目立った炭化材、焼土が検出されなかったことから、本住居跡の埋没段階には近接する1号住の焼失時の影響を受けていないことになる。

床面は南半分が地山灰褐色土、北半分が地山ロームと、土質が異なっていた。壁際がわずかに軟質であったが、全体に非常に堅緻であった（14図破線内堅緻部）。炉は3基であった。ほぼ住居跡主軸にのるF1は、焼土の堆積は顕著だったが、被熱硬化は攪乱の影響からやや不良であった。F2は広い範囲にわたり被熱硬化しており、炭化材片1本が近接して検出された。

F3は小型の円形で、同様に被熱硬化が著しかった。いずれも深さ6cm前後の断面皿状の掘り込みであった。ビット



第15图 第3号住居跡出土遺物 (1)



第16図 第3号住居跡出土遺物 (2)

が粗れているが、付加条風太細撚り合わせRLを施文する。7は覆土上層から出土した高杯形土器の口縁部である。2段の突帯を有し刻みはない。なお割れ口を観察すると、突帯は貼り付けと思われる。11は完形の鉢形土器である。覆土下層より出土した。13は床面直上から出土した大型の壺形土器の胴部下半である。22は舟底形土器のミニチュアである。部分的にヘラミガキが認められる。35は高杯形土器の口縁部である。口縁部下端に刻みを施し口唇部に貼り付け文をもつ。

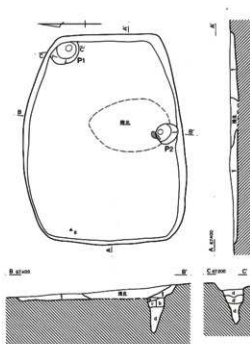
39～41は僅かに擦痕を残す扁平な磨石である。いずれも砂岩製である。なお39には赤褐色の付着物が観察された(スクリーントーン部)。42はP1覆土下層より出土した。打製石斧の基部と思われる。刃部側を欠損する。片面に自然面が残る。

第3号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	13.8	27.3	8.3	w・g(細)	B	暗褐	100	単節RL 胴部ハケメ 床直
2	甕	11.8	(10.4)	—	g(細)	B	赤褐	25	内面摩耗 単節LR 胴部ハケメ P3中
3	甕	10.8	(7.3)	—	g(細)	C	鈍褐	25	内面摩耗 単節RL 覆土
4	甕	14.4	(5.5)	—	w(細)	A	暗褐	15	口唇部分的に刻み 内面ハケメ 覆土
5	甕	13.4	(7.0)	—	g(硬)w(細)	C	橙	25	単節RL(太細摺り合せ) 覆土下層
6	鉢	15.5	(5.0)	—	g(粗)	B	橙	25	覆土
7	高杯	22.0	(4.8)	—	w(細)	B	橙	5	粘土ヒモ貼付の突帯 覆土
8	高杯	—	(2.8)	—	w(細)	A	橙	25	赤彩 接合部に突帯 覆土
9	高杯	—	(2.6)	—	g'(細)	B	灰黄	15	赤彩 接合部に突帯 覆土
10	高杯	—	(3.7)	—	g'(粗・磨)	B	橙	15	赤彩 P3中
11	鉢	12.2	7.4	4.6	g(硬)	B	橙	80	内外面ヘラミガキ 覆土下層
12	高杯	—	(4.0)	—	g'(細)	B	明褐灰	100	内外面ヘラミガキ 覆土下層
13	壺	—	(10.5)	—	g'(硬)	B	鈍黄橙	35	内面摩耗 床直
14	—底部	—	(4.0)	10.4	g'(粗・磨)	C	鈍褐	20	周縁部ハケメ残る 覆土
15	—底部	—	(4.4)	8.3	w'(細)	A	赤褐	25	覆土
16	—底部	—	(3.5)	8.8	w(硬)	B	赤褐	100	覆土
17	—底部	—	(2.8)	6.0	s・g(硬)	C	灰褐	50	覆土
18	—底部	—	(1.9)	4.4	g'(細)	C	鈍橙	30	覆土
19	—底部	—	(1.6)	4.0	w(細)	B	鈍黄橙	50	ミニチュア 外面ハケメ 覆土
20	瓶	—	(1.2)	4.3	w'(細)	B	鈍橙	50	孔径1.2cm 覆土
21	—底部	—	(1.8)	5.6	g'(粗・磨)	C	灰褐	100	P3中
22	ミニチュア	4.4×2.8	2.1	3.4×1.8	w'(細)	C	浅黄		舟底形 外面ヘラミガキ 覆土下層
23	甕				w(硬)		橙		単節RL 覆土
24	甕				w・g(粗)		橙		単節RL 覆土
25	甕				g(細)		灰褐		単節RL 覆土
26	甕				g(粗)		灰褐		単節LR 覆土
27	甕				g(粗)		鈍黄橙		単節RL 覆土
28	甕				b'(細)		鈍橙		単節RL 覆土
29	壺				g(細)		鈍橙		赤彩 単節RL 覆土
30	壺				g(硬)		橙		突帯に刻み 覆土
31	壺				w(粗)		赤		赤彩 突帯に刻み 覆土
32	高杯				g(細)		橙		単節RL 口縁下端刻み 覆土
33	壺?				g(硬)		橙		単節RL 覆土
34	高杯				g(粗)		赤		赤彩 口唇、突帯に刻み 覆土
35	高杯				w(細)		赤		単節LR 口唇貼付文 覆土
36	甕				b'(細)		鈍橙		単節RL 胴部内外ハケメ 覆土
37	甕				g'(細)		黒褐		単節RL 内面ハケメ 覆土
38	壺				g(硬)		赤		単節RL 覆土

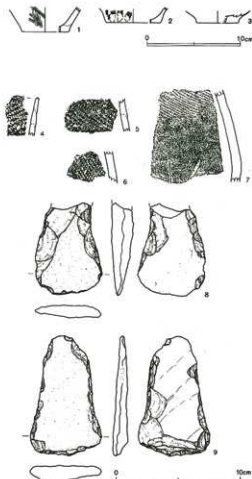
第3号住居跡出土土器観察表

番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考
39	覆土上層	磨石	9.2	4.8	1.7	104.1	砂岩	赤褐色の付着物
40	P3中	磨石	7.5	6.2	1.5	109.6	砂岩	
41	覆土下層	磨石	9.5	6.4	1.4	116.7	砂岩	
42	P1中	打製石斧?	9.4	5.0	3.5	209.0	ホルンフェルス	刃部欠損



第4号住居跡 土層註
 1層 暗褐色土 腐植ロームブロックを少量含む
 2層 暗褐色土
 a 暗褐色土 焼土粒子多量含む
 b 暗褐色土 ローム粒子少量含む しまる
 c 暗褐色土 焼土粒子少量含む やわらかい
 d 暗褐色土 ローム粒子多量含む 砂質
 d' 暗褐色土 ローム粒子少量 焼土粒子微量含む

第17図 第4号住居跡



第18図 第4号住居跡出土遺物

第4号住居跡（第17図）

第4号住居跡は、G-15グリッドに位置する。確認面標高は67.1～67.3mで、第1住居跡群の立地する緩斜面中でも、最も平坦部に位置すると言える。周囲は住居跡に囲まれるものの、一定の距離を有しているかに見える。なお本住居跡と第3号住居跡との間からは、少量の土器片を表採した（第84図）。

住居跡の規模は3.4m×2.59mで、長軸にあたる東西軸方位はほぼN-90°-Wである。形態は南北壁がやや外湾する、小型で不整な隅円長方形である。覆土はほぼ単一土層だったが、住居跡は中央が攪乱により壊されていた。

地山ロームの床面は遺存は悪かったが、南東部は比較的堅緻であった。炉はなかった。わずかにP2の上端にかかるように、軟質の焼土が集中した程度であった。ピットは2基あったが不規則な配列であり、いずれも断ち割りを実施した。P1は北東コーナー壁直下にあり、柱痕状に深くなる。

深さは60cmである。周堤帯状に外周部がわずかに高まっていた。南壁中央直下のP 2は、深さ55cmで下方はやや外傾する。柱穴付近の床面は硬化していた。

遺構の規模が、他の住居跡と比較するとかなり小型であり、竪穴状遺構の可能性もあるが、ビットをもち、硬化した床面から焼土が検出されたことから、本報告では住居跡とする。

第4号住居跡出土遺物(第18図)

出土遺物は少なく床直と認定できるものはない。8、9は砂岩製の打製石斧である。8は西壁際覆土下層から出土した。基部を欠損する。刃部の形状はやや丸く片面に自然面を残す。9は扁平な礫を用い両側縁部に調整を施す。刃部の形状はやや平坦である。片面に自然面を残す。8、9いずれの刃部、基部とも摩耗が著しかった。

第4号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	一底部	—	(2.7)	5.0	g'(細)	C	橙	10	外面ハケメ 内面摩耗 覆土
2	一底部	—	(1.6)	5.8	w(粗)	C	橙	20	周縁部指頭押圧 覆土
3	一底部	—	(1.3)	4.4	w(細)	B	鈍橙	50	覆土
4	甕				w(細)		橙		口唇刻み 単節LR 覆土
5	甕				w(粗)		橙		単節RL 覆土
6	甕				g(細)		褐灰		単節RL 覆土
7	甕				g'(細)		鈍黄橙		単節RL 覆土

第4号住居跡出土石器観察表

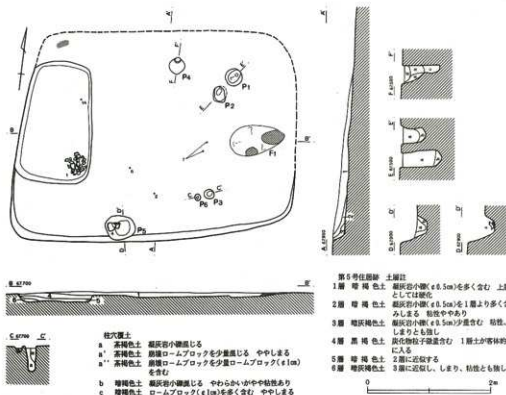
番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考
8	覆土下層	打製石斧	7.4	5.4	1.0	72.2	砂岩	基端部欠損
9	覆土上層	打製石斧	9.6	5.6	1.2	72.9	砂岩	

第5号住居跡(第19図)

第5号住居跡はH-15、16グリッドに位置する。確認面標高は67.3~67.8mである。耕作による攪乱が著しかった。住居跡の北側は流失し、南北軸長は不明である。また規則的な配列の柱穴もなかったことから、住居跡形態の推定も困難である。東西軸長は4.52m、南北軸方位はおよそN-3°-Wである。覆土は他の住居跡に較べ、硬化が著しく凝灰岩小礫を多量に含有していた。

床面は基本的に地山灰褐色土であるが、確実な堅緻面は検出できなかった。F 1は深さ8cmの断面皿状の掘り込みで、焼土は底面に薄く堆積していた。また北西部からも軟質の焼土の集中か所が検出された。ビットは計6基あった。深さはP 1=40cm、P 2=68cm、P 3=41cm、P 4=62cm、P 5=19cm、P 6=11cmである。南壁直下に位置するP 5は貯蔵穴であろうか。覆土下層より高杯形土器が出土した。その他のビットはいずれも住居跡東側にあり、配列は不規則である。

住居跡西側に土塊を検出した。長軸1.98m、短軸1.1mのやや不整の長方形で、深さは床面から約10cmである。底面は地山灰褐色土であった。プラン確認及び土層観察の所見から、5号住に伴う住居内土塊と判断した。なお土塊の南東コーナー部底面直上より壺形土器が出土した。

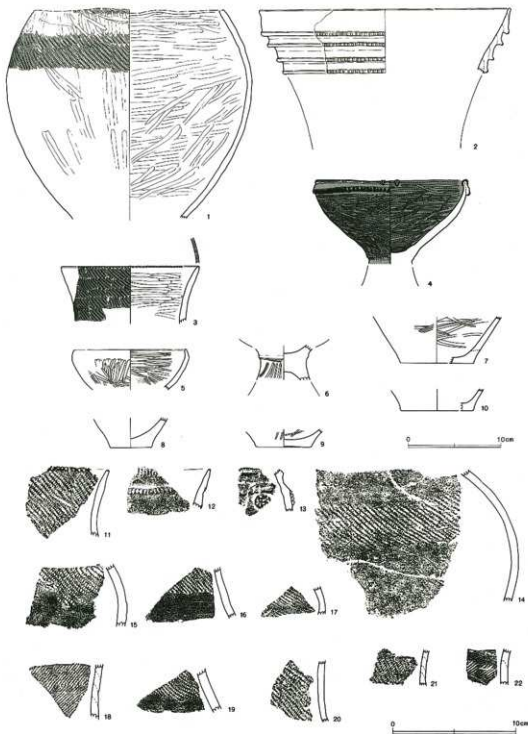


第19図 第5号住居跡

第5号住居跡出土遺物 (第20図)

1は住居内土壌の底面直上より出土した壺形土器である。破片は一括して出土したが、口縁部、頸部、底部は検出されなかった。胴部上位の割れ口は擦られており、擬口縁と思われる。単筋R L縄文による縄文帯が2段認められる。外面は縦位、内面は横、斜位にヘラミガキ調整される。2は壺形土器の口縁部である。4段の輪積痕利用の突帯は、器壁よりおよそ0.8cm程大きくつまみ出され、刻みが施される。口縁端部はやや丸みを帯びる。

4はP 5覆土下層より出土した高杯形土器である。脚部は欠損する。折り返し口縁で、口縁部は緩やかに内湾するが上位で小さく直立する。口縁部下端と口唇部にハケメ状工具により刻みを施される。口唇部の貼り付け文は2か所残存する。4単位と思われる。内外面は丁寧にヘラミガキ調整され赤彩される。また接合部に薄い突帯を有する。5は覆土中出土の鉢形土器である。口縁上位が内湾する。13は高杯形土器であろうか。覆土中より出土した。やや不明瞭だが幅広の沈線下にボタン状貼り付け文をもつ。



第20图 第5号住居跡出土遺物

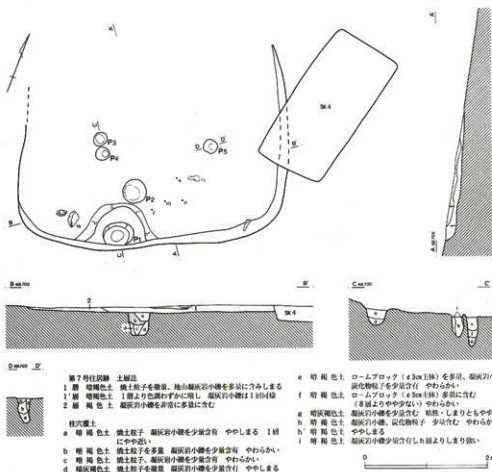
第5号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	20.4	(22.4)	—	w(細)	B	浅黄橙	80	掘口縁 単節RL 住居内土壇床直
2	壺	26.8	(7.9)	—	w・g(粗)	B	橙	5	突帯に刻み 内外面摩耗 覆土下層
3	甕	14.8	(6.2)	—	w(細)	A	灰褐	20	単節RL 覆土
4	高杯	16.4	(9.0)	—	g・b(細)	B	鈍橙	70	赤彩 口唇貼付文 P5中
5	鉢	12.0	(4.4)	—	w(細)	B	鈍橙	15	内面雑なミガキ 覆土
6	高杯	—	(3.8)	—	s・b(細)	B	鈍橙	100	接合部に突帯 覆土下層
7	一底部	—	(5.0)	8.0	w'(細)	C	浅黄橙	20	覆土下層
8	一底部	—	(3.2)	4.5	b・g(粗)	B	橙	100	内外面摩耗 覆土
9	一底部	—	(2.0)	5.8	w'(粗)	B	赤褐	15	覆土
10	一底部	—	(2.3)	7.6	w(細)	C	鈍橙	10	内外面摩耗 覆土
11	甕	—	—	—	g'(細)	—	橙	—	単節RL P5中
12	壺	—	—	—	g'(細)	—	明赤褐	—	口唇、突帯に刻み 覆土
13	高杯?	—	—	—	b・g'(細)	—	橙	—	ボタン状貼付文 覆土
14	壺	—	—	—	w(細)	—	明褐	—	1と別個体 被熱痕あり 住居内土壇
15	甕	—	—	—	w(細)	—	鈍黄橙	—	単節RL 覆土
16	甕	—	—	—	g'(細)	—	橙	—	単節RL 覆土
17	壺	—	—	—	w(細)	—	黄橙	—	赤彩 単節RL 内面ハケメ 覆土
18	甕	—	—	—	w(細)	—	橙	—	単節LR 覆土
19	壺	—	—	—	w・g(粗)	—	鈍黄橙	—	単節RL 覆土
20	甕	—	—	—	w(細)	—	灰褐	—	単節RL 覆土
21	甕	—	—	—	g'(粗)	—	褐	—	単節RL 覆土
22	甕	—	—	—	w(細)	—	暗褐	—	単節LR P5中

第7号住居跡 (第21図)

第7号住居跡は、I-16グリッドに位置する。確認面標高は68.1~68.5mで、胴分沼北丘陵の尾根線に近い。第1住居跡群の南東端に位置し、景観的には住居跡群を一望できる。4号土壇に東壁面を一部壊されていた。住居跡北側が流出しており、炉も検出できなかったため、主軸方位、南北軸長は不明と言わざるを得ないが、本報告ではP1の配置から南北方向に主軸をもつ住居跡とする。東西軸長は4.30m、南北軸方位はおおよそN-23°-Eである。なお流出部分も精査に努めたが、柱穴その他の関連施設は存在しなかったことから、おおよそ2m北に隣接する12号住との重複の有無および新旧関係も不明である。覆土は凝灰岩直上の地山土と近似し、しまりも強かった。また焼土、炭化物もほとんど含んでいなかった。

床面は、おおまかに北側が地山灰褐色土、南側が地山ロームと土質が異なっていた。中央部から北側にかけて堅緻面が分布していた。遺存のよい南壁付近はやや軟質であった。炉は検出されなかった。流出した北側に存在した可能性もある。P2は径38cm、深さ40cmと大型のビットである。覆土中より多量の焼土が検出されたが、底面、側面に被熱痕はなく炭化材なども検出されなかった。P1は貯蔵穴である。南壁際に位置する。地山掘り残しの大型の周境帯を有する。深さ25cm、最大径は約50cm、深さ22cmである。P3、4は重複しないものの非常に近接する。P3は深さ51cm、径23cmである。覆土には多量のロームブロックを含んでおり、人為的な埋め戻しの可能性がある。P



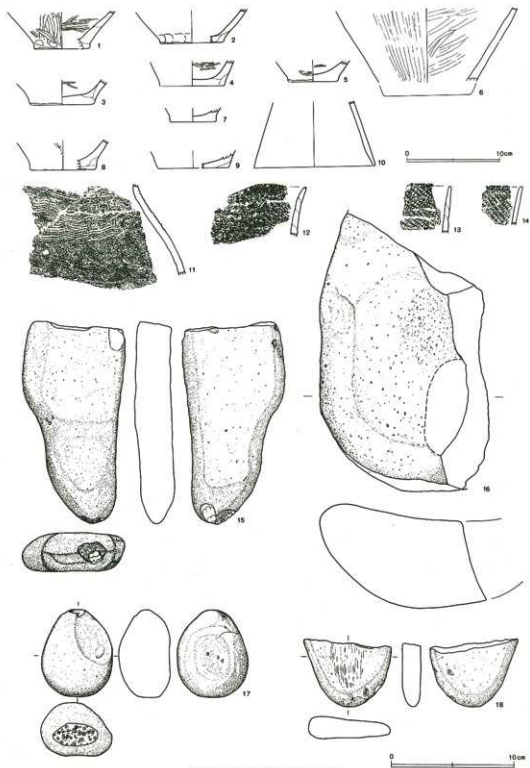
第21図 第7号住居跡

4は深さ37cm、径24cmである。上面で径17cmほどの柱痕が観察されたので断ち割りを実施したところ、やや不整だが先細り状の柱痕が確認できた。P5は深さ42cm、径24cmでP4同様に径14cmの柱痕が確認できた。

第7号住居跡出土遺物（第22図）

遺物は主にP2付近より出土したがいずれも床面よりわずかに浮いていた。11は覆土下層より出土した櫛形土器である。胴部に波状文（1.3cm/8本）、頸部に縞状文を施文した変形土器と思われる。器面が粗れ調整は不明である。

15、17は敲き石である。15は扁平な自然石の先端を作業面とする。17は球形で、全体に被熱痕が残る。16は石皿である。残存部位は2/5程である。ほぼ中央にあたる部分が特に平滑で光沢（実測図破線内）をもつ。18は磨石である。



第22图 第7号住居跡出土遺物

第7号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	一底部	—	(4.0)	6.0	w・g(細)	B	鈍橙	25	内面ハケメ 覆土
2	一底部	—	(3.5)	6.4	w(細)	C	鈍橙	20	内外面摩耗 覆土下層
3	一底部	—	(2.7)	6.6	w(細・w)	C	鈍赤橙	25	内外面摩耗 覆土
4	一底部	—	(2.7)	7.0	w(細)	A	鈍赤橙	70	外面摩耗 覆土
5	一底部	—	(2.2)	5.0	g(細・w)	B	暗褐	100	覆土
6	甕	—	(8.0)	9.2	U	A	明赤褐	20	外面摩耗 覆土下層
7	一底部	—	(1.5)	4.8	w・g(粗)	B	鈍橙	20	内外面摩耗 覆土
8	一底部	—	(3.2)	6.8	w(細・w)	C	鈍橙	20	内外面摩耗 覆土
9	一底部	—	(1.9)	7.6	w(細・w)	C	灰黄	20	内外面摩耗 覆土
10	高杯	—	(7.0)	13.0	w(細・w)	B	橙	25	内外面摩耗 覆土下層
11	櫛形甕	—	—	—	b(細)	—	赤褐	—	頸部簾状文 胴部波状文 覆土下層
12	甕	—	—	—	g(粗)	—	淡黄	—	単節RL 覆土
13	甕	—	—	—	w(細)	—	鈍黄橙	—	単節RL 覆土
14	甕	—	—	—	w(細)	—	黒褐	—	単節RL 覆土

第7号住居跡出土土器観察表

番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	高さcm	重さg	石質	備考
15	覆土下層	敲き石	16.2	8.1	3.1	595.1	砂岩	
16	床面直上	石皿	22.4	13.8	8.3	3,290.0	砂岩	
17	覆土上層	敲き石	7.0	5.7	4.3	231.7	砂岩	
18	覆土上層	磨石	5.4	7.1	1.8	71.0	砂岩	

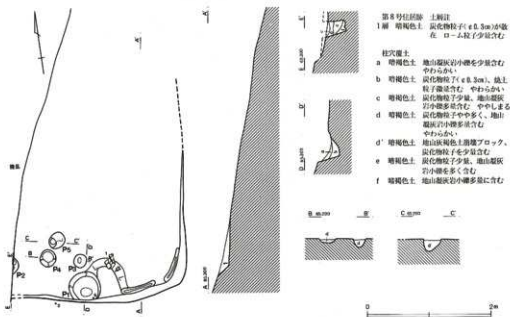
第8号住居跡(第23図)

第8号住居跡はF-15グリッドに位置し、確認面標高は64.8~65.2mである。25号住とともに第1住居跡群北外縁部にあたる。北側は流出し、西側も現道路により完全に壊されていたため住居跡の正確な規模は不明である。南北軸方位は推定でN-5°-E程度と思われる。なお9号住とは最端で1.5mと近接し、また25号住とも北西がかなり近接すると思われる。

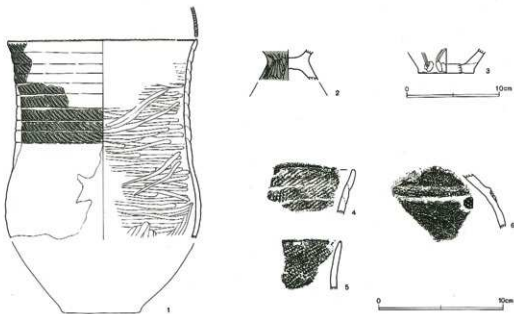
覆土はほとんど残っておらず、床面も北側は完全に流出していた。床面は地山灰褐色土であるがやや軟質であった。炉については、焼土もまったく検出されておらず、流出した可能性が高い。P1は貯蔵穴であろう。南壁に接して深さ19cmとやや浅い。また地山堀り残しの周堤帯がP1東側に巡っていた。その他のピットはいずれも南西側に偏り不規則に配置していた。深さはP2=32cm、P5=20cmで、凝灰岩の岩盤層まで掘削されていた。P3、4はいずれも浅く断面皿状の掘り込みであった。また南東コーナー部に壁溝状の浅い掘り込みが断続的に検出された。なお流出した住居跡北側も精査したが、柱穴などの関連施設は検出されなかった。

第8号住居跡出土遺物(第24図)

遺物は南壁付近から少量出土した。1の甕形土器は周堤帯直上より出土した。推定口径20.4cmと大型で、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。9段の輪積痕を明瞭に残し、縄文施文も丁寧である。口唇部にはハケメ状工具により刻みが施される。胴部外面調整は器面が粗れ不鮮明だが、ハケメ調整の後、ナデ類似の調整が施される。内面はヘラミガキで光沢をもつ。6はP2覆土中より出土した。無頸甕形土器であろうか。突帯を有しボタン状貼り付け文をもつ。



第23図 第8号住居跡



第24図 第8号住居跡出土遺物

第8号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	20.4	(21.3)	—	g・w(細)	A	黒褐	20	輪横痕顯著 単節RL 床直
2	高杯	—	(3.3)	—	g・w(細)	B	赤	100	赤彩 南壁外
3	一底部	—	(2.7)	6.0	g(細)	C	鈍黄橙	15	覆土
4	甕				w(細)		橙		単節LR P2中
5	甕				g(粗)		黒褐		単節LR 覆土
6	甕?				w(細)		橙		突帯下にボタン状貼付文 P2中

第9号住居跡 (第25、26図)

第9号住居跡は、F-15、G-15グリッドに位置する。確認面標高は65.1～66.1mであり緩斜面から北斜面に至る地形の変換点にある。本遺跡で最も住居跡が密集する部分であり、15号住とは南西部が重複し、南東コーナーは3号住と0.8mと近接する。また北に位置する8号住、北西に位置する14号住とも近接する。なお住居跡はほぼ中央に現道路が走っており、床面の一部と壁の一部が壊されていた。北側は流出しており推定だが、6.36m×6.0m程の隅円方形であろうか。確実な柱穴がなかったので判然としない。貯蔵穴の配置から主軸は南北軸と思われる。方位はおよそN-2°-Eである。

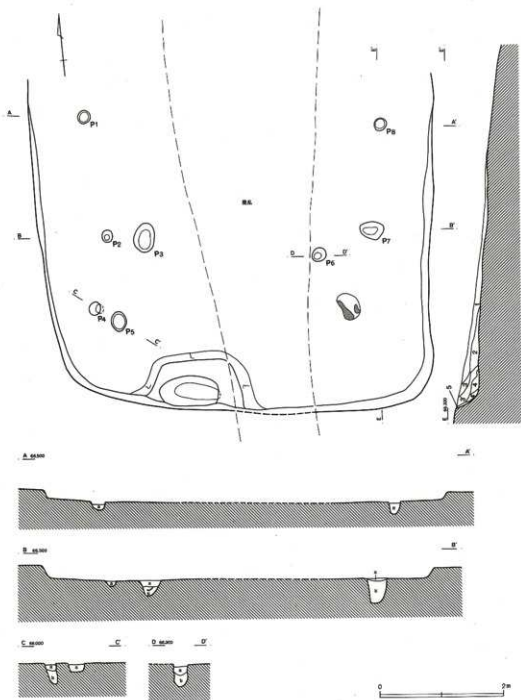
現道路及び試掘トレンチの影響もあり、確認面では明瞭なプランは検出できず、わずかに南東部コーナー付近のみ検出できたにとどまる。また15号住と重複する南西コーナー付近から多量の土器片が検出され、新旧関係の把握に努めたが、重複部がほぼ均一土層のため、本住居跡が新しいと考えた。覆土は比較的良く残っており、基本的には斜面上方からの流れ込みと思われる。

床面は地山灰褐色土であった。なお住居跡北側は、流出のため凝灰岩が一部露出していた。南壁下が堅緻であったが全体に不明瞭であった。炉は南東コーナー付近の断面皿状の掘り込み中に少量の焼土粒子が検出されたものである。現道路が住居跡ほぼ中央を壊すこともあり、複数の炉を有していたかは不明である。貯蔵穴は南壁直下やや西よりに検出された。大型で地山掘り残しの周堤帯を有する。東側はややオーバーハングする。遺物は土器片が数点出土したのみである。柱穴はP7が深さ40cmと深いが、それ以外は比較的浅く、その配置からP7と対称となるP3も深さ25cmである。またP1、8は流出を考慮しても推定で約30cmの深さである。なおP2、5以外は岩盤を掘り込んでいた。住居跡の規模にもかかわらず他の大型住居跡と比較すると柱穴が貧弱な感がある。地山にすでに凝灰岩が露出しているという立地の影響であろうか。

南東コーナー付近から数点の炭化材が検出された。南壁際から倒れ込んだような状態で、それに伴って炭化物粒子、焼土が多量に検出された。なお南壁面は被熱硬化が著しく、断ち割ったところ壁中の地山土も約5cmほどの被熱痕が認められた。

第9号住居跡出土遺物 (第27～29図)

遺物は比較的多く出土した。出土傾向としては南西コーナー部覆土上層、P3付近の床面直上、南東コーナー部床面直上と大きく3群に別れる。なお南西コーナー部覆土上層から出土した遺物に関しては、不手際なことに(9号住南西コーナー付近)一括として出土地点を記録しなかった(観察表参照)。



第25图 第9号住居跡

1. 赭 褐 色 土 炭化物 (1~2cm) 少量, 炭化物粒子、烧土粒子少量。地山
礫层若小體含有

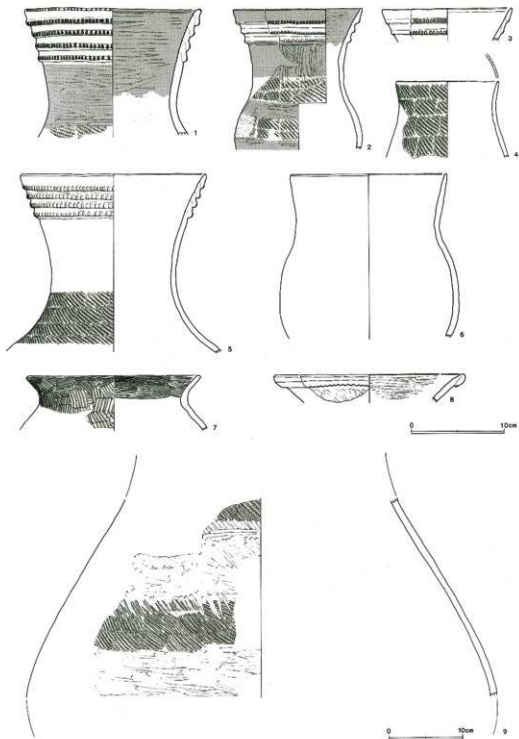
- | | |
|----------|--|
| 2'層 暗褐色土 | 炭化物粒子(≒0.5cm)を多量 粘土粒子少量 地山崩れ灰岩
小塊少し混含有 |
| 3'層 暗褐色土 | 炭化物粒子(≒0.5cm)を多量 粘土粒子少量 崩壊ロームブ
ロック少量 同粒子多量含む |
| 3'層 暗褐色土 | 3'層より崩壊ロームブロック多く炭化物粒子もやや多し
炭化物粒子(炭状の粒子)が主体となり細度の高い炭化材
料多量 粘土粒子、ローム粒子多量含む |

- 4'層 暗褐色土 4層より焼土を多く含む
5層 赤褐色土 焼土粒子が主律を占める 壁が破断している

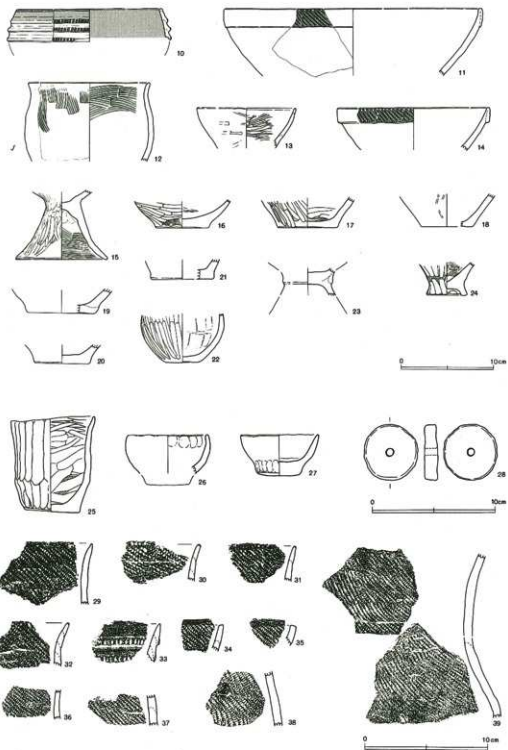
暗褐色土 燒土粒子、炭化物粒子、凝灰岩小礫顯含砂

- a' 暗褐色土 凝灰岩小礫少量含む
b 黒褐色土 粘土粒子、炭化植物粒子やや多く含む
b' 黒褐色土 粘土粒子、炭化植物粒子やや少量含む やわらかい

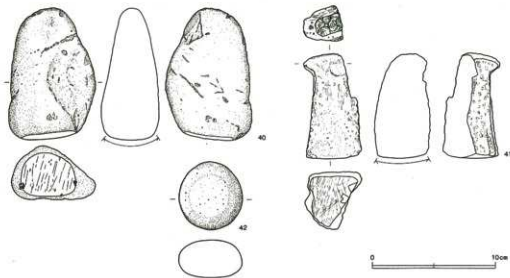




第27図 第9号住居跡出土遺物 (1)



第28图 第9号住居跡出土遺物 (2)



第29図 第9号住居跡出土遺物 (3)

1、2、3、5、9は吉ヶ谷式の壺形土器である。1は南西コーナー部床面上を中心に散逸していた。4段の突帯を有し口唇部とともにハケメ状工具により刻みを施される。胴部上半に単節R L縄文が施文される。頸部無文帯および口縁部内面に赤彩痕が明瞭に残る。2は南西コーナー部覆土上層より出土した。胴部下半以下を欠損する。3段の突帯を有し刻みを施される。遺存部位には2段の縄文帯を有する。原体は単節R L縄文であるが、1の原体と比較するとかなり細かい。赤彩される。5は床面直上から倒立した状態で出土した。1と同様4段の突帯を有するが、口唇部に刻みは無い。胴部上半には単節R L縄文が施文される。9は床面直上出土の大型の壺形土器の胴部上半部である。遺存部位中には2段の縄文帯を有する。胴部最大径は推定で64cmである。

6は覆土下層より出土した無文の甕形土器である。器面が粗れ、器面調整は不明である。7、8は南西コーナー部覆土上層より出土した。7は台付甕の口縁部である。口縁端部には端面が作り出され、内外面ともハケメ調整される。8の壺形土器は南西部コーナー覆土上層より出土した。幅狭の折り返し口縁をもち、下端に刻みを施す。11、14は折り返し口縁をもつ高杯形土器である。いずれも下端に刻みをもたない。15は南西コーナー部覆土上層出土の高杯形土器の脚部である。なお胎土、焼成度合については7、8、15は近似する。

25、26、27はミニチュア土器である。25は後述する18号住居跡一括出土品と器形はやや近似するが、調整方法、焼成度合などが明瞭に異なる。内外面ともヘラミガキ調整される。28は床面直上出土の土製紡錘車である。

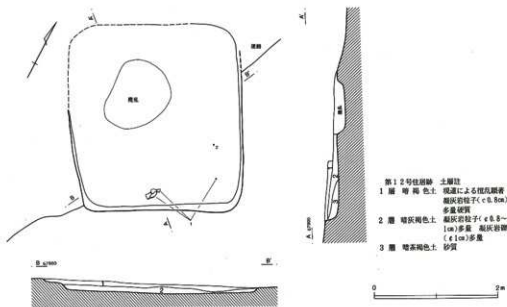
40、41は棒形磨石である。40の作業面はわずかに凸状で使用痕も明瞭に残るが、それ以外はすべて自然面である。41は床面直上出土で被熱痕が全体に残る。主要作業面以外にも擦痕が認められる。また基端部には敲打痕が認められる。

第9号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	18.8	(13.8)	—	w(細)	B	橙	40	頸部赤彩 単節RL 床直
2	壺	14.0	(15.1)	—	w(細)	B	鈍黄橙	40	赤彩 単節RL 南西コーナー上層
3	壺	14.0	(3.5)	—	w(粗)	B	褐	20	内外面摩耗 突帯に刻み 南西コーナー上層
4	甕	11.0	(8.2)	—	w(粗)	B	橙	50	単節RL 覆土下層
5	壺	20.4	(12.9)	—	w(細)	B	橙	60	突帯に刻み 単節RL 床面側立
6	甕	16.6	(18.2)	—	g'(細)	B	鈍褐	25	内外面摩耗 無文 覆土下層
7	甕	18.4	(5.9)	—	g(粗)	A	明褐	30	内外面ハケメ顯著 南西コーナー上層
8	壺	20.2	(3.1)	—	b'(細)	A	明赤褐	15	口縁外面ナデ?下端に刻み南西コーナー上層
9	壺	—	(26.2)	—	w'(細)	B	黄褐	15	単節RL 床面直上
10	高杯	17.0	(3.4)	—	s'w(細)	B	鈍黄橙	5	赤彩 突帯に刻み 覆土
11	高杯	25.6	(7.2)	—	w(細)	C	鈍黄橙	10	単節RL 南西コーナー上層
12	甕	13.0	(8.5)	—	b(細)	A	橙	15	内外面ハケメ 覆土下層
13	鉢	10.6	(4.3)	—	b(細)	B	鈍黄橙	10	P3中
14	高杯	16.4	(4.6)	—	w(粗)	C	鈍褐	20	単節RL 南西コーナー上層
15	高杯	—	(7.4)	9.8	g'(細)	B	橙	90	脚部外面ミガキ内面ハケメ南西コーナー上層
16	一底部	—	(3.0)	5.6	g'(細)	C	褐	100	覆土下層
17	一底部	—	(3.2)	6.4	w(細)	B	鈍黄褐	100	覆土下層
18	一底部	—	(3.5)	5.6	w'g(細)	C	橙	25	床直
19	一底部	—	(2.7)	7.0	g'(細)	B	橙	20	P3中
20	一底部	—	(2.0)	5.6	b'g(細)	A	褐	100	P3中
21	一底部	—	(2.1)	6.6	w(細)	B	鈍黄褐	25	貯穴中
22	壺	—	(5.3)	3.6	b(粗)	B	鈍黄橙	30	底面やや上げ底状内面木ロナデ 覆土
23	高杯	—	(3.0)	—	w(粗)	C	灰褐	30	接合部に突帯 床直
24	脚部	—	(3.5)	4.2	w'b(細)	A	赤褐	100	内面ハケメ 覆土上層
25	ミニ鉢	6.7	7.9	4.3	w'g(細)	B	鈍橙	70	内外面ミガキ 床直
26	ミニ鉢	6.4	(3.1)	—	w(細)	C	灰褐	30	口縁指頭押圧痕残る 覆土上層
27	ミニ鉢	6.3	3.3	3.5	w(細)	C	灰褐	70	底部周縁指頭押圧 南西コーナー上層
28	特鉢車	直径4.6	厚1.1	—	w'g(細)	A	黒褐	100	孔径0.7cm重さ31.50g土製 床直
29	甕	—	—	—	w(細)	鈍橙	—	—	単節RL(太細混合せ) 覆土
30	甕	—	—	—	g'(細)	黄橙	—	—	単節RL 覆土
31	甕	—	—	—	w(細)	鈍橙	—	—	単節RL 南西コーナー上層
32	甕	—	—	—	w(細)	橙	—	—	単節RL 南西コーナー上層
33	壺	—	—	—	w(細)	鈍橙	—	—	突帯に刻み 覆土
34	高杯?	—	—	—	w(細)	橙	—	—	単節RL 南西コーナー上層
35	高杯?	—	—	—	w(細)	灰褐	—	—	単節RL 南西コーナー上層
36	甕	—	—	—	w(細)	鈍橙	—	—	単節RL 南西コーナー上層
37	甕	—	—	—	w(粗)	明赤褐	—	—	単節RL 南西コーナー上層
38	甕	—	—	—	b(粗)	鈍褐	—	—	単節RL 南西コーナー上層
39	甕	—	—	—	w(細)	鈍橙	—	—	単節RL 覆土下層

第9号住居跡出土石器観察表

番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考
40	覆土上層	磨石	10.6	7.0	4.4	432.7	砂岩	
41	床面直上	磨石	8.5	4.4	4.6	197.8	フォルンヘルス	被熱痕
42	覆土上層	磨石	5.5	5.1	3.0	120.6	砂岩	



第30図 第12号住居跡



第31図 第12号住居跡出土遺物

第12号住居跡（第30図）

第12号住居跡はH-15グリッドに位置し、確認面標高は67.4～67.8mである。北東に7号住が存在する。現道路により大半を壊されるが、2.98m×2.80m程の規模と思われる。南北軸方位はおおよそN-28°-Wである。小型の隅円方形と思われる。

覆土は薄く攪乱の影響が大きい。基本的には斜面上方からの流れ込みであった。床面は遺存状態が悪いが、地山ロームであった。炉、柱穴などは検出できなかった。ただし中央部にある攪乱土中から少量の焼土が検出された。

第12号住居跡出土遺物（第31図）

第12号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	—	(10.8)	—	灰(黄-赤)	C	橙	25	単節RL
2	一底部	—	(0.8)	4.6	w'(細)	C	鈍橙	25	覆土層
3	一底部	—	(1.0)	2.4	w(細)	C	明褐灰	100	ミニチュア 覆土層

遺物は少量が覆土中より検出されたに過ぎない。1の壺形土器胴部は北壁直下の覆土上層からの出土である。3は覆土中から出土したミニチュア土器の底部である。

第13、17号住居跡（第32、33図）

第13号住居跡、第17号住居跡は重複する。17号住が古く13号住が新しい。いずれもG-14グリッドに位置し確認面標高は66.5～66.8mと比較的平坦な部分にある。いずれの住居も大半は調査区外である。覆土の堆積状況は基本的には、17号住の自然埋没→13号住構築のための掘削・重複部分の貼床による補強→13号住の自然埋没の順が想定される。ただし17号住のP1上層土は崩壊ロームブロックを多量に含んでおり、13号住構築段階で部分的に埋め戻したと思われる。近接する遺構は、1.5m南に第19号住居跡がある。また13号住の0.6m北に第16号住居跡が位置する。これらの新旧関係は調査区際土層断面でも不明であった。

第17号住居跡

17号住は本遺跡で最も遺存状況が良好な部類に属し、残存壁高は60cmあった。僅かに南東コーナー一部のみの調査だが、P1とした貯蔵穴の位置を基準とすると、主軸はほぼ東西方向を向くものと思われる。

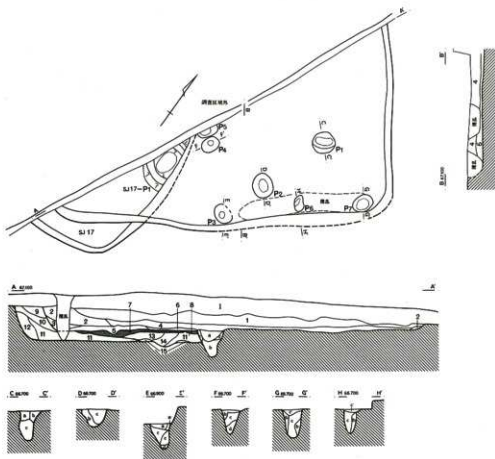
床面は地山灰褐色土で全体に堅緻であり、壁際も同様であった。また壁崩落も比較的少なくほぼ直立する。炉及び柱穴は検出されていない。周堤帯を有する貯蔵穴が調査区際から検出されている。最大径52cmと比較的大型の楕円形だが、床面から約12cmと浅い。なお周堤帯構築土は地山灰褐色土に近似するもののローム粒子が不均一に含まれており、貼り付けの可能性がある。

第17号住居跡出土遺物（第34図）

遺物は南東コーナーより1の壺形土器が出土した。上面からの流入（廃棄か？）で、17号住には帰属しない可能性がある。胴部下半および口縁部を欠損するが、現存部位で1段の輪積痕が認められる。単節LRによる縄文帯は、輪積痕をまたいで施文される口縁部および胴部上半の2段があるが、いずれも横位、斜位とやや雑な施文である。14は覆土下層から出土した敲き石である。両面に敲打痕が認められる。11は太細撚合わせ単節RL縄文を施文した甕形土器の破片である。覆土下層より出土した。

第13号住居跡

13号住は南北軸長は不明だが、東西軸長が5.45mの隅円長方形あるいは隅円方形が想定される。東西軸方位はN-55°-Eである。覆土上層のほとんどが耕作土であり、北壁はわずかに残存していた。床面は17号住と重複する部分に厚さ約3cmのローム主体の貼床が検出された。それ以外は地山ロームを床面としている。東壁際は耕作により壊されるが、全体に堅緻であった。炉および貯蔵穴はなかった。ピットは計6基検出した。深さはP1=48cm、P2=28cm、P3=41cm、P4=40cm、P5=46cm、P6=39cmである。住居跡の大半は調査区外のため、主柱穴の配列も不明であるが、第7号住居跡の柱穴同様、極めて近接するP4、5はP4覆土上層が非常に硬化していたことから、改築の可能性もある。P6、7は攪乱土を除去後検出されたため覆土上層の様相は不明であった。



- 第13号住居跡 土層註
- 1層 暗褐色土 ローム粒子多量、炭化物ロームブロックや多く含む
 - 2層 暗褐色土 ローム粒子多量、炭化物ロームブロック多量含む
 - 3層 暗褐色土 ローム粒子少量、炭化物粒子(ε0.1m)を少量含む
 - 4層 暗褐色土 ローム粒子多量、炭化物ロームブロック少量含む
 - 5層 黒色土 炭化物粒子非常に多量 炭化材料(1~2cm)も散在する 焼土粒子少量含む
 - 6層 黒褐色土 ローム粒子を少量、炭化物粒子少量含む ややしまる
 - 7層 暗褐色土 ローム粒子、炭化物ロームブロックを多量含む ややしまる
 - 8層 黄褐色土 ローム粒子、炭化物ロームブロック(あまり炭化進んでいない)を多量含む堅固である 炭化物粒子少量含む

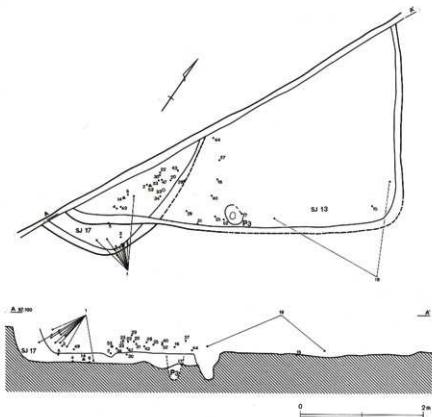
- 粒穴覆土
- a 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子少量含む やわらかい
 - a' 暗褐色土 aよりロームさらに多く ややしまる
 - b 褐色土 ロームブロック多く含まれ強し
 - c 暗褐色土 炭化物粒(ε0.2m)少量含む やわらかい
 - c' 暗褐色土 攪乱を受けている
 - d 黒褐色土 ローム粒子多く含む土層よりやや、やわらかい

- 第17号住居跡 土層註
- 9層 暗褐色土 ローム粒子多量に含む やわらかい
 - 10層 暗褐色土 ローム粒子・炭化物ロームブロック多量含む 炭化物粒子(ε0.2m)少量含む やわらかい
 - 11層 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物ロームブロック少量含む 炭化物粒子、炭化材料を少量含む
 - 11'層 黒褐色土 ローム粒子やや多量
 - 12層 黒褐色土 ローム粒子少量 炭化物ロームブロック多量含む
 - 13層 暗褐色土 ローム粒子・炭化物ロームブロック(ε2cm中心)多量に含む
 - 14層 暗褐色土 ローム粒子多量 ややしまる
 - 15層 灰褐色土 地山土と近似し炭灰石小礫少量含む炭がローム粒子を少量含む

第32図 第13、17号住居跡

第13号住居跡出土遺物 (第35図)

遺物は比較的多く出土した。出土傾向としては17号住居跡と重複する部分にあたる貼床上に特に多かった。22は瓶の底部である。直径1.6cmの孔が焼成前に穿たれる。33は土製紡錘車である。およそ1/2を欠損する。



第33図 第13、17号住居跡遺物出土状況

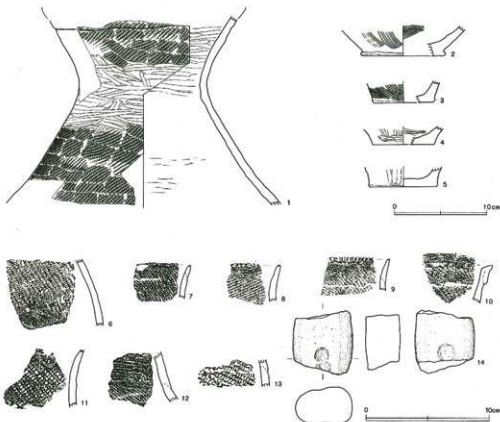
53は敲き石である。扁平な礫の先端を作業面とする。なお片面に不規則な擦痕が認められる。

54は覆土上層より出土した鏡の石製模造品である。1/3ほどを欠損する。凝灰岩製でやや不整な円形である。鏡胎の直径3.8cm、同最大の厚さ0.6cm、鈕の直径1.5cm、同厚さ0.8cmである。鏡面、鏡背、鈕とも研磨痕が残る。なお割れ口を観察したところ鈕の穿孔は両方向からである。

第14号住居跡（第36図）

第14号住居跡は、F-14グリッドに位置する。確認面標高は65.6～66.2mで住居跡北側が流出していた。また5号土壌に一部を壊されていた。近接する遺構としては9号住が東へ1.5m、15号住が南へ1.4mの距離にある。住居跡の北西半分は調査区外にあると思われ、規模、形態は不明である。残存する南壁はやや外湾していた。南壁を基準とすると主軸方位は、およそN-8°-Eである。

確認段階からすでに床面が露出しており、攪乱の影響もあることから遺存状態は極めて悪い。僅かに南壁近辺のみ覆土が残っていた。残存する床面は、壁直下をのぞき堅緻であった。土質は地山ロームである。炉は1基存在した。東壁に近く中央やや南よりである。深さ5cmの断面皿状の不整楕円形を呈するが、それほど硬化していなかった。P1はその配置から当初貯蔵穴を想定したが、



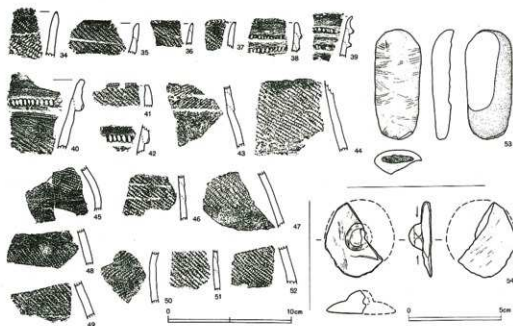
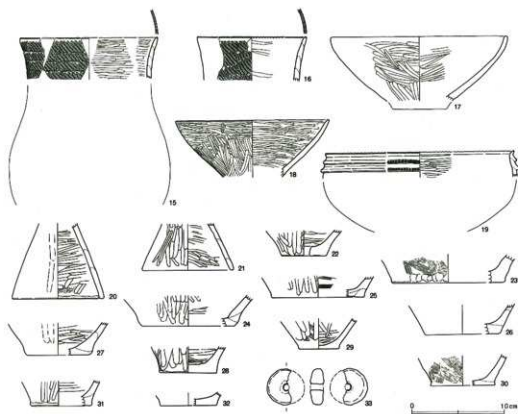
第34図 第17号住居跡出土遺物

第17号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	—	(20.2)	—	g'b(硬)	B	浅黄橙	70	半筋LR 覆土上層～下層
2	一底部	—	(3.2)	8.7	w(細)	A	鈍褐	10	内外面ハケメ 覆土下層
3	一底部	—	(2.3)	6.4	b'(細)	A	灰褐	20	内外面摩耗 外面ハケメ 覆土下層
4	一底部	—	(2.0)	6.6	w'(細)	A	鈍赤褐	25	覆土下層
5	一底部	—	(2.2)	7.2	w(細)	B	灰褐	60	覆土下層
6	甕	—	—	—	b'(細)	—	鈍赤褐	—	半筋RL 覆土下層
7	甕	—	—	—	w(細)	—	鈍赤褐	—	半筋RL 覆土
8	甕	—	—	—	g'(細)	—	黄橙	—	半筋LR 覆土
9	甕	—	—	—	w(細)	—	褐	—	半筋RL 覆土
10	甕	—	—	—	g'(細)	—	橙	—	半筋RL 覆土
11	甕	—	—	—	g'(粗)	—	鈍褐	—	半筋RL(太細燃合せ) 覆土
12	甕	—	—	—	b'(細)	—	黒褐	—	半筋RL 覆土
13	甕	—	—	—	g'(硬)	—	暗褐	—	半筋RL 内面ハケメ 覆土

第17号住居跡出土石器観察表

番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考
14	覆土下層	敲き石	5.1	4.8	3.0	95.7	砂岩	両面に敲打痕



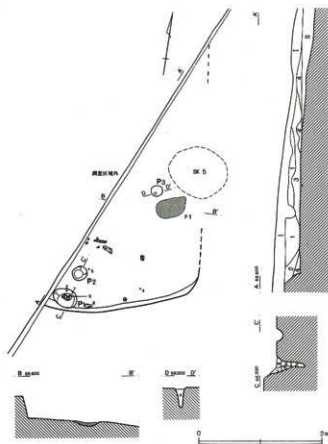
第35图 第13号住居跡出土遺物

第13号住居跡出土土器観察表

番号	器 種	口 径	器高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存	出土位置・その他
15	甕	14.8	(4.4)	—	w'(粗)	A	鈍褐	10	単節RL 覆土下層
16	甕	11.8	(4.7)	—	w(細)	B	鈍褐	10	単節RL 覆土上層
17	鉢	18.8	(6.9)	—	w(細)	B	橙	25	P3中
18	鉢	16.6	(6.1)	—	w(細)	A	明赤褐	25	覆土下層
19	高 杯	20.4	(3.8)	—	b'(細)	B	鈍黄橙	5	口唇、突帯に刻み 覆土
20	高 杯	—	(8.1)	9.6	w(細)	A	橙	25	外面摩耗 覆土上層
21	高 杯	—	(5.0)	9.6	b'(細)	C	黄灰	15	覆土
22	瓶	—	(2.8)	4.8	g(粗)	B	明褐	100	孔径1.6cm 孔周囲ナデ 覆土上層
23	—底部	—	(2.9)	11.8	g'(細)	C	褐灰	20	内外面摩耗 外面ハケメ残る 覆土上層
24	—底部	—	(3.3)	9.9	w・b'(細)	B	鈍橙	10	覆土
25	—底部	—	(2.2)	9.8	w(細)	B	褐灰	10	覆土上層
26	—底部	—	(3.2)	7.9	g'(細)	C	灰褐	15	覆土
27	—底部	—	(3.5)	6.6	w(粗)	A	暗褐	20	覆土上層
28	—底部	—	(2.8)	6.0	b(粗)	B	鈍橙	100	覆土上層
29	—底部	—	(3.3)	4.2	w(粗)	B	橙	100	覆土上層
30	—底部	—	(3.2)	6.9	g'b(粗)	A	鈍黄褐	25	床直
31	—底部	—	(2.7)	6.3	w'(細)	B	灰褐	20	覆土下層
32	—底部	—	(1.4)	6.0	w(細)	B	鈍橙	20	覆土
33	紡錘車	径4.0	厚0.9	—	b(細)	A	灰褐	60	孔径0.7cm 重さ15.12g 土製 覆土上層
34	甕	—	—	—	w(粗)	—	黒褐	—	単節RL 覆土下層
35	甕	—	—	—	b'(細)	—	鈍黄橙	—	単節RL 覆土
36	甕	—	—	—	w(細)	—	鈍黄橙	—	単節RL 覆土
37	甕	—	—	—	w(細)	—	灰黄褐	—	単節RL 覆土
38	高 杯	—	—	—	w(細)	—	褐灰	—	突帯に刻み 覆土
39	壺	—	—	—	w(細)	—	浅黄橙	—	突帯に刻み 覆土
40	壺	—	—	—	w(細)	—	鈍黄橙	—	突帯に刻み 頸部ハケメ 覆土上層
41	高杯?	—	—	—	g'(粗)	—	鈍黄橙	—	単節RL 覆土
42	壺	—	—	—	b'(細)	—	褐灰	—	突帯に刻み 覆土
43	甕	—	—	—	b'(細)	—	橙	—	単節LR 覆土上層
44	甕	—	—	—	s・w(細)	—	鈍橙	—	単節RL 覆土
45	甕	—	—	—	b・w(粗)	—	黒褐	—	単節RL 覆土
46	甕	—	—	—	w(細)	—	鈍黄橙	—	単節RL 覆土
47	甕	—	—	—	g'(細)	—	灰赤	—	単節RL 内面ハケメ 覆土下層
48	甕	—	—	—	w(細)	—	黒褐	—	単節RL 覆土
49	壺	—	—	—	b'(細)	—	暗褐	—	赤彩 単節RL 覆土下層
50	甕	—	—	—	w(粗)	—	黒褐	—	単節LR 覆土
51	甕	—	—	—	g'(粗)	—	褐灰	—	単節RL 覆土
52	甕	—	—	—	w'(細)	—	鈍黄橙	—	単節RL 内面ハケメ 覆土

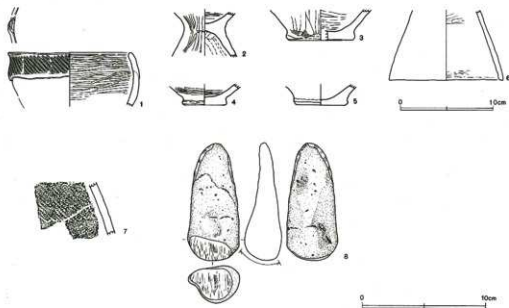
第13号住居跡出土石器観察表

番 号	出土地点	器 種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石 質	備 考
53	覆土下層	敲き石	8.8	3.7	1.9	89.8	砂岩	
54	覆土上層	模造品(鏡)	(直径)3.8	径1.5	1.4	4.9	凝灰岩	全面に研磨痕残る



- 第14号住居跡 土層図
- 第1層 耕作土
- 第2層 褐色土
- 第3層 黒褐色土 炭化植物残片少量含む 根痕
瓦多し
- 第4層 暗褐色土 炭化植物残片少量含む ローム粒
子をやや多く炭化物粒子少量含む 根痕及多し やわらかい
- 第5層 暗褐色土 炭化植物残片少量含む ローム粒
子をやや多く炭化物粒子少量含む
- 第6層 暗褐色土 ローム粒多量 炭化物粒子
少量含む
- 第7層 暗褐色土 炭化植物残片少量含む
柱穴
- a 黒褐色土 炭化材料を多量に含む
- b 暗褐色土 炭化材料、炭化植物残片少量含む
やわらかい
- c 暗褐色土 炭化材料少量含む やわらかい
- d 暗褐色土 炭化材料少量含む やわらかい
- e 黒褐色土 ローム粒を少量 炭化物粒子
炭化植物残片少量含む

第36図 第14号住居跡



第37図 第14号住居跡出土遺物

第14号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口 径	器高	底径	胎 土	焼成	色調	残存	出土位置・その他		
1	片 口	13.3	(5.8)	—	w'(粗)	B	赤褐	25	単節RL	胴部外面ナデ	覆土下層
2	高 杯	—	(4.7)	—	w'g'(細)	A	橙	80			P1中
3	—底部	—	(3.3)	6.8	g'(細)	B	鈍橙	15			覆土
4	—底部	—	(2.3)	4.4	w(細)	A	黒	100	内外面摩耗		覆土
5	—底部	—	(2.3)	5.2	w'(粗・粗)	C	鈍橙	100	内外面摩耗		覆土下層
6	高 杯	—	(7.5)	12.2	w(細)	B	橙	20	内外面摩耗		P1中
7	壺	—	—	—	g(粗)	—	橙	—	赤彩 単節RL		覆土下層

第14号住居跡出土土器観察表

番 号	出土地点	器 種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さ g	石 質	備 考
8	覆土下層	磨 石	9.4	4.1	3.0	138.8	砂岩	

断ち割りを実施したところ、途中から掘り方は先細りとなり、柱痕と対応して径およそ8cmの炭化材が検出された。深さは45cmである。なお炭化材片はP1上面および1m北からも床面からわずかに浮いた状態で数点出土した。P3はP1同様に掘り方が先細りとなるが柱痕は検出されなかった。径21cm、深さ32cmである。P2は径24cm、深さ9cmであった。

第14号住居跡出土遺物（第37図）

少量の遺物がP1付近を中心に出土した。1は北壁際の覆土下層より出土した片口状のつまみだしを有する土器である。口縁部は輪積みを下方へ押しつけて折り返し状口縁とする。1/4の残存であり、片口と断定できないが、単節RL縄文はそれを避けるように施文される。胴部外面はナデ、内面はヘラミガキ調整される。

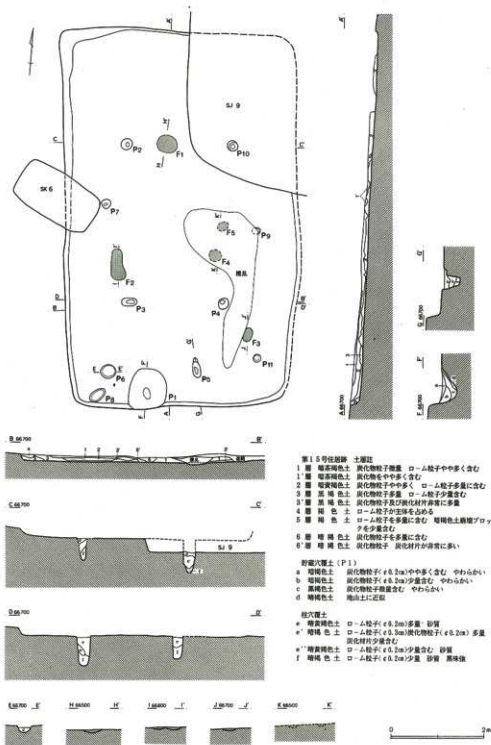
8は南壁直下より出土した棒形磨石である。作業面はやや凸に膨らんでいる。平滑で使用痕が残るが、側面にも部分的に擦痕が認められる。

第15号住居跡（第38、39図）

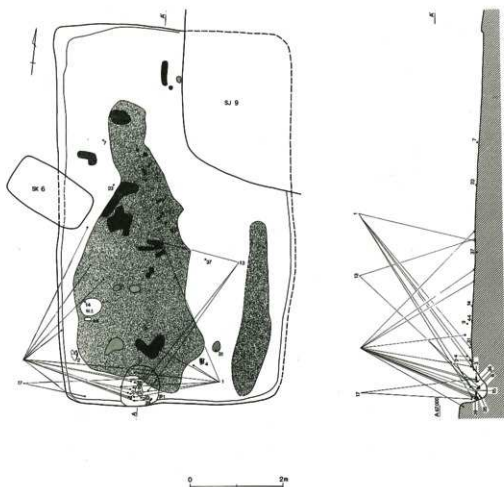
第15号住居跡はF-14、15、G-14、15グリッドにまたがって所在する。確認面標高は65.9～66.6mで、地形的には緩斜面縁辺とも言える。住居跡東側に現道路が通り、東壁面の上位を壊す。北東コーナーは9号住に壊され、6号土壌が西壁ほぼ中央を壊していた。また周囲は重複しないながらも住居跡が密集する。規模は8.03m×5.13mと本遺跡の住居跡中でもっとも大型の隅隅長方形である。主軸方位はおおよそN-4°-Wである。

床面は、南側が地山ローム、北側が地山灰褐色土であった。明瞭な堅緻部はほぼP2、3、4、10に囲まれた範囲が相当するが、その外側も北側を除きそれほど軟質ではない。炉は計5基あった。ただしF4、5の上面は攪乱を受けていた。住居跡のほぼ主軸にのるF1は深さ7cmで比較的焼土堆積は厚かったが、F2は4cm、F3は3cmと比較的浅かった。ただしいずれも被熱硬化は著しかった。P1は貯蔵穴である。南壁直下やや西よりに位置し、径87cm、深さ34cmと大型であるが底面は狭い。遺物も他住居跡の貯蔵穴に較べ、かなりの点数が出土した。

主柱穴はP2、3、4、10と思われる。深さはそれぞれ48、64、49、70cmである。特にP10は9号



第38図 第15号住居跡



第39図 第15号住居跡遺物出土状況

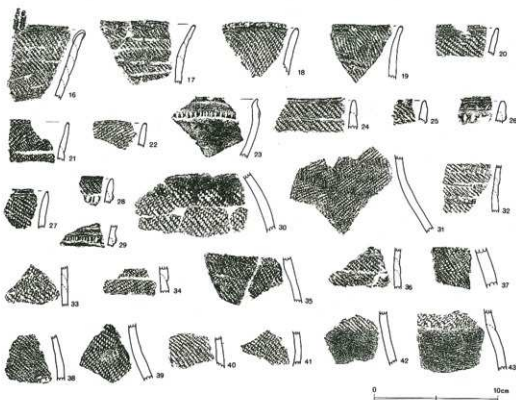
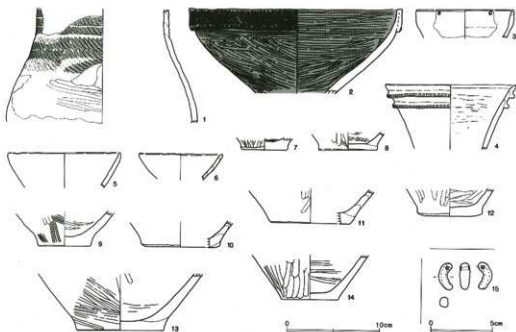
住の床面から検出され、岩盤を20cmほど掘り抜いていた。なおいずれの柱穴も断ち割りを実施したが柱痕はなかった。

P 5は北壁から0.8mの距離にあり深さは35cmである。細長い楕円形で住居跡内側に浅い段をもつ。P 6、7、8、9、11はいずれも深さ15cm以内の断面皿状の浅いものであった。

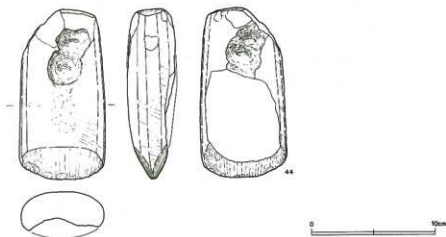
炭化物と焼土はおおむね床面全体に分布するが、特にF 2周辺が顕著であった。ただし1号住や22号住などと比較すると大型の炭化材は少なく、床面、壁面には被熱痕は認められなかった。また南西側から少量の白色粘土が検出された。

第15号住居跡出土遺物（第40、41図）

出土傾向としては特に貯蔵穴覆土中からの出土が顕著であるが、いずれも小片であり同一個体が住居跡内に散逸している。貯蔵穴および住居跡覆土下層より出土した1の変形土器は輪積痕を明瞭



第40图 第15号住居跡出土遺物 (1)



第41図 第15号住居跡出土遺物 (2)

に残す。胴部外面はハケメ調整後、ヘラミガキが施される。2は南西コーナー部覆土下層より出土した高杯形土器である。脚部を欠損する。折り返し口縁をもち、杯部から口縁部にかけて緩やかに直立する。口縁端部は平坦面が作出される。単節RL縄文を施文し、下端にはハケメ状工具により刻みを施す。胴部、内面は丁寧にヘラミガキされ内外面とも赤彩される。3は焼成後の穿孔のある鉢形土器である。補修孔であろうか。4の壺形土器は覆土下層から出土した。輪積痕利用の2段の突帯は、つまみだしにより大きく張り出す。15の勾玉は貯蔵穴覆土から出土した。16は壺形土器の口縁部である。輪積痕を残し、単節RL縄文を施文する。口唇部には貼り付け文をもつ。

44は太型蛤刃石斧である。前述した白色粘土に近接して床面よりわずかに浮いた状態で出土した。刃部には使用痕が認められるが、再研磨されている。また両面および基端部に敲打痕がありおそらく敲き石に転用されたものと思われる。

第15号住居跡出土土器観察表(1)

番号	器種	口 径	器高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存	出土位置・その他
1	甕	—	(12.3)	—	w(細)	C	鈍褐	30	輪積痕顕著 単節RL 覆土-P1中
2	高 杯	23.0	(9.0)	—	b'(細)	B	鈍黄橙	25	赤彩 口縁単節RL 覆土下層
3	鉢	10.4	(3.0)	—	g'(細)	B	淡黄	10	焼成後外面より穿孔 P1中
4	壺	14.0	(6.9)	—	w(細)	B	橙	25	突帯に刻み 内外面摩耗 覆土上層
5	鉢	12.0	(3.8)	—	g'(粗)	C	淡黄	20	内外面摩耗 覆土
6	鉢	9.0	(2.8)	—	w(細)	C	淡黄	20	内外面摩耗 P1中
7	-底部	—	(1.3)	4.8	b'w(厚)面	A	赤橙	100	覆土下層
8	-底部	—	(1.9)	6.2	w(細)	A	赤橙	20	P1中
9	-底部	—	(3.7)	5.4	w g(細)	B	鈍橙	100	覆土下層
10	-底部	—	(2.8)	7.7	w・g'(細)	B	鈍橙	20	P3中
11	-底部	—	(3.8)	8.4	w(細)	B	橙	25	覆土
12	-底部	—	(3.0)	7.0	g'(粗)	C	鈍黄橙	50	覆土

第15号住居跡出土土器観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
13	一底部	—	(6.1)	9.3	g'(粗)	B	鈍橙	100	覆土～P1中
14	一底部	—	(4.8)	6.2	w(細)	B	橙	100	覆土下層
15	勾玉				w(細)	B	灰白	100	2.1×0.8×0.8 1.56g P1中
16	壺				w(細)		橙		単節RL 口特貼付文 P1中
17	甕				g(粗)		黒褐		単節RL 覆土～P1中
18	甕				b'(細)		灰白		単節RL 覆土
19	甕				b'(細)		鈍黄橙		単節RL 覆土下層
20	甕				g(細)		黒褐		単節RL 覆土
21	甕				w g(粗)		褐灰		単節LR 覆土
22	甕				b'(細)		橙		単節LR 覆土
23	高杯				w(細)		橙		薄い突帯に刻み 覆土下層
24	壺				g'(細)		浅黄橙		単節RL 覆土
25	甕				sb'(細)		褐		単節RL 覆土
26	高杯				w(細)		鈍橙		赤彩 突帯に刻み 覆土
27	甕				g'(細)		灰黄褐		単節RL 覆土
28	高杯				g w(細)		橙		単節RL 覆土
29	壺				w(細)		橙		突帯に刻み P3中
30	壺				w(細)		橙		単節RL 覆土
31	壺				g(細)		浅黄橙		単節LR 覆土下層
32	甕				g'(細)		灰黄褐		単節RL 覆土
33	甕				sb'(細)		鈍褐		単節RL 覆土
34	甕				w(細)		鈍赤褐		単節LR 覆土
35	甕				g'(細)		黒褐		単節RL P1中
36	甕				g(細)		灰白		単節RL P1中
37	甕				wb'(細)		浅黄橙		単節RL 内面ハケメ 覆土下層
38	甕				b'(細)		暗赤褐		単節RL P5中
39	壺				sg'(細)		橙		単節RL P1中
40	甕				b'(細)		橙		単節RL 覆土
41	甕				wb'(細)		鈍黄橙		単節RL 覆土
42	甕				b'(細)		橙		単節RL 覆土
43	甕				wb'(細)		灰白		単節RL 覆土

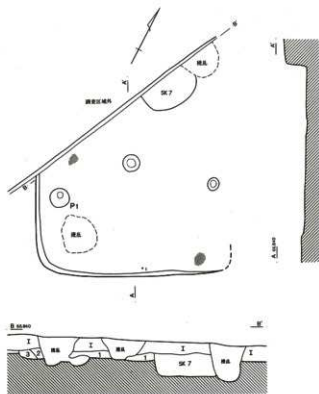
第15号住居跡出土土器観察表

番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考
44	覆土下層	石斧	13.6	6.9	3.7	585.1	安山岩	太片蛤刃石斧 敲打痕あり

第16号住居跡(第42図)

第16号住居跡はG-14グリッドに位置する。確認面標高は66.3～66.5mとほぼ平坦面で周囲には住居跡が密集する。隣接する遺構は0.6m南に13号住、0.8m東に15号住、さらには3.5m北に14号住が存在する。これらの住居跡との重複関係は調査区際土層断面でも不明であった。また7号土壌に調査区際床面を壊されていた。

確認段階で覆土、焼土および土器片が露出していたため住居跡と認定したが、耕作擾乱が強烈であり遺存状況は極めて悪い。南、西壁面はわずかに残存していたが、住居跡の形態、規模は不明と

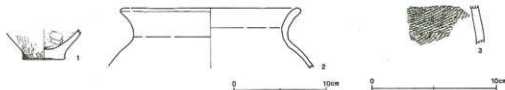


第16号住居跡 土層証

- 1層 耕作土
- 1層 暗褐色土 炭化物粒子、焼土粒子微量含む
- 2層 黄褐色土 ローム粒子多量含む
- 3層 暗褐色土 ロームブロック (ε2~5cm) 少量含む

0 2m

第42図 第16号住居跡



第43図 第16号住居跡出土遺物

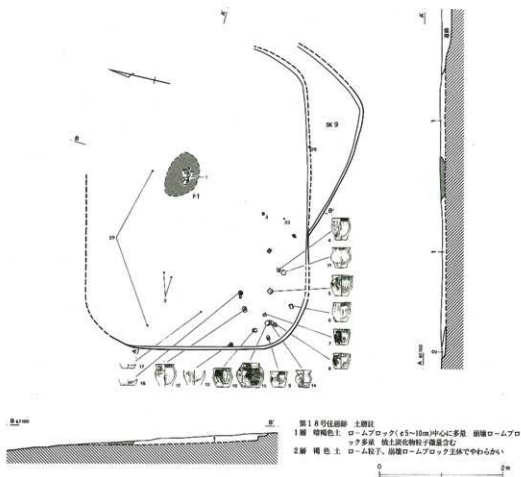
第16号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	一底部	—	(3.2)	4.6	b(黒)w(黒)	A	橙	30	内面木口ナデ 覆土
2	甕	18.8	(6.5)	—	s	B	灰白	25	内外面摩耗 攪乱土中
3	甕	—	—	—	w(細)	—	鈍黄橙	—	単節LR P1中

言わざるを得ない。地山ロームの床面がわずかに部分的に残存していた。焼土は2か所で検出された。いずれも厚さ4cmほど軟質の焼土が堆積していたが攪乱の影響から炉とは認定できない。ピットは計3基あった。P1は30cmとやや深い、それ以外は約5cmと浅い掘り込みであった。

第16号住居跡出土遺物(第43図)

少量の吉ヶ谷期の遺物が確認面から露出していたが、図化できたものはわずかである。なお2の甕形土器は南西にある攪乱土中からの出土である。



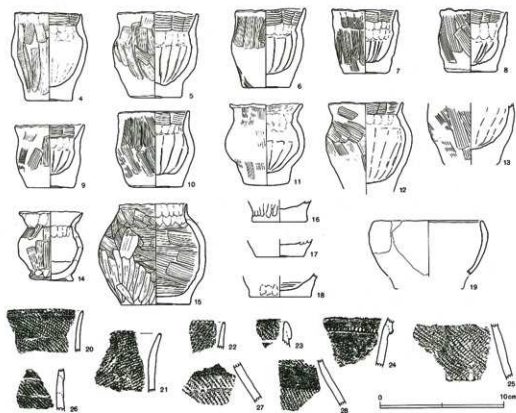
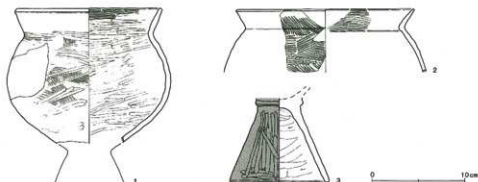
第44図 第18号住居跡

第18号住居跡（第44図）

第18号住居跡はG-14、15、H-14、15グリッドにまたがって所在する。確認面標高は66.7~67.0 mで、現地形から見ると、4号住とともに第1住居跡群中、もっとも平坦な部分に立地する。周辺の遺構との関係は、北に位置する第15号住居跡とは1 mと近接するものの東、西、南方向は4 m前後の遺構空白域が存在する。特に南側は住居跡群外に開口するような遺構配置を示す。

耕作による強烈な攪乱を受け、さらには住居跡北側が流出していた。正確な住居跡の規模、主軸方位は不明であるが、遺存していた部分およびF1の配置から推定すると、5.0 m×3.6 mほどの規模の隅円長方形が想定される。東西軸方位はN-78°-E程となる。なお南東側に18号住の南壁面を壊す第9号土壌が検出された。一見住居跡状だが覆土はほとんど攪乱土で、底面も床面の様相を呈しておらず、遺物は1点も出土しなかった。

攪乱の影響で覆土の堆積状況などは不明である。南西壁際付近以外はすべて攪乱土であった。



第45図 第18号住居跡出土遺物

床面はほとんど遺存していなかった。わずかにミニチュア土器が出土した南西コーナー部に地山ロームの堅緻面が部分的に遺存していたにすぎない。炉と推定される焼土の集中か所はほぼ中央にある。攪乱により確認面まで露出しており、焼土ブロック、粒子が攪乱土と混じりながら15cmほどの厚みで検出された。なお焼土と混じり合うように台付甕が出土した。柱穴、貯蔵穴などは軌跡に精査、断ち割りなどをして認められなかった。ただし攪乱は床下30cm以上に及んでおり、浅いビ

ットは壊された可能性が高い。

第18号住居跡出土遺物（第45図）

以上のように遺構の遺存は極めて悪いにもかかわらず、南西コーナーを中心に12個体のミニチュア土器、およびミニチュア土器の底部が3点出土した。周囲には少量の炭化材片、焼土が散在する。なお出土層位は、完形のもののはほぼ床面直上と思われるが、16の底部は床面下32cmの攪乱土中より出土した。ミニチュア土器はその器形から3器種に分類できる。4～10、12、13は鉢形、11、14は壺形、15は広口壺形である。鉢形は外面を縦位のハケメ調整、内面は胴部に木口ナデを残し、口縁との接合部は指頭押圧、口縁部は横位ハケメ調整を施し接合部に稜をもたせる。壺形は口縁部内面にハケメ調整の後、ナデが加わる。15の広口壺形はやや他の器種と調整技法が異なり、外面はハケメ調整後、雑なヘラナデが加わる。胴部内面はハケメ調整で、口縁部は胴部との接合時の指頭押圧およびナデが残る。ハケメ工具はいずれも幅1.9cm、9条の同一のものを使用している。なお鉢形の口縁部内面の横位ハケメはいずれも深く、端整である。調整技法とともに文様効果としても捉えられる可能性がある。

1は住居跡ほぼ中央で焼土とともに出土した台付甕である。台部は欠損する。口縁端部は部分的にわずかに肥厚する。外面はハケメを施した後、やや雑に横位のヘラミガキが施される。内面は口縁部のみハケメが残る以外、胴部は丁寧にヘラミガキされ光沢をもつ。なお胴部下半に煤が多く認められる。2も台付甕の口縁部である。内外面ともハケメ調整される。3は高杯形土器の脚部である。杯部は欠損するが接合部に突帯を有する。19は攪乱土から出土した鉢形土器のミニチュアである。一括出土のものと比較すると器形、胎土が明確に異なる。20～28の土器小片はいずれもミニチュア土器の分布範囲から離れて出土した。

第18号住居跡出土土器観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	15.4	(14.5)	—	b' (細)	A	黒褐	50	外面ハケメ→雑なミガキ F1中
2	甕	18.8	(6.7)	—	b'	B	橙	10	内外面ハケメ 攪乱中
3	高杯	—	(9.0)	10.6	市(黒)・g(黒)	B	橙	50	赤彩 接合部に突帯 床直?
4	ミニ鉢	5.3	7.0	3.6	w(黒)・g(黒)	C	鈍褐	100	外面ハケメ 床直
5	ミニ鉢	6.4	6.8	3.8	w(黒)・g(黒)	C	橙	100	胴部内面木口ナデ 床直
6	ミニ鉢	5.5	6.3	3.6	w(黒)・g(黒)	C	鈍橙	100	口縁部内面ハケメ 床直
7	ミニ鉢	5.2	5.1	3.5	w(黒)・g(黒)	C	橙	100	床直
8	ミニ鉢	5.3	5.0	3.8	w(黒)・g(黒)	C	橙	100	床直
9	ミニ鉢	5.5	5.0	3.8	w(黒)・g(黒)	B	橙	100	床直
10	ミニ鉢	5.7	6.1	4.2	w(黒)・g(黒)	B	鈍橙	100	床直
11	ミニ壺	5.7	6.5	3.5	w(黒)・g(黒)	B	橙	100	床直
12	ミニ鉢	6.0	(7.1)	3.8	w(黒)・g(黒)	C	鈍橙	100	底部周縁粘土ヒモ巻付け 床直
13	ミニ鉢	—	(5.0)	4.0	w(黒)・g(黒)	C	褐	40	床直
14	ミニ壺	5.1	5.5	3.5	w(黒)・g(黒)	C	橙	100	胴部内面末調整 床直
15	ミニ壺	5.5	8.1	5.5	w(黒)・g(黒)	B	橙	100	外面雑なヘラナデ 胴部内面ハケメ 床直
16	一底部	—	(1.7)	4.2	w(黒)・g(黒)	A	鈍橙	100	ミニチュア 攪乱中
17	一底部	—	(1.4)	3.8	g(黒)・w(黒)	C	鈍橙	80	ミニチュア 床直
18	一底部	—	(1.9)	4.8	w(細)	B	橙	100	ミニチュア 床直
19	ミニ鉢	8.8	4.4	—	g(細)	B	鈍黄橙	30	被熱顕著 攪乱中

第18号住居跡出土土器観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
20	甕				w(細)		灰褐		単節RL 攪乱中
21	甕				g'(細)		橙		単節LR 攪乱中
22	甕				w(細)		橙		単節LR 攪乱中
23	鉢				g(細)		橙		単節RL 攪乱中
24	壺				g'(細)		灰白		突帯に刻み 攪乱中
25	甕				g(粗)		黒褐		単節RL 攪乱中
26	甕				w(細)		鈍橙		単節RL 攪乱中
27	壺				g'(細)		赤		単節RL 攪乱中
28	壺				g(細)		褐		単節RL 攪乱中

第19号住居跡(第46～48図)

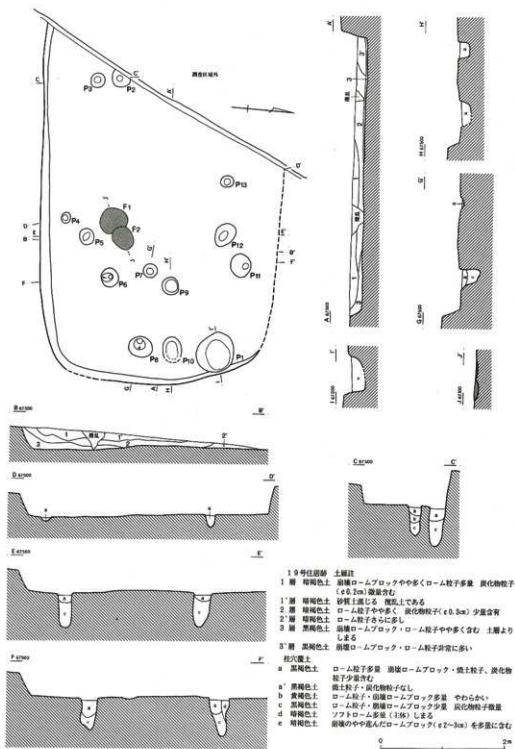
第19号住居跡はH-13、14グリッドに所在する。確認面標高は66.9～67.3mではほぼ平坦である。住居跡西側は調査区外、北側は流出していた。柱穴の配列から推定すると規模はおおよそ6.0m×3.9m程であり、他の住居跡と比較すると長短軸長の差がやや大きい。僅かに東壁が外湾するが、隅円長方形の範疇に入るであろう。主軸方位はおおよそN-94°-Wである。確認段階では耕作による攪乱が東西に走っていたが、覆土は比較的良好で斜面上方からの自然埋没であった。

床面は主軸より北側ではほぼ水平だが、南側は壁に向い緩やかに傾斜していた。堅緻面はほぼ全面にわたり、壁直下まで及んでいた。床面は地山ロームであった。炉は中央やや南よりの床面傾斜起点付近から検出した。重複しておりF2が新しく被熱硬化もより顕著であった。深さはF1が6cm、F2が3cmである。北東コーナーよりに位置するP1は貯蔵穴と思われる。木根状の攪乱のため底面はほとんど壊されていた。明確な周堤帯は検出できなかったが、貯蔵穴周辺がごくわずかに高まっており、付近の床面も摩立って硬化していた。主柱穴と思われるのものは計6基あった。深さは、P2=64cm、P3=50cm、P5=56cm、P6=52cm、P11=62cm、P12=56cmである。ただP3、5、12の覆土上層が際立って硬化していたことから本住居は改築したと思われる(第47図)。なお他のピットの新旧関係は、P9が上層土の硬化から改築前と想定されるが、それ以外は不明である。なお床面は断ち割りを行ったが、貼り替えなどの痕跡は検出されなかった。

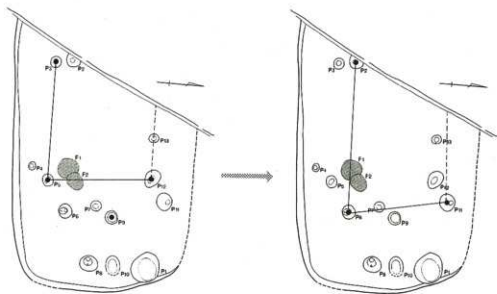
第19号住居跡出土遺物(第49、50図)

遺物は比較的多く出土した。1の甕形土器は口縁部が大きく外反するが、上位で小さく直立する。2は内面にハケメ調整を残す。6は無頸壺形土器である。胴部以下を欠損する。口縁部は折り返し状で上位でやや強く外反する。器面が粗れやや不鮮明だが単節RL縄文を口縁部に施文する。赤彩残る。7の高杯形土器は2段の突帯を有し、刻みが施される。口縁は内湾しない。21はミニチュア土器である。指頭により丁寧に成形され、器壁は1.5mmと薄い。22の不明土製品は一見鉢形土器のようだが底面は座らず、内面の凹部も浅い。また胴部?は不整六角形を呈する。23～26は土製勾玉である。いずれも南壁付近の覆土上層より出土した。胎土、焼成は酷似する。

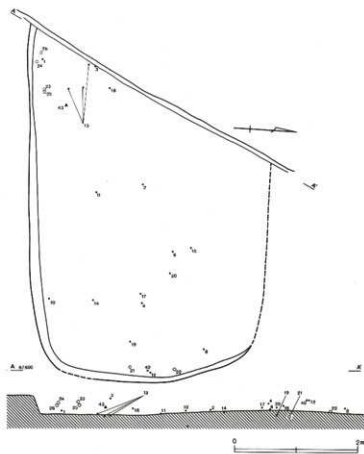
38はP9覆土中より出土した壺形土器の口縁部である。折り返し状口縁を有し、口縁部から頸部にかけて単節縄文RLが施される。39の壺形土器の口縁部は、僅かに輪積痕を残すが単純口縁と思われる。43は柱状の礫を利用した敲き石である。先端部に敲打痕が認められる。



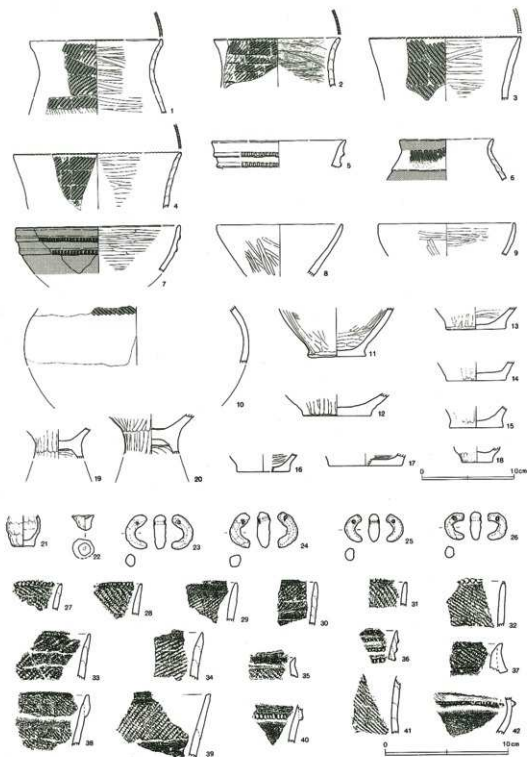
第46図 第19号住居跡



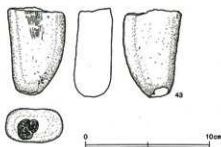
第47図 改築による主柱穴の移動



第48図 第19号住居跡遺物出土状況



第49图 第19号住居跡出土遺物 (I)



第50図 第19号住居跡出土遺物 (2)

第19号住居跡出土土器観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	
1	甕	14.2	(7.9)	—	w(粗)	B	黒褐	10	単節LR	覆土下層
2	甕	13.6	(5.2)	—	w・b'(細)	C	鈍褐	20	単節LR 内面ハケメ	覆土下層
3	甕	16.0	(6.5)	—	h-w(面)	A	暗褐	10	単節RL	覆土上層
4	甕	18.0	(5.0)	—	w(細)	B	灰褐	10	単節LR	覆土上層
5	壺	14.4	(3.0)	—	w'(細)	B	褐	10	突帯に刻み	覆土
6	壺	10.0	(4.5)	—	g'(細)	B	橙	10	赤彩 単節RL	覆土下層
7	高杯	15.2	(4.9)	—	w(細)	B	鈍橙	15	赤彩 突帯に刻み	覆土
8	鉢	13.6	(5.6)	—	g'(粗)	B	橙	20	内外面摩耗	覆土下層
9	鉢	14.6	(3.5)	—	h-w(面)	B	浅黄	25	内外面摩耗	P12中
10	壺	—	(6.5)	—	w・b'(細)	B	赤褐	25	内外面摩耗 単節RL	覆土下層
11	一底部	—	(5.2)	6.0	w(細)	B	鈍黄橙	100		床直
12	一底部	—	(2.4)	7.2	w(細)	B	橙	100		覆土上層
13	一底部	—	(2.4)	6.2	h(面)・b(底)	A	褐	100		覆土上層
14	一底部	—	(2.0)	6.2	w(細)	C	鈍褐	100		床直
15	一底部	—	(2.3)	5.8	w(細)	C	褐	25		覆土下層
16	一底部	—	(1.9)	5.6	g'(粗)	C	鈍橙	25		覆土
17	一底部	—	(1.4)	7.8	w(細)	C	橙	50		覆土下層
18	一底部	—	(1.7)	3.2	w面・w底・w側	B	鈍橙	80	ミニチュア	覆土上層
19	高杯	—	(3.3)	—	b(細)	C	鈍黄橙	100		床直
20	高杯	—	(4.3)	—	w・b(細)	C	浅黄橙	30		覆土下層
21	ミニチュア	1.7	(2.5)	1.6	b'(細)	B	浅黄橙	40	口縁部欠損 指頭成形	覆土下層
22	土製品	1.7	1.2	1.0	b'(細)	C	浅黄橙	100	指頭成形	床直
23	土製勾玉	—	—	—	w(細)	B	鈍黄橙	100	2.7×1.0×0.8 3.38g	覆土上層
24	土製勾玉	—	—	—	w(細)	B	鈍黄橙	100	2.8×1.0×0.9 4.03g	覆土上層
25	土製勾玉	—	—	—	w(細)	B	鈍褐	100	2.7×1.0×0.8 2.07g	覆土上層
26	土製勾玉	—	—	—	w(細)	B	鈍黄橙	100	2.1×0.9×0.8 2.28g	覆土上層
27	甕	—	—	—	b'(細)	B	褐灰	—	単節RL	覆土
28	甕	—	—	—	w'(細)	B	褐	—	単節RL 内面ハケメ	覆土
29	甕	—	—	—	b'(細)	B	黒褐	—	単節LR	覆土
30	甕	—	—	—	w(細)	B	鈍褐	—	単節LR	P1中
31	甕	—	—	—	b'(細)	B	褐	—	単節RL	覆土
32	甕	—	—	—	s w(細)	B	鈍橙	—	単節RL 内面ハケメ	覆土
33	甕	—	—	—	w(細)	B	橙	—	単節LR	覆土
34	甕	—	—	—	g(細)	B	灰褐	—	単節LR	覆土
35	甕	—	—	—	s g(細)	B	橙	—	単節LR	覆土
36	壺	—	—	—	g(細)	B	鈍橙	—	突帯に刻み	覆土

第19号住居跡出土土器観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
37	壺?				g(粗)		橙		単節RL 覆土
38	壺				g'(細)		鈍褐		単節RL P9中
39	壺				b'(細)		灰白		単節LR(太細燃合せ) P11中
40	壺				w(細)		橙		突帯に刻み 覆土上層
41	甕				w(細)		橙		単節RL 覆土
42	高杯				w(細)		橙		突帯に刻み 覆土

第19号住居跡出土石器観察表

番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考
43	覆土上層	敲き石	7.1	4.6	2.7	144.3	砂岩	

第20、22、26号住居跡

第20号住居跡はH-13、14、I-13、14グリッドにまたがって所在する。確認面標高67.4~68.0mで、第1住居跡群が立地する緩斜面と、北東にはる丘陵尾根線との境界に位置し、東側に遺構の空白域が存在する。

確認面からすでに多量の土器片が出土しており、プランが大型な不定型だったため、精査に努めた。新旧関係は、26号住→20号住→22号住→1号井戸、第8号土壌および風倒木の順と判明した。なお20号住と1号井戸は調査区外に広がるため完掘できなかった。

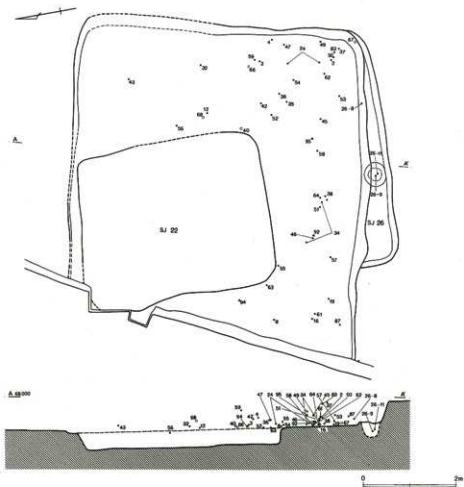
第26号住居跡(第51、52図)

3軒中もっとも古い26号住は、そのほとんどを20号住に壊され、残存していたのはわずかに南壁面と南西コーナー部のみであった。住居跡の規模は東西軸長がおよそ5.2m程と思われる。また南北軸長も20号住北側まで遺構は存在しないことから6.2m以内と推測される。P1の配置から南北を主軸と想定するとN-0°~E前後の方向を示すことになる。覆土は基本的に20号住のものと類似ししまりが強かったが、自然埋没か人為的な埋め戻しかは判然としなかった。プランで20号住居跡に切られるのが観察できた。

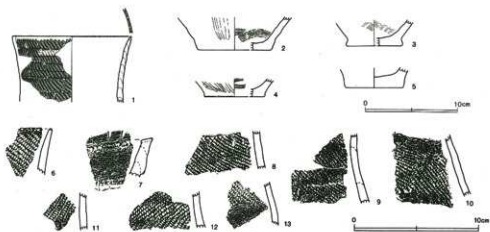
床面は20号住の床面よりおよそ7cm高い。土質は地山灰褐色土である。壁際のためか20号住床面よりやや軟質であった。ピットは南壁際やや西よりに1基検出した。貯蔵穴と思われる。深さは38cmである。少量の土器片が出土した。それ以外の関連施設は、20号住床面の断ち切りを実施しても確認されなかったことから、20、22号住に壊されたと思われる。

第26号住居跡出土遺物(第53図)

出土遺物はごくわずかである。貯蔵穴覆土中からも少量出土したが、いずれも小片であり、埋没時の混入の可能性が高い。7は壺形土器の口縁部である。端部は粘土ヒモ貼り付けにより成型し、突帯とともに刻みが施される。11の甕形土器の頸部小片の縄文原体は付加条風太細燃り合わせLRと思われる。



第52図 第20、26号住居跡遺物出土状況



第53図 第26号住居跡出土遺物

第26号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	12.8	(7.0)	—	g(粗)	C	鈍黄橙	20	単節RL 内面摩耗 煤付着 覆土
2	—底部	—	(3.5)	7.6	g'g(細)	C	灰白	25	内外面摩耗 覆土
3	—底部	—	(2.7)	5.8	g'(粗-中)	C	鈍黄橙	45	内外面摩耗 覆土
4	—底部	—	(1.9)	6.3	w(細)	A	褐灰	20	覆土
5	—底部	—	(2.2)	6.0	g(粗)	B	橙	25	覆土
6	甕				gw'(細)		橙		単節RL 覆土
7	壺				g'(細)		浅黄橙		口唇、突帯に刻み 覆土
8	甕				w(細)		暗赤褐		単節RL 覆土下層
9	甕				w(細)		灰褐		単節RL P1中
10	甕				b'(細)		鈍橙		単節RL 覆土
11	甕				b g(細)		灰褐		単節LR(太細摺合せ) 覆土
12	甕				w(細)		褐灰		単節LR 覆土
13	甕				w(細)		鈍黄橙		単節RL P1中

第20号住居跡（第51、52図）

20号住居跡は、西側が調査区外に広がるため、東西軸長に関してはP1とP3の主柱穴の配列からの推定だが8m×6.2m程の大型の隅円長方形と思われる。同じく長軸長が8mを越える15号住と比較すると、長短軸長の差がやや小さいといえる。F6の位置から東西軸を主軸とすると、主軸方位はおおよそN-100°-Eである。

覆土の堆積状況は一見自然埋没の様相を呈するが、他の住居跡覆土と比較して際立って硬化していたことと崩壊ロームブロックを上下層にくまなく多量に含有していたことから人為的な埋め戻しの可能性が高い。

22号住と風倒木痕のため良好な床面を検出できたのは、主軸より南側のみである。床面土質は調査区際は地山ロームで、南壁周辺は地山灰褐色土であり全体に非常に堅緻であった。また22号住と風倒木痕の間は、風倒木痕の影響のため軟質であった。炉は計5基検出した。F1～4は被熱硬化は著しいものの、いずれも深さ5cm内外とやや浅い断面皿状の焼土堆積であった。なおF1、2は22号住に部分的に壊されていた。F6は風倒木の影響のため焼土がやや拡散し、原位置は保っていないと思われるが、残存する焼土ブロックは厚さ8cmあり量も多い。またほぼ住居跡主軸に載っている。貯蔵穴はなかった。F6の配置から西側調査区外の可能性が高い。主柱穴と想定されるのは、P1、3である。深さは65cm、63cmと深く直径も32cmある。またP1底面から厚さ11.5cmの厚みをもつ扁平な礫が出土した。P3は径18cmの柱痕が検出され、その中より高杯接合部が出土した。この2本に対応する主柱穴は、調査区外、および風倒木痕に壊された可能性が高い。ただし風倒木痕を精査してP6が検出された。床面下71cmの深さである。深さとしてはP1、3と十分対応するものの、配列がかなりずれるために主柱穴かどうかは不明である。

それ以外に4基のピットがあった。深さは、P2=56cm、P4=52cm、P5=22cm、P7=28cmである。それぞれの覆土に際立った差異はなく、上層土も硬化していなかったためすべて20号住に伴うと考えた。

第20号住居跡出土遺物（第54～57図）

覆土中より多量の遺物が出土した。土器の総重量は50kgを越える。なお当初は22号住のプランが不確定だったため、プランを把握できるまでグリット調査を行った。最終的には重複部分の上層出土遺物は22号住出土遺物とし、重複範囲外の遺物を本住居跡出土遺物として取り扱った。また範囲内外で接合したものは22号住出土遺物とした。

出土傾向は南東コーナー部から流れ込んだ様相を呈する。したがって南東コーナー部は上層出土が目立つものの、それ以外は下層出土の傾向が強かった。ただし床面密着と断定できる遺物はなかった。斜面上方に21、24号住が存在するものの、その際立った出土量から自然流入は考えずらく、埋め戻し時の廃棄の可能性がある。なお執拗に接合を試みたが、良好な成果は上げられず、器形が完全に復元できたものはほとんどなかった。

1～13の甕形土器はいずれも内面調整はヘラミガキである。また図化できなかった胴部も詳細に観察したが、外面にハケメ整形が残るものは皆無であった。なお13以外、口唇部に縄文原体押圧による刻みが施される。

14～17、73、74、76、77、79は壺形土器の口縁部と思われる。14～17は数段の突帯を有し、ハケメ状工具により刻みを施される。いずれも口唇部刻みはない。なお端部は平坦面、内ソギ状、丸くおさまるものなど様ではない。73、74は単節RLを施文される。いずれも端部は平坦である。

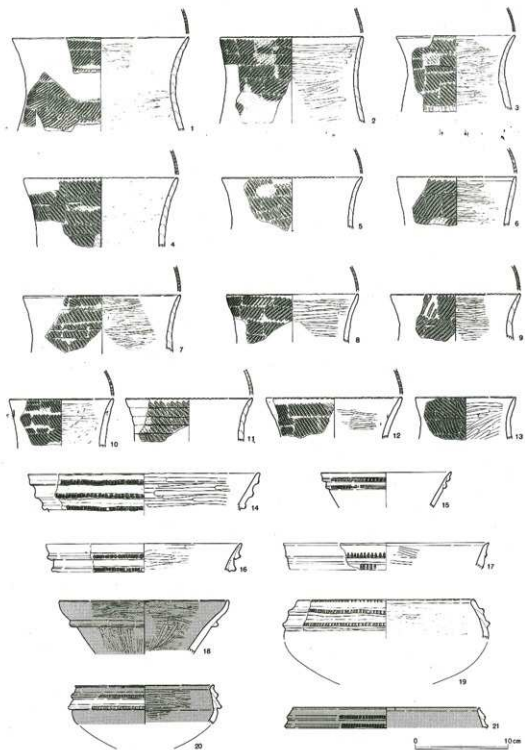
18～34、75、78、80～82は高杯形土器、あるいは鉢形土器である。18の杯部はわずかに外反しつつ口縁部で短く直立する。また貼り付けによる突帯を1段有する。口縁端部は平坦である。杯部下半以下の器形は不明であり壺形土器の口縁部の可能性もあろう。24は輪痕痕をつまみ出した突帯を有し、口縁部に貼り付け文をもつ。19～22は数段の突帯を有し刻みが施される。器形はいずれも杯部が内湾する。また口唇部は19が内ソギ状以外は小さく外反する。23、25、26は折り返し状口縁を有する。28～33は単純口縁部をもつ。27、30は口縁部上半が小さく屈曲する。75、78は折り返し状口縁部に縄文が施文される。80の口唇部には貼り付け文がつく。34の鉢形土器は住居跡南側覆土下層より出土した。胴部から口縁部にかけてゆるやかに外反する。外面は器面が摩耗し不明だが、内面に赤彩痕残る。35～44は高杯形土器の接合部および脚部である。接合部は40のミニチュア以外はいずれも突帯を有する。脚部については概して直線的に開くが、39、42、43のように端部が小さく直立するものもある。

66はミニチュア土器である。指頭押圧痕が明瞭に残る。88～91はいずれも覆土上層から出土した櫛描文土器である。88は口縁部に波状文、頸部に康状文をもつ。原体の単位は不明である（7本歯以上、康状文3連止め以上）。いずれも内面調整はヘラミガキである。なお91は胎土分析を実施した。

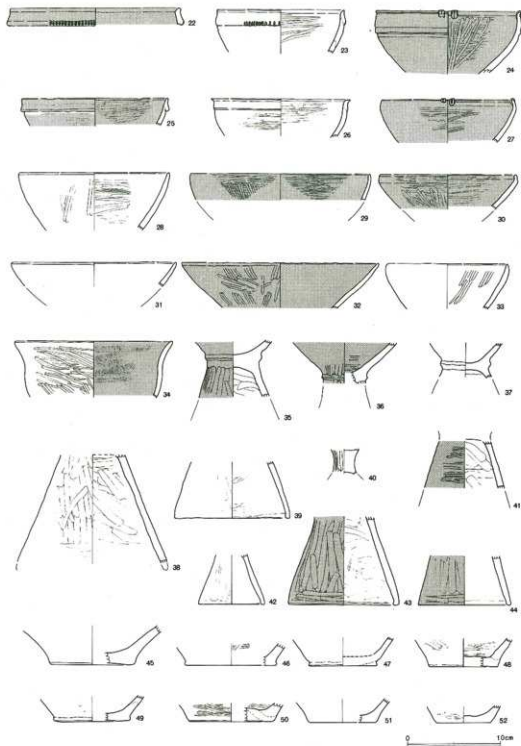
67の勾玉は覆土下層、68は攪乱中より出土したが、胎土、焼成度合とも近似する。

92、94、95はいずれも覆土中から出土した。92は3号住39と同様に赤褐色の付着物が両面に認められる石器である。94は片面に使用痕が残り、小型の砥石と考えられる。95は礫の端部を利用した敲き石である。

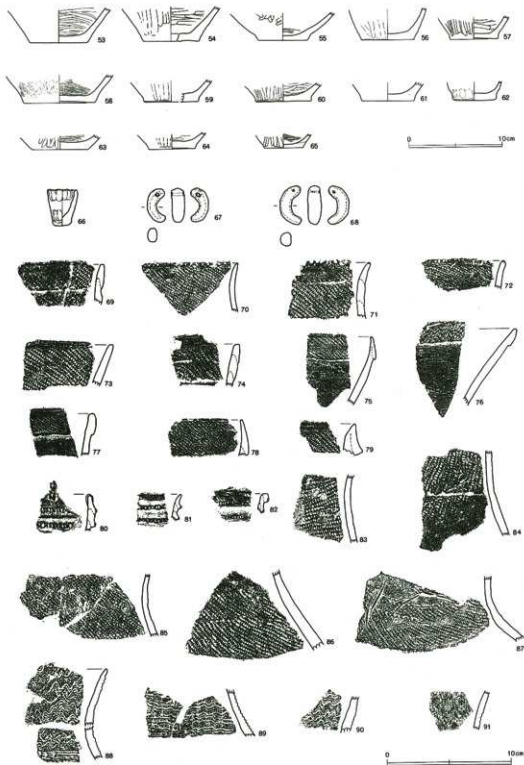
なお覆土中から諸磯式期を主体として縄文式土器も13点出土した（第89図）。



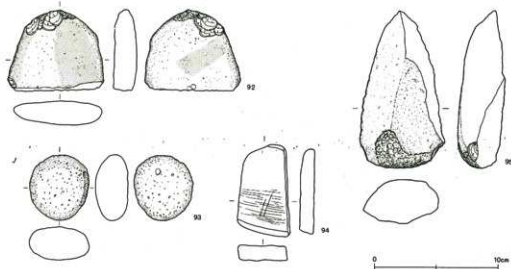
第54図 第20号住居跡出土遺物 (1)



第55図 第20号住居跡出土遺物 (2)



第56图 第20号住居跡出土遺物 (3)



第57図 第20号住居跡出土遺物 (4)

第20号住居跡出土土器観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	18.8	(10.0)	—	w(細)	B	鈍黄橙	20	半筋LR 覆土
2	甕	15.2	(9.2)	—	g(粗)	C	灰白	25	半筋LR 覆土上層
3	甕	12.8	(8.0)	—	s-w(細)	A	鈍褐	15	半筋RL 覆土下層
4	甕	16.0	(7.5)	—	w(細)	A	橙	20	半筋RL 覆土上層
5	甕	15.0	(5.5)	—	w-g(細)	C	鈍黄橙	10	半筋RL 内面摩耗 覆土
6	甕	12.8	(5.2)	—	w(細)	B	橙	15	半筋LR 覆土
7	甕	16.8	(6.1)	—	w(細)	B	浅黄橙	10	半筋RL 覆土
8	甕	14.2	(5.2)	—	w-b'(細)	A	暗褐	25	半筋LR 覆土下層
9	甕	13.8	(5.0)	—	b'(細)	A	鈍褐	10	半筋LR 覆土
10	甕	11.0	(5.2)	—	w(細)	A	明赤褐	15	半筋RL 覆土
11	甕	14.6	(4.4)	—	針・b'(細)	A	褐	20	半筋RL 内面摩耗 覆土
12	甕	13.6	(4.6)	—	w(粗)	B	鈍褐	20	半筋RL 攪乱中
13	甕	10.1	(4.5)	—	u(細)	A	明赤褐	20	半筋RL 口唇刻みなし P1中
14	甕	24.8	(4.5)	—	b'(細)	A	鈍黄橙	15	ハケノ状工具による刻み 覆土
15	壺	14.0	(3.8)	—	s-w(細)	B	鈍橙	20	ハケノ状工具による刻み 覆土
16	壺	21.0	(3.0)	—	w(細)	B	鈍橙	10	ハケノ状工具による刻み 覆土下層
17	壺	22.0	(2.8)	—	w(細)	A	褐灰	5	ハケノ状工具による刻み 覆土
18	高杯?	18.2	(5.7)	—	b(細)	B	赤	15	赤彩 粘土ヒモ貼付けの突帯 覆土
19	高杯	12.6	(4.4)	—	w(粗)	A	赤褐	20	内外面摩耗 突帯、口唇に刻み 覆土下層
20	高杯	13.8	(4.0)	—	w(細)	B	橙	15	赤彩 突帯、口唇に刻み 覆土
21	高杯	20.0	(2.3)	—	s-w(細)	C	鈍黄橙	10	赤彩 突帯に刻み 覆土
22	高杯	18.0	(1.9)	—	w'(細)	B	鈍橙	10	赤彩 突帯に刻み 覆土
23	高杯	13.6	(4.6)	—	w(細)	B	鈍黄橙	15	ハケノ状工具による刻み 覆土
24	高杯	15.6	(6.7)	—	w(細)	B	浅黄橙	50	赤彩 口唇貼付文 覆土
25	高杯	15.6	(3.0)	—	w(細)	B	鈍橙	15	赤彩 胴部ヘラミガキ 口縁ナデ 覆土

第20号住居跡出土土器観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
26	高杯	14.9	(4.1)	—	w(細)	B	橙	15	内外面摩耗 覆土
27	高杯	14.2	(4.7)	—	g(粗)	C	灰白	15	赤彩 口唇貼付文 覆土
28	鉢	16.0	(6.2)	—	w(細)	A	橙	5	内外面摩耗 覆土
29	高杯	19.2	(2.8)	—	g'(細)	B	黄褐	15	赤彩 器壁薄い 覆土
30	高杯	14.6	(3.7)	—	w(細)	B	橙	20	赤彩 覆土
31	鉢?	17.6	(2.6)	—	w(細)	B	橙	20	覆土
32	高杯?	21.2	(4.8)	—	w(細)	B	浅黄橙	15	赤彩 攪乱中
33	鉢	12.6	(4.8)	—	wb'(細)	B	橙	10	覆土
34	鉢	16.8	(6.1)	—	w-g'(細)	B	鈍黄橙	20	赤彩(外面不明) 覆土下層
35	高杯	—	(6.0)	—	g(粗-中)	C	灰黄	100	赤彩 接合部に突帯 P3中
36	高杯	—	(4.3)	—	w-g(細)	B	鈍橙	20	赤彩 接合部に突帯 覆土下層
37	高杯	—	(3.6)	—	w(細)	B	橙	100	内外面摩耗 接合部に突帯 覆土上層
38	高杯	—	(11.5)	16.0	w(細)	C	鈍橙	15	覆土下層
39	高杯	—	(6.0)	12.4	w-g'(細)	B	橙	20	覆土
40	高杯	—	(2.8)	—	w-b'(細)	A	灰褐	100	ミニチュア高杯の接合部? 覆土下層
41	高杯	—	(5.0)	—	w(細)	B	橙	35	赤彩 外面横位ミガキ 覆土
42	高杯	—	(5.3)	7.0	w(細)	C	褐灰	15	覆土上層
43	高杯	—	(9.4)	11.6	b-w(細)	B	橙	20	赤彩 攪乱中
44	高杯	—	(5.3)	10.0	w(細)	B	橙	20	赤彩 覆土
45	一底部	—	(4.2)	8.8	g'(粗)	C	鈍黄橙	25	覆土上層
46	一底部	—	(2.3)	9.8	w(細)	C	灰黄褐	10	覆土下層
47	一底部	—	(3.0)	7.2	白胎粉物残多	B	橙	50	覆土上層
48	一底部	—	(3.0)	7.4	b-g(細)	A	鈍黄橙	25	覆土
49	一底部	—	(2.7)	8.2	w-g(細)	A	鈍黄橙	30	覆土上層
50	一底部	—	(2.0)	9.0	w-g(細)	A	鈍黄橙	20	覆土上層
51	一底部	—	(2.5)	7.2	w(細)	B	鈍橙	10	覆土下層
52	一底部	—	(1.8)	5.8	g'(細)	B	明黄褐	90	覆土下層
53	一底部	—	(3.7)	6.0	w(細)	A	赤褐	100	覆土上層
54	瓶	—	(3.7)	5.8	w-g(粗)	B	橙	100	孔径1.4cm 覆土下層
55	一底部	—	(2.9)	5.2	g'(細)	A	明赤褐	100	覆土下層
56	一底部	—	(3.3)	5.6	g'(細)	C	橙	50	攪乱中
57	一底部	—	(2.4)	5.0	w(細)	B	鈍黄橙	100	覆土下層
58	一底部	—	(3.0)	7.6	w-w(細)	A	鈍赤橙	40	覆土下層
59	一底部	—	(2.3)	5.8	w(細)	A	灰褐	30	覆土上層
60	一底部	—	(1.9)	5.9	w(細)	B	鈍橙	45	覆土
61	一底部	—	(2.0)	5.6	w(粗)	C	赤褐	90	覆土上層
62	一底部	—	(2.0)	4.6	w(細)-w(粗)	B	橙	20	ミニチュア 覆土下層
63	一底部	—	(1.5)	5.8	w(細)	A	鈍黄橙	90	覆土下層
64	一底部	—	(1.7)	5.0	w-g(細)	B	鈍橙	100	覆土下層
65	一底部	—	(1.5)	4.2	w(細)	B	鈍橙	80	覆土
66	ミニチュア	2.4	2.9	1.6	w(細)	B	鈍黄橙	80	指頭圧痕残る 覆土下層
67	土器片	—	—	—	w(細)	橙	—	100	2.7×1.1×0.8 3.86g 覆土下層
68	土器片	—	—	—	w(細)	橙	—	100	3.1×1.1×0.9 4.89g 攪乱中
69	甕	—	—	—	w(細)	橙	—	—	単筋RL 覆土
70	甕	—	—	—	g'(粗)	灰褐	—	—	単筋RL 覆土
71	甕	—	—	—	w(細)	赤褐	—	—	単筋RL 覆土
72	甕	—	—	—	w-g(細)	橙	—	—	単筋RL 覆土

第20号住居跡出土土器観察表(3)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
73	壺				g'v(細)		鈍褐		単筋RL 口唇平坦 覆土
74	壺				b'(細)		赤褐		赤彩 単筋RL 覆土
75	高杯				g'(細)		鈍黄橙		単筋RL 覆土
76	壺				g'(細)		鈍黄橙		単筋RL 覆土
77	壺				sg'(細)		灰白		単筋RL 覆土
78	高杯				b'(粗)		暗褐		単筋RL 覆土
79	壺?				sg'(細)		鈍黄橙		単筋RL 覆土
80	高杯				w(細)		赤橙		口唇に貼付文 覆土
81	高杯				w(細)		橙		器壁薄い 覆土
82	高杯				b'(細)		橙		突帯に刻み 覆土
83	甕				g(細)		鈍黄橙		単筋LR 覆土上層
84	甕				sg'(細)		鈍橙		単筋LR 覆土
85	甕				sg'(細)		暗褐		単筋RL 覆土
86	壺				w(細)		橙		赤彩 単筋RL 覆土
87	壺				w(細)		鈍橙		赤彩 単筋RL 覆土上層
88	樽形甕?				g-w(細)		褐		口縁波状文 頸部縞状文 覆土
89	樽形甕?				g-w(細)		鈍褐		樽形波状文 (8本/1.1cm) 覆土
90	樽形甕?				g-w(細)		鈍褐		樽形波状文 覆土
91	樽形甕?				g-w(細)		鈍褐		内外面摩耗 樽形波状文 覆土

第20号住居跡出土土器観察表

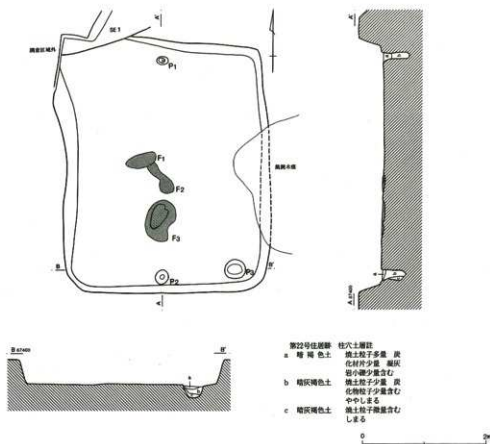
番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考
92	覆土下層	磨石	6.5	7.8	1.9	121.1	砂岩	赤褐色付着物
93	覆土上層	磨石	5.2	4.8	2.6	87.1	閃緑岩	
94	覆土下層	砥石	7.3	4.2	1.2	63.7	砂岩	
95	覆土上層	敲き石	12.6	6.9	3.5	335.4	砂岩	

第22号住居跡(第58、59図)

重複する3軒中で最も新しい第22号住居跡は、本遺跡の住居跡中最も遺存状況が良好で、残存壁高は約70cmである。西壁が内湾し、北壁も僅かにその傾向がある。また北西コーナー部は第1号井戸跡に壊されていたが、遺存するプランから見てやや突出する可能性がある。形態的にはやや長短軸長の差が小さい不整な隅円長方形といえる。4.05m×3.26mの規模で、主軸方位は26号住と同じくほぼN-0°-Eを示す。覆土は20号住と同様、崩壊ロームブロックを多量に含み硬化していた。確認面から他の住居跡に見られない多量の遺物が出土したことから、本住居跡も20号住同様、人為的に埋め戻された可能性がある。

床面の土質は北壁際付近のみ地山ロームである以外、灰褐色土である。堅緻部は壁際まで及ぶ。炉は3基あった。いずれも深さ4cm程度の断面皿上の浅い掘り込みであった。F3の中心部は際立って硬化していた。F1、2は重複しF1が新しい。南東コーナー部にあるP3は貯蔵穴と思われる。径34cm、深さ24cmの楕円形である。周堤帯は存在しない。柱穴は主軸にのるP1とP2のみ検出された。いずれも径は15cmと小さいものの深さ44cm、40cmと深い。

炭化材、焼土が覆土下層から床面直上にかけて検出された。北西コーナー付近を除き、壁際に多



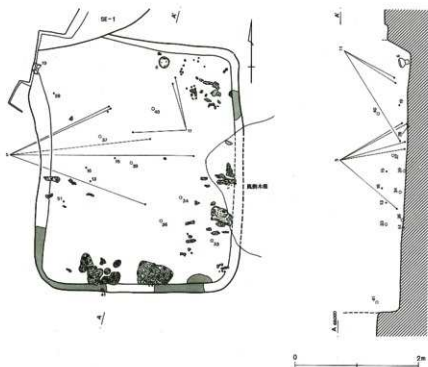
第58図 第22号住居跡

く分布しており、住居跡中央部は少量の分布に留まる。東壁際に最も集中するが、風倒木痕の影響のため、原位置を保っているとは言い難い。大多数の炭化材は脆弱化しており詳細は不明だが、部分的に面取り痕状の平坦面が観察できたものがある。1辺4cm前後の角材の可能性ある（第59図風倒木痕範囲内炭化材）。北東コーナー部および西壁に寄りかかるように出土した炭化材も角材状であった。出土状況から推定すると、最長の炭化材は44cmである。ただしいずれにもホゾ穴などは認められなかった。炭化材、焼土を同じく多量に出土した1号住と比較すると、床面に被熱痕がほとんど認められなかった点は一致する。ただし南壁を中心に壁面の被熱痕が著しかった。部分的には壁地山内3cmほど被熱の痕跡が認められた。

第22号住居跡出土遺物（第60～62図）

遺物は上下層くまなく出土したが、概して下層に大型の土器片が顕著であった。なお床面直上のものは5の壺形土器をはじめ数点にすぎない。

1～4、45～48は甕形土器である。いずれも覆土上層出土である。1は張りのない胴部からほぼ直立し口縁部上位でわずかに外反する。口唇部は平坦で縄文が押圧される。2は胴部の張りが強く、口縁部は緩やかに外反する。口唇部にハケメ状工具により刻みが施される。4は横位、斜位とやや

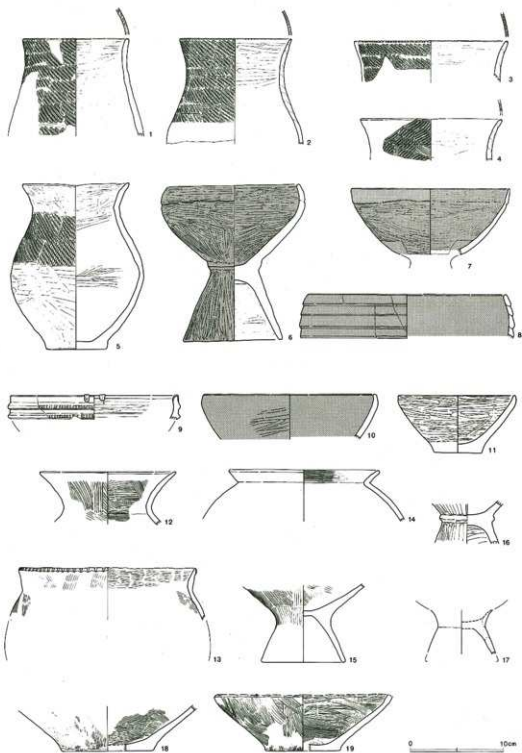


第59図 第22号住居跡遺物出土状況

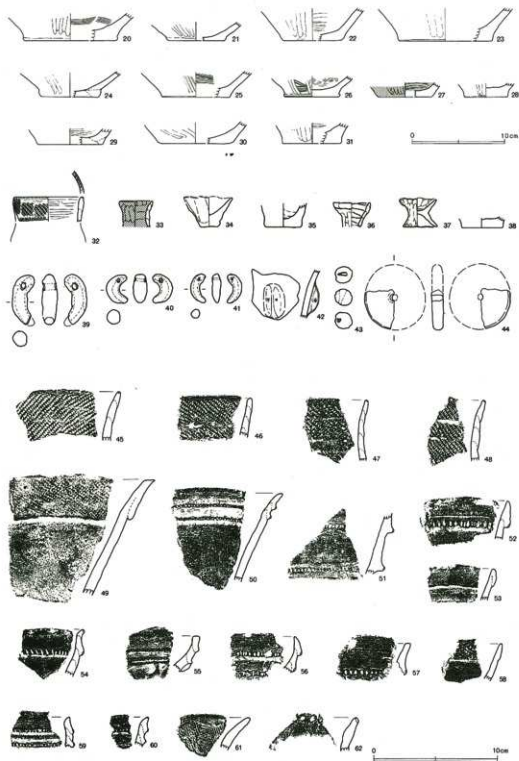
雑に縄文を施文し、部分的にハケメ調整が残る。

5および49～52は壺形土器である。5は第59図中で3点のドットが集中する部分では床面に密着して出土した。器形は器厚に差があるものの、2のような変形土器と相似している点が注目される。胴部上半に単節R L縄文が施文される。49は覆土上層より出土した。幅広の折り返し口縁と思われる。端部は広い平坦面が作出され口縁部に縄文が施文される。50はほぼ床直から出土した。2段の突帯を有し、細かい刻みが施される。

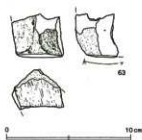
6～11、53～59は高杯形土器および鉢形土器である。6は住居跡北壁直下から床面よりわずかに浮いた状態で出土した。杯部は内湾し口縁部に1段の輪積痕を残し折り返し状口縁とする。口唇部はやや丸みをもち接合部には突帯を有する。7は覆土下層より出土した。杯部から口縁部にかけて緩やかにたちあがり、口縁部には6同様に1段の輪積痕を折り返し状口縁とする。ただし杯部から口縁部にかけては内湾せずに立ち上がる。器壁はかなり薄い。なお破片によって住居跡焼失時の二次焼成を顕著に受けている部位と、まったく受けていない部位がある。したがって住居跡の焼失時には破損していたと想定できる。8は覆土上層より出土した。杯部は内湾し口唇部はやや内ソギ状である。4段の輪積痕により低い突帯を作出する。外面の調整は丁寧なナデである。9は覆土上層から出土した。内ソギ状の口唇部に張り付け文をもつ。単位は不明である。なお突帯上の刻みは幅が狭く鋭利である。上下方向に押しきをしたものと思われる。10は単純口縁である。口縁部上位で小さく内湾する。赤彩痕が明瞭に残る。11は覆土下層から出土した。口縁部上位は小さく直立する。12は壺形土器の口縁部と思われる。頸部から口縁部にかけて大きく外反する。内外面ともハケメ調



第60图 第22号住居跡出土遺物 (1)



第61图 第22号住居跡出土遺物 (2)



第62図 第22号住居跡出土遺物 (3)

整である。13～15、17は台付甕である。13は外傾する口縁部と肩の張りがやや弱い体部からなる。口縁部は上位に移行するにしたがって器壁が薄くなる。口縁部に刻みをもつ。器面が粗れ不鮮明だが内外面ともハケメ調整される。14、15は住居跡ほぼ中央、覆土上層より出土した。同一個体の可能性が高い。頸部は「く」の字に強く外傾する。口縁端部は端面がなく丸みを帯びる。18、19は内外面にハケメ調整を残す変形土器の胴部下半である。19は擬口縁と思われる。なお12、18、19は胎土、焼成度合とも近似しており、他の共伴遺物と区分できる。

32は吉ヶ谷式変形土器のミニチュアである。胴部以下を欠損する。口径5.6cmと小型だが口唇部には縄文原体による押圧が施される。33～38はミニチュア土器である。ただし33、36は粘土紐のマキアゲ痕が認められ、他の者と成形上区別できよう。33は内外面に赤彩痕がわずかに認められる。

39～41の勾玉については39が覆土下層出土に対し、40、41は覆土上層より出土した。大きさ、胎土、焼成度合は39と40、41とで明確に異なる。42は吉ヶ谷式壺形土器の頸部に付されるいわゆる耳状突起である。指頭により器面にナデツケされており、接合痕は残されない。43は土玉である。孔は一方向から刀子状の断面三角形の工具により穿たれている。44は土製紡錘車である。3/4を欠損するが推定径5cm、孔径0.6cmである。63は棒形磨石である。基部、作業面とも欠損が多い。作業面は平滑で光沢をもつ。擦痕が明瞭に残る。

第22号住居跡出土土器観察表(1)

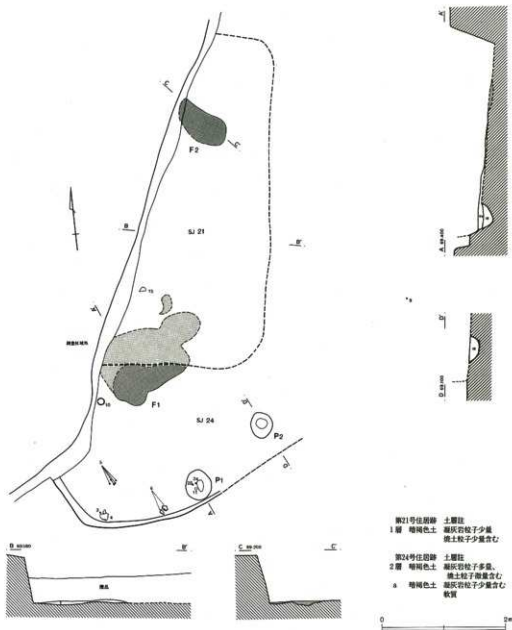
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	11.6	(10.2)	—	w(黒)・b(黒)	A	赤褐	50	単節RL 覆土
2	甕	11.9	(11.3)	—	g(黒)・w(黒)	B	褐	25	単節RL 覆土
3	甕	16.5	(4.3)	—	w(細)	B	鈍黄橙	20	単節RL 覆土
4	甕	15.0	(4.5)	—	w(細)	A	黒	15	単節LR 覆土
5	壺	11.2	17.5	6.5	b(細)	B	赤橙	80	単節RL 床直
6	高杯	14.0	16.5	10.5	b・g(細)	B	橙	95	赤彩 覆土下層
7	高杯	16.8	(7.0)	—	w(細)	二次 焼成	赤褐	80	赤彩 覆土
8	高杯	21.2	(4.2)	—	w(細)	B	鈍橙	5	赤彩 覆土
9	高杯	17.0	(2.5)	—	w(細)	A	橙	25	口唇に貼付文 覆土
10	高杯	9.2	(4.8)	—	w(細)	B	赤褐	5	赤彩 覆土
11	鉢	12.4	6.2	5.0	w・b(細)	A	赤橙	100	覆土下層
12	壺	14.4	(5.6)	—	w(細)	B	橙	20	内外面ハケメ 覆土
13	甕	15.8	(5.5)	—	g'(細)	B	淡赤橙	30	内外面摩耗 覆土上層
14	甕	18.8	(5.6)	—	w'g(黒-黒)	B	橙	25	内外面摩耗 口縁部接合痕残す 覆土
15	甕	—	—	(8.8)	w'g(黒-黒)	B	橙	80	覆土上層
16	高杯	—	(4.5)	—	g'(細)	B	橙	100	覆土上層
17	甕	—	(4.7)	—	g(粗)	B	橙	80	台部 覆土
18	甕	—	(4.8)	9.6	w(細)	A	鈍赤橙	50	外面ハケメ→ヘラミガキ 覆土
19	甕	18.4	6.0	8.0	w'(細)	A	鈍褐	50	内外面ハケメ 擬口縁? 覆土下層

第22号住居跡出土土器観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
20	一底部	—	(2.9)	9.8	w'(細)	B	鈍黄橙	25	覆土
21	一底部	—	(2.0)	6.2	w(細)	B	鈍黄橙	30	覆土
22	一底部	—	(3.4)	6.2	w(粗)	A	暗褐	15	覆土
23	一底部	—	(3.5)	10.0	w・g(細)	B	橙	20	覆土
24	一底部	—	(2.7)	6.2	w(細)	A	明赤褐	30	覆土
25	一底部	—	(2.8)	7.2	w(細)	B	橙	20	覆土
26	一底部	—	(2.3)	5.6	w(細)	B	鈍黄橙	45	覆土
27	一底部	—	(1.5)	5.6	g'・w(細)	A	赤	25	赤彩
28	一底部	—	(1.5)	4.5	w'(細)	B	鈍黄橙	100	床直
29	一底部	—	(1.7)	6.8	w(細)	B	橙	30	覆土
30	一底部	—	(2.3)	7.2	b・g'(細)	A	鈍赤褐	25	覆土
31	一底部	—	(2.2)	6.2	w(細)	A	橙	35	覆土
32	ミニ甕	5.6	(2.0)	—	g'・w(細)	A	鈍褐	25	ミニチュア 単筋RL 覆土
33	ミニ甕	2.7	(2.1)	—	w(細)	B	灰白	40	赤彩痕わずかに残る 覆土上層
34	ミニ鉢	3.8	2.4	1.4	w(細)	A	灰褐	80	覆土下層
35	ミニ底部	—	(1.9)	2.8	s・w(細)	B	鈍黄橙	90	覆土
36	ミニ鉢	2.9	(2.0)	—	w(細)	B	鈍黄橙	100	粘土ヒモ巻上明跡 床直
37	ミニ高杯	2.9	2.4	2.7	w(細)	B	鈍黄橙	90	覆土上層
38	ミニ底部	—	(0.9)	3.2	w(細)	B	鈍黄橙	30	覆土
39	土製瓦	—	—	—	b・w(細)	A	褐灰	90	(4.0)×1.2×1.2 7.08g 床直
40	土製瓦	—	—	—	w(細)	B	鈍黄橙	100	2.3×1.2×1.0 3.54g 覆土上層
41	土製瓦	—	—	—	b(細)	B	黒褐	100	2.3×0.7×0.7 1.42g 覆土上層
42	壺	—	—	—	w(細)	B	赤橙	100	耳状突起 覆土
43	土玉	長径1.5	—	短径1.2	w'(細)	B	橙	100	上孔三角形 下孔径0.2 覆土
44	紡錘車	直径5.2	厚0.9	—	w(細)	B	鈍橙	25	孔径(0.6)cm 重さ(7.98)g 土製 覆土
45	甕	—	—	—	w(細)	—	鈍黄橙	10	単筋LR 覆土
46	甕	—	—	—	s・w(細)	—	橙	—	単筋RL 覆土
47	甕	—	—	—	w(細)	—	橙	—	単筋RL 覆土
48	甕	—	—	—	w'(細)	—	暗褐	—	単筋RL 覆土
49	壺	—	—	—	w(細)	—	橙	—	単筋RL 覆土
50	壺	—	—	—	g'(細)	—	橙	—	頸部赤彩 刻み微密 覆土上層
51	壺	—	—	—	w(細)	—	鈍黄橙	—	突帯に刻み 覆土
52	壺	—	—	—	s・g'(細)	—	鈍黄橙	—	突帯に刻み 覆土
53	鉢	—	—	—	w(細)	—	橙	—	無文 覆土
54	高杯	—	—	—	s・g'(細)	—	灰白	—	赤彩 口唇、突帯に刻み 覆土
55	高杯	—	—	—	g'(細)	—	鈍橙	—	赤彩 突帯?下に豆瘤状貼付文 覆土
56	高杯	—	—	—	b(粗)	—	鈍赤褐	—	突帯に刻み 覆土
57	壺	—	—	—	w(粗)	—	鈍黄橙	—	突帯に刻み 覆土
58	高杯	—	—	—	b(粗)	—	鈍橙	—	単筋RL 覆土
59	高杯	—	—	—	w(細)	—	橙	—	赤彩 突帯間にも刻み痕 覆土
60	壺	—	—	—	b(細)	—	橙	—	突帯に刻み 覆土
61	壺	—	—	—	w(粗)	—	赤褐	—	覆土
62	甕	—	—	—	g'(細)	—	褐	—	覆土

第22号住居跡出土土器観察表

番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考
63	覆土上層	磨石	3.4	4.0	3.4	69.7	硬砂岩	

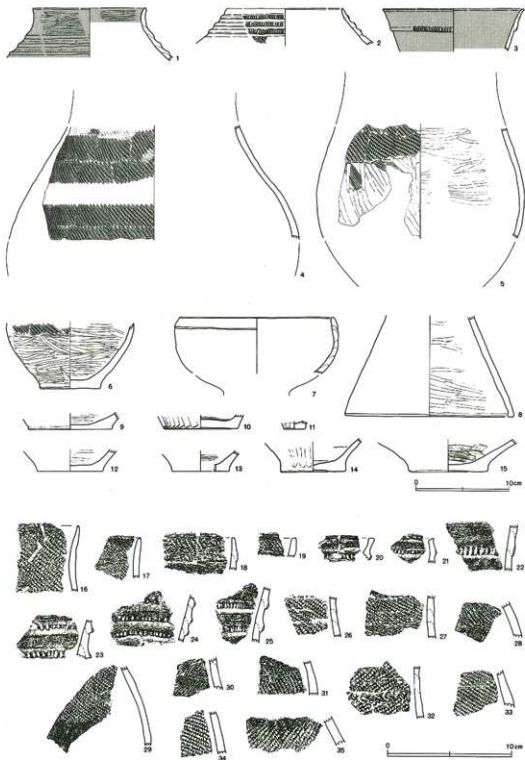


第63図 第21、24号住居跡

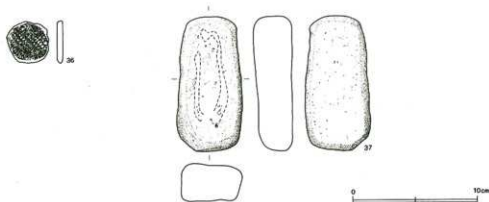
第21、24号住居跡（第63図）

第21、24号住居跡はJ-13グリッドの調査区際に所在する。確認面標高は68.7～69.3mである。第1住居跡群最南端に位置し、当遺跡がのる丘陵の尾根線に近い。現地形から見ると南側急斜面への地形変換点まで約20mの距離である。

当初は不明瞭ながらも住居跡状のプランが確認され、遺物も少量露出していた。しかし調査を進



第64図 第21、24号住居跡出土遺物 (1)



第65図 第21、24号住居跡出土遺物 (2)

めるに従い、覆土のほとんどは重機による攪乱土と判明した。部分的に最下層土が残存していたにすぎない。なお当初1軒を想定したもののF1とF2の比高差が30cmあることとF1を横切るようにわずかな立ち上がりを検出できたことにより2軒の重複と判断した。したがって24号住居跡に伴うF1は21号住に壊されたと推定され、24号住居→21号住居という新旧関係が想定される。

第24号住居跡

南西コーナー部のみ壁面を検出できた。確認面下30cmは攪乱により完全に壊されていた。住居跡の規模、主軸方位は不明である。

床面は残存していた南西コーナー部付近から見て地山灰褐色土と思われるが、単なる地山との判別が困難である。F1、P1、2の上面も壊されている可能性がある。F1は被熱硬化が顕著であるが2cmほどの焼土堆積である。P1は北壁直下に位置し、径51cm、深さ18cmである。貯蔵穴の可能性はある。覆土中より少量の遺物が出土した。P2は推定の北壁から0.54mに位置し、径42cm、深さ14cmである。

第21号住居跡

住居跡形態は、部分的に残存していた床面と遺物の分布範囲からの推定である。F2は深さ6cm、最大径90cmの不整楕円形で被熱硬化が著しかった。付近の面は床面とは判断しかねるため上面は壊されていると思われる。柱穴は精査に努めたが検出されなかった。

第21、24号住居跡出土遺物 (第64、65図)

前述したとおり、覆土のほとんどは攪乱土であり床面もほとんど残っていないため出土遺物がどちらの住居跡に帰属するか判別が困難である。

1、2は無頸壺形土器である。いずれも21号住の上層攪乱土中からの出土である。1は直線的な胴部上半から口縁部にかけて外反する。残存部位に3段の突帯を有する。2は3段の突帯を有し刻

みを施される。胴部上半は単節RL縄文が施文される。7は高杯形土器である。21号住上層攪乱土中から出土した。口縁部は折り返し状口縁である。36は土製円盤と思われる。割れ面は擦っている。胎土および施文される縄文から、吉ヶ谷式期の所産と考えられる。

37は砂岩製の砥石である。両面に擦痕が認められる。

第21・24号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	施文	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.2	(5.3)	—	w(細)	B	橙	15	赤彩 SJ21攪乱中
2	壺	12.4	(3.7)	—	w(細)	C	橙	15	突帯に刻み胴部単節RL SJ21攪乱中
3	壺	15.0	(4.6)	—	b・w(細)	B	浅黄橙	10	赤彩 突帯に刻み SJ24下層
4	壺	—	(12.2)	—	g(粗)・w(粗)	B	橙	15	内面摩耗 単節RL SJ24下層
5	甕	—	(12.7)	—	g'(細)	C	鈍橙	15	単節RL SJ24下層
6	壺	—	(7.1)	6.2	b(粗)・w(粗)	B	橙	30	単節RL SJ24下層
7	高杯	16.6	(6.0)	—	w(粗)	B	橙	25	内外面摩耗 SJ21攪乱中
8	高杯	—	(10.8)	18.0	w(細)	A	橙	20	外面摩耗 SJ21攪乱中
9	一底部	—	(1.8)	8.8	g(細)	B	橙	50	SJ21攪乱中
10	一底部	—	(1.5)	7.8	w(細)	B	鈍橙	100	SJ24下層
11	一底部	—	(0.9)	2.3	w(細)	C	鈍黄褐	100	ミニチュア P1中
12	一底部	—	(2.4)	6.8	g(細)	B	褐灰	50	SJ21攪乱中
13	一底部	—	(2.2)	6.0	w(細)	B	橙	30	SJ21攪乱中
14	一底部	—	(3.5)	6.8	b'(細)	B	浅黄橙	40	SJ21攪乱中
15	一底部	—	(3.5)	8.2	w(細)	C	橙	30	SJ21下層
16	甕	—	—	—	w(細)	鈍褐	鈍褐	—	単節RL SJ21攪乱中
17	甕	—	—	—	w(細)	鈍褐	鈍褐	—	単節RL SJ21攪乱中
18	高杯	—	—	—	w(細)	橙	橙	—	単節RL SJ21攪乱中
19	高杯	—	—	—	g'(細)	鈍黄橙	鈍黄橙	—	単節RL SJ21攪乱中
20	壺	—	—	—	w(細)	鈍赤褐	鈍赤褐	—	突帯に刻み SJ21攪乱中
21	高杯	—	—	—	w(細)	橙	橙	—	突帯に刻み SJ21攪乱中
22	壺	—	—	—	b'(細)	鈍橙	鈍橙	—	突帯に刻み SJ21攪乱中
23	壺	—	—	—	w(細)	鈍橙	鈍橙	—	突帯に刻み P1中
24	壺	—	—	—	g(粗)	浅黄橙	浅黄橙	—	突帯に刻み P1中
25	壺	—	—	—	g'(細)	暗赤褐	暗赤褐	—	突帯に刻み SJ21攪乱中
26	甕	—	—	—	g'(粗)	黒褐	黒褐	—	単節RL SJ21攪乱中
27	甕	—	—	—	w(細)	鈍赤褐	鈍赤褐	—	単節RL SJ21攪乱中
28	壺	—	—	—	w(細)	鈍橙	鈍橙	—	赤彩 単節RL、内面ハケメ SJ21攪乱中
29	甕	—	—	—	w(細)	暗褐	暗褐	—	単節RL SJ21攪乱中
30	甕	—	—	—	w(細)	鈍黄橙	鈍黄橙	—	単節LR SJ21攪乱中
31	甕	—	—	—	b(粗)・w(粗)	鈍黄橙	鈍黄橙	—	単節RL SJ21攪乱中
32	甕	—	—	—	s・g'(細)	鈍赤褐	鈍赤褐	—	単節LR SJ21攪乱中
33	甕	—	—	—	w(細)	橙	橙	—	単節RL SJ21攪乱中
34	甕	—	—	—	w(細)	暗褐	暗褐	—	単節RL SJ21攪乱中
35	甕	—	—	—	s・w(細)	鈍黄橙	鈍黄橙	—	単節LR SJ21攪乱中
36	土製円盤	径3.5	厚0.5	—	w(細)	暗褐	暗褐	100	単節RL? SJ21攪乱中

第21号住居跡出土石器観察表

番号	出土地点	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考
37	覆上下層	砥石	10.8	5.1	3.0	380.6	砂岩	